

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査報告(I)

与島西方遺跡

1979・3

香川県教育委員会

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査報告(I)

与島西方遺跡

1979・3

香川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査のうち、坂出市与島西方遺跡の発掘調査報告である。ただし、出土遺物点数が膨大で、今なお十分な整理作業が遂げられていないため、概況報告にならざるを得なかった部分もある。なお、B地区については、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(I)―与島西方遺跡―」(昭和53年8月)に記載してあるので、本書では省略した。
2. 本調査は、本州四国連絡橋公団からの委託で、香川県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、文化行政課文化財調査係長松本豊胤・同課職員秋山 忠・牟礼良典・斎藤賢一・沢井静芳・六車 功・寒川知治・唐木裕志・藤好史郎・真鍋昌宏・大砂古直生が担当し、白本 清・西村尋文・町川義晃が補助した。
4. 本書は主として、牟礼・唐木・藤好・真鍋が作成し、同課嘱託西山佳代子が補助し、また同課職員山本哲也の協力を得た。
5. 調査の実施にあたって、与島瀬戸大橋対策協議会・同自治会はじめ地元の方々から多大の協力を受け、ここに記して厚く感謝の意を表します。

目 次

はじめに	1	第IV章 調査の概要(2)	54
第Ⅰ章 遺跡の環境と立地	3	第1節 旧石器時代の遺物	54
第1節 遺跡の位置	3	(1) ナイフ形石器	54
第2節 史的背景と周辺の遺跡	3	(2) 翼状剝片	58
第Ⅱ章 調査について	12	(3) 翼状剝片石核	59
第1節 調査の経過	12	(4) 横長剝片石核	60
第2節 調査区の設定	15	(5) 縦長剝片	61
第3節 調査の方法	15	(6) 縦長剝片石核	62
第Ⅲ章 調査の概要(1)	19	(7) スクレイパー	63
第1節 土層序について	19	(8) 舟底形石器	64
第2節 遺物出土状況	20	(9) 叩き石	64
(1) 層序掘地区の状況	20	(10) 円盤状石核	64
(2) 平面的分布の状況	23	(11) 小結	64
(3) 層位的分布の状況	26	第2節 石 鑄	67
(4) 1列における分布の状況	32	第3節 弥生式土器	75
(5) 小結	47	第4節 その他の遺物	79
第3節 遺構	47	おわりに	81
(1) ピット1	48	図 版	
(2) ピット2	48	写真図版	
(3) ピット3	51	付 表	

挿 図 目 次

第1図 与島位置図・表層地質図	5	第19図 Ah ₁ 区平・断面遺物投影図	39
第2図 与島の遺跡	7	第20図 Ai ₁ 区平・断面遺物投影図	40
第3図 古地形復原図	9	第21図 Aj ₁ 区平・断面遺物投影図	41
第4図 西方遺跡発掘調査区	13	第22図 Ak ₁ 区平・断面遺物投影図	42
第5図 土層柱状図	19	第23図 Al ₁ 区平・断面遺物投影図	43
第6図 A地区遺物出土状況図	21	第24図 Am ₁ 区平・断面遺物投影図	44
第7図 Ah ₁ 区層別遺物出土状況図(1)	24	第25図 ピット1 実測図	48
第8図 Ah ₁ 区層別遺物出土状況図(2)	25	第26図 ピット1 出土ナイフ形石器実測図	48
第9図 Ah ₀ 区北壁断面遺物投影図	26	第27図 Ag ₃ 区南壁断面図(ピット2)	49
第10図 Ah ₁ -e 区北壁断面遺物投影図	27	第28図 ピット2 復原図	49
第11図 Ah ₀ -e 区北壁新面遺物投影図	29	第29図 ピット2 出土石器実測図	50
第12図 Ah ₀ 区北壁断面遺物投影図	32	第30図 Af ₃ 区西壁断面図	52
第13図 Ab ₁ 区平面遺物投影図	33	第31図 ピット3 実測図	52
第14図 Ac ₁ 区平・断面遺物投影図	34	第32図 石器実測図	68
第15図 Ad ₁ 区平面遺物投影図	35	第33図 弥生式土器実測図	78
第16図 Ae ₁ 区平・断面遺物投影図	36	第34図 時期不明遺物実測図	79
第17図 Af ₁ 区平・断面遺物投影図	37	第35図 神功開宝	80
第18図 Ag ₁ 区平・断面遺物投影図	38	第36図 不明石製品実測図	80

表 目 次

第1表 A地区遺物出土数一覧表	18	第13表 翼状剝片計測表	59
第2表 屬別遺物包含状況	20	第14表 翼状剝片石核の剥離痕計測表	60
第3表 Ah ₁ 区出土ナイフ形石器型式別割合	26	第15表 横長剝片石核の剥離痕計測表	61
第4表 1列出土ナイフ形石器型式別割合	45	第16表 縦長剝片計測表	62
第5表 ナイフ形石器型式別欠損率表	46	第17表 横長剝片石核の剥離痕計測表	63
第6表 1列出土ナイフ形石器計測表	47	第18表 石器計測表(1)	69
第7表 ナイフ形石器(A型) 計測表	56	第19表 石器計測表(2)	69
第8表 ナイフ形石器(B型) 計測表	57	第20表 土器型式相対年表	71
第9表 ナイフ形石器(C型) 計測表	57	第21表 石器形式別出土率表	71
第10表 ナイフ形石器(D型) 計測表	57	第22表 石器一覧表	73
第11表 ナイフ形石器(E型) 計測表	57	第23表 土器観察表	76
第12表 ナイフ形石器(F型) 計測表	58	第24表 出土土器型式別一覧表	78

図 版 目 次

図版1 ナイフ形石器(A型)	図版10 横長剝片石核
図版2 ナイフ形石器(B型)	図版11 横長剝片石核
図版3 ナイフ形石器(C型・D型)	図版12 縦長剝片
図版4 ナイフ形石器(E型)	図版13 縦長剝片
図版5 ナイフ形石器(E型)	図版14 縦長剝片石核
図版6 ナイフ形石器(F型・異石材質)	図版15 スクレイパー
図版7 翼状剝片	図版16 スクレイパー
図版8 翼状剝片石核	図版17 舟底形石器・円盤状石核
図版9 翼状剝片石核	図版18 叩き石

写 真 図 版 目 次

第1図 A地区発掘終了写真	第29図 ナイフ形石器（F型）
第2図 土層序（Ah列 北壁）	第30図 ナイフ形石器（異石材質）
第3図 遺物出土状況（Af ₁₊₂ 区）	第31図 翼状剥片（A型）
第4図 遺物出土状況（第3・4調査区群）	第32図 翼状剥片（A型）
第5図 遺構（ピット1・2）	第33図 翼状剥片（B型）
第6図 遺構（ピット3）	第34図 翼状剥片（C型）
第7図 主要遺物出土状況	第35図 翼状剥片石核（A型）
第8図 ナイフ形石器（A型）	第36図 翼状剥片石核（A型）
第9図 ナイフ形石器（A型）	第37図 翼状剥片石核（A型）
第10図 ナイフ形石器（A型）	第38図 翼状剥片石核（B型）
第11図 ナイフ形石器（A型）	第39図 横長剥片石核
第12図 ナイフ形石器（A型）	第40図 横長剥片石核
第13図 ナイフ形石器（B型）	第41図 縦長剥片
第14図 ナイフ形石器（B型）	第42図 縦長剥片
第15図 ナイフ形石器（B型）	第43図 小型縦長剥片
第16図 ナイフ形石器（B型）	第44図 縦長剥片石核
第17図 ナイフ形石器（C型）	第45図 縦長剥片石核
第18図 ナイフ形石器（D型）	第46図 スクレイバー
第19図 ナイフ形石器（D型）	第47図 スクレイバー
第20図 ナイフ形石器（D型）	第48図 舟底形石器
第21図 ナイフ形石器（E型）	第49図 叩き石
第22図 ナイフ形石器（E型）	第50図 円盤状石核・弥生式土器
第23図 ナイフ形石器（E型）	第51図 弥生式土器
第24図 ナイフ形石器（E型）	第52図 石 猪
第25図 ナイフ形石器（E型）	第53図 石 猪
第26図 ナイフ形石器（E型）	第54図 石 猪
第27図 ナイフ形石器（F型）	第55図 不明石製品
第28図 ナイフ形石器（F型）	

はじめに

備讃瀬戸のほぼ中間に位置する坂出市与島には、人類の足跡を残した数多くの遺跡がある。なかでも氷河期頃の旧石器時代に係わる遺物は与島の東方・西方に広く分布し、昭和初期頃から採集されている。香川県教育委員会は昭和35年と48年に、小範囲ではあったが、発掘調査を行い、西方遺跡においては石槌神社の所在する平坦部で遺物の密集が見られることを確認した。また、本州四国連絡橋児島～坂出ルートの架橋計画の具体化に伴い、香川県教育委員会は昭和51～52年にわたり、与島内の同計画路線沿線地区における埋蔵文化財について、予備調査を実施し、遺跡の範囲や概要を把握するとともに、その成果を「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告」(I), (II)で一般に周知した。

今回の報告は、昭和52年11月1日付で本州四国連絡橋公団との間で締結された「海峡部埋蔵文化財発掘調査委託契約」に基づき、南北約400m・総面積15,000m²に及ぶ与島西方遺跡内でとりわけ重要視されていた石槌神社のある標高70mの平坦部とそれに続く南東側斜面で実施したものである。ここでの概況は「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(I)与島西方遺跡」(昭和53年)〈以下概報と略す〉で公表している。

調査対象面積3,000m²、発掘作業員延べ7,000人、出土遺物総数14万余点を数える本調査は、約1年を経た昭和54年1月末日に終了した。

なお、今年度、当初より調査に係わる契約や調査器財・物品の管理及び整理作業の用に供するため「香川県教育委員会埋蔵文化財坂出連絡事務所」を設置した。

第Ⅰ章 遺跡の環境と立地

第1節 遺跡の位置

与島は、瀬戸内海……備讃瀬戸のほぼ中央に位置する。また、この島は、近傍の本島・牛島・横石島などとともに塩飽諸島（いわゆる塩飽七島）のひとつに数えられ、その東端を占める。島は周囲約4.2kmで、採石の盛んなところである。全島のほとんどが花崗岩を基盤としており、一部低地にあっては礫が堆積物による表層地質を構成している。^{註(1)} そして、東西に対峙するように南北に伸びる二本の尾根丘陵部と、その間にあるわずかばかりの低湿地部からなり、島名の由来を示している。この二本の丘陵部は、東側が東方^{註(2)}、西側が西方^{註(3)}と呼ばれ、この西方が今回の調査対象区域である。

後期旧石器時代は、地質年代では洪積世末期ごろにあたる。この頃の瀬戸内海地域は、ウルム氷期^{註(4)}であり、海面が現在より50～150m低下していたといわれている。

これに基づき、最低の海退である海面低下50mとして古地形を復原したのが第3回古地形復原図^{註(5)}である。これを見ると、塩飽諸島はすべて本州及び四国と陸つづきになり、備讃航路筋に断続した湖沼ができる。また、与島西方遺跡出土石器の大半を占めるサヌカイトの原産地である金山・城山・五色台への経路（徒歩による）を考えると、与島南方に広がる湖を東西に迂回する二本の道が想像できる。しかし、比高差などを勘案すると西廻り経路が通いやすいようである。

逍遙はこれくらいにして、さらに、瀬戸内海が最近の地質時代に陸上であった徵証がある。それは、番ノ洲埋め立てに使われた備讃航路の浚渫土砂に径数10cmの和泉層群起原の河成円礫が含まれていたことである。^{註(6)}

やがて、縄文早期に入り、瀬戸内海は海進が始まり、一時は現水位より20mも高くなることもあったが、その後はわずかの海進・海退をくりかえして現在の瀬戸内海が形成されるに至った。

与島は瀬戸内式気候に属し、年平均降水量は約1,200ミリ、年平均気温は約15℃である。現在の島の植生は、アカマツ林・クロマツ林及びクロマツ混交林などであり、A地区はアカマツ林である。^{註(7)} また、A地区は強度の侵食地形を呈している。それに、この島は花崗岩を石材として切り出す島で知られ、島内各所で採石が行われているため、採掘の跡が無残にも岩肌を露わにしており旧地形がわからなくなっている所が多い。A地区でも、近接して石切丁場があって、海上からこの地区を見ると、あたかも絶壁上の遺跡の観を呈する。

第2節 史的背景と周辺の遺跡

与島は、瀬戸内海の中央部にあって、古来歴史の舞台にたびたび登場し、時にはスポットライトを浴び、また、その流れを変える役割を果たしたこともあるところであった。

この島にも、旧石器時代から現代に至る連続として続く人類の営みの痕跡がある。

サヌカイト製を大半とする石器類は、すでに古く、昭和初期に採集されている。^{註(8)} しかし、これらの中に旧石器時代の遺物があることは、昭和30年代まで知られないままであった。やがて、旧石器

への関心が高まり、昭和40年前後頃、与島中学校の教師・生徒が中心となり石器の表面採集が盛んに行われた。それらの採集石器類の中には、サヌカイトに混じり黒曜石も存在する。⁽⁹⁾

その間、昭和34年、川畠迪氏が与島表採の旧石器を報告した。翌35年8月、香川県教育委員会は、与島西方及び東方の両丘陵尾根上に小規模のトレンチ発掘調査を実施した。⁽¹⁰⁾このときA地区内にも調査区が設けられ、多数の石器が収集された。さらに、昭和48年、香川県教育委員会は、東方北端部で発掘調査を行った。⁽¹¹⁾

昭和36年8月、香川県教育委員会が、東方大洲の旧与島診療所内において発掘調査を行った。⁽¹²⁾これにより、師楽式土器片・貝・魚骨・獸骨等を検出している。この調査を契機に、島内外の人々の手により繩文・弥生・古墳時代の土器等の収集がおこなわれるようになった。そして、東方タテバ港付近で製作用粘土を伴う奈良時代の窯跡も発見されたといわれる。⁽¹³⁾

さて、与島を含む塩飽諸島が歴史の文献上で活躍するのは室町時代も後半、応仁の乱（西暦1467～77年）以後のことである。もっとも、塩飽人は、それ以前から、彼らの強大な海上軍事力と優秀な操船技術や経験を駆使し、京へ向う物質の強奪をしたり、時々の権力者の支配の下に水軍として参加したり、また、平和時には瀬戸内航路の西国と京（大坂）を結ぶ輸送力の大半を担つたりもした。やがて、石山（本願寺）戦争（1576）の軍功により、従前からの「触れ掛け」の特権を安堵（信長朱印状）⁽¹⁴⁾され、そして豊臣秀吉朱印状により御用船方となり、さらに、江戸時代になり塩飽人名の成立へと塩飽諸島は発展する。

このように塩飽人は、困難な海上運輸に從事するため信仰心は厚く、⁽¹⁵⁾本島にある奈良時代草創といわれる正観院觀音寺に代表されるごとく中央色の濃い仏教が広まっていた。与島には江戸時代に2ヶ寺があった。正観院末茲眼山法林寺（本尊=十一面觀音）、同末補陀洛山西光寺（本尊=阿弥陀如来のち觀音）である。⁽¹⁶⁾

周辺の遺跡は、第2図与島の遺跡を参照されたいが、ここで、51・52年度予備調査の与島における成果をまとめておくことにする。

○51年度予備調査

調査区は、西方丘陵の南部標高49mの小丘陵の東斜面（第II調査区）と、それから北東に派生する低丘陵及びその先端平地部（第I調査区）から成る。

明確な遺構は検出されず、ために遺物は遺構に伴うものではなかった。

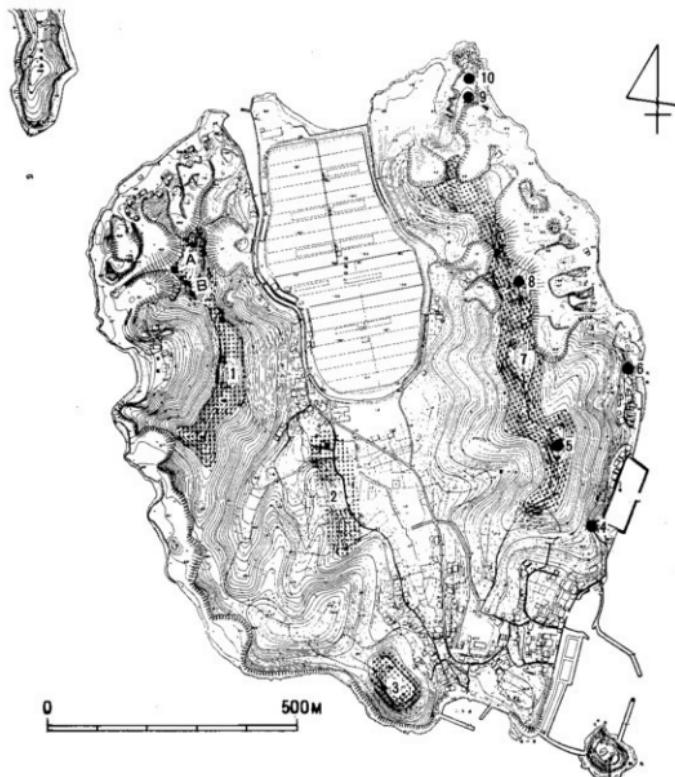
丘陵部からは、主に旧石器時代のサヌカイト製石器類（ナイフ形石器・翼状剝片など）と少量のチャート片・黒曜石、繩文時代のサヌカイト製スクレイパー・石鏃が出土した。また、丘陵裾部の鎌倉時代と考えられる良好な包含層から輸入陶磁器を含む土器・漁具・宋銭等が出土し、さらに、平地部から繩文時代後期の磨消繩文土器片の出土を確認している。⁽¹⁷⁾

○52年度予備調査

調査区を、西方A・B調査区（本調査）及びそれに続く尾根上に延長約400mに涉って設けた。遺構の確認はできなかつたが、遺物出土状況では、やはり、サヌカイト製石器を中心にして弥生式土器片等を検出し、第2・3層に石器・石片の集中をみ、遺物数も100点/m²以上（5トレンチ）あるなど本調査への指標となつた。

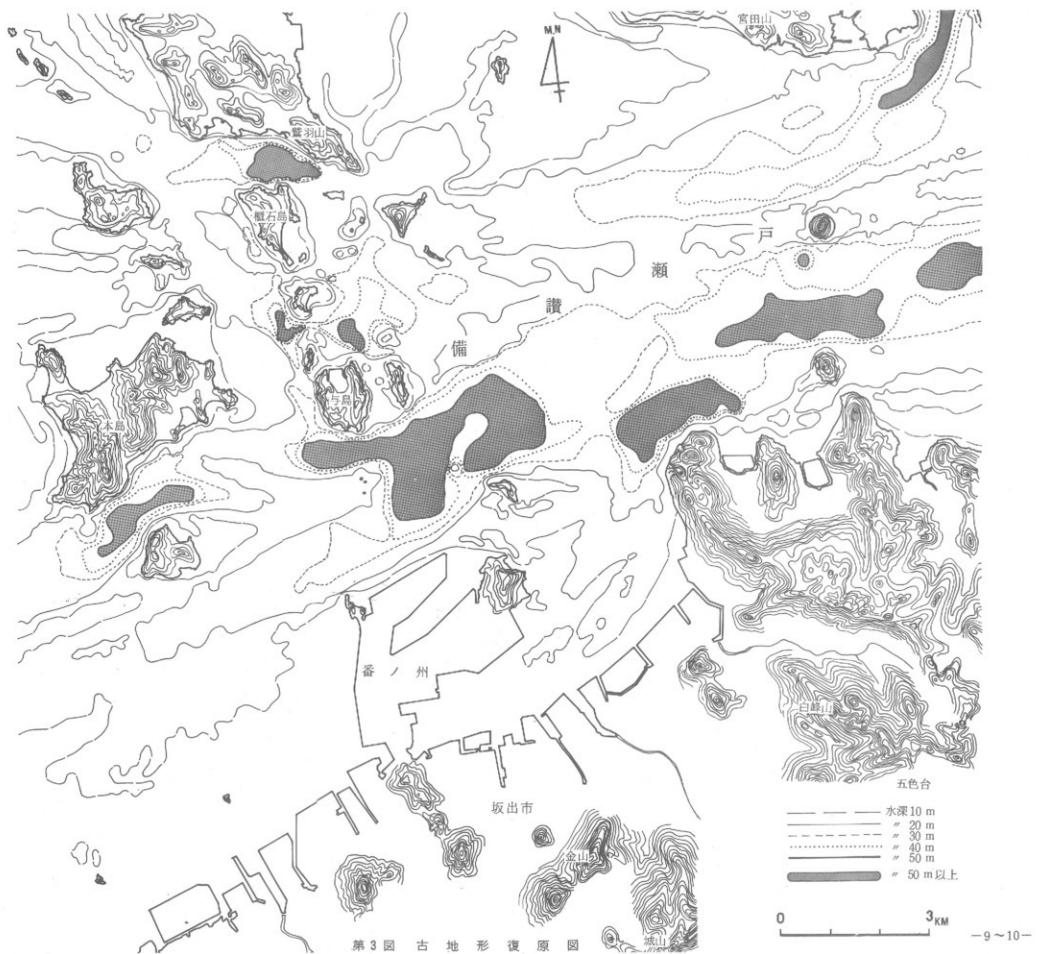
（唐木）





第2図 与島の遺跡

図番号	遺跡名	概要
1	西方遺跡	本報告書調査対象地区を含む旧石器散布地
2	楓文・中世遺物包蔵地	昭和51年度予備調査
3	シノダ遺跡	旧石器散布地
4	タバ遺跡	奈良時代以降の土器片多数出土
5	山の神遺跡	旧石器多数出土
6	大洲浜遺跡	師楽式土器片多数・貝・駁骨等出土
7	東方遺跡	旧石器散布地
8	ミドロ遺跡	旧石器多数出土
9	長崎鼻石組遺構	河原石による方形二段組遺構。性格不明
10	長崎鼻古墳	組合せ式箱式石棺二基(1基露出、1基崩壊消滅)

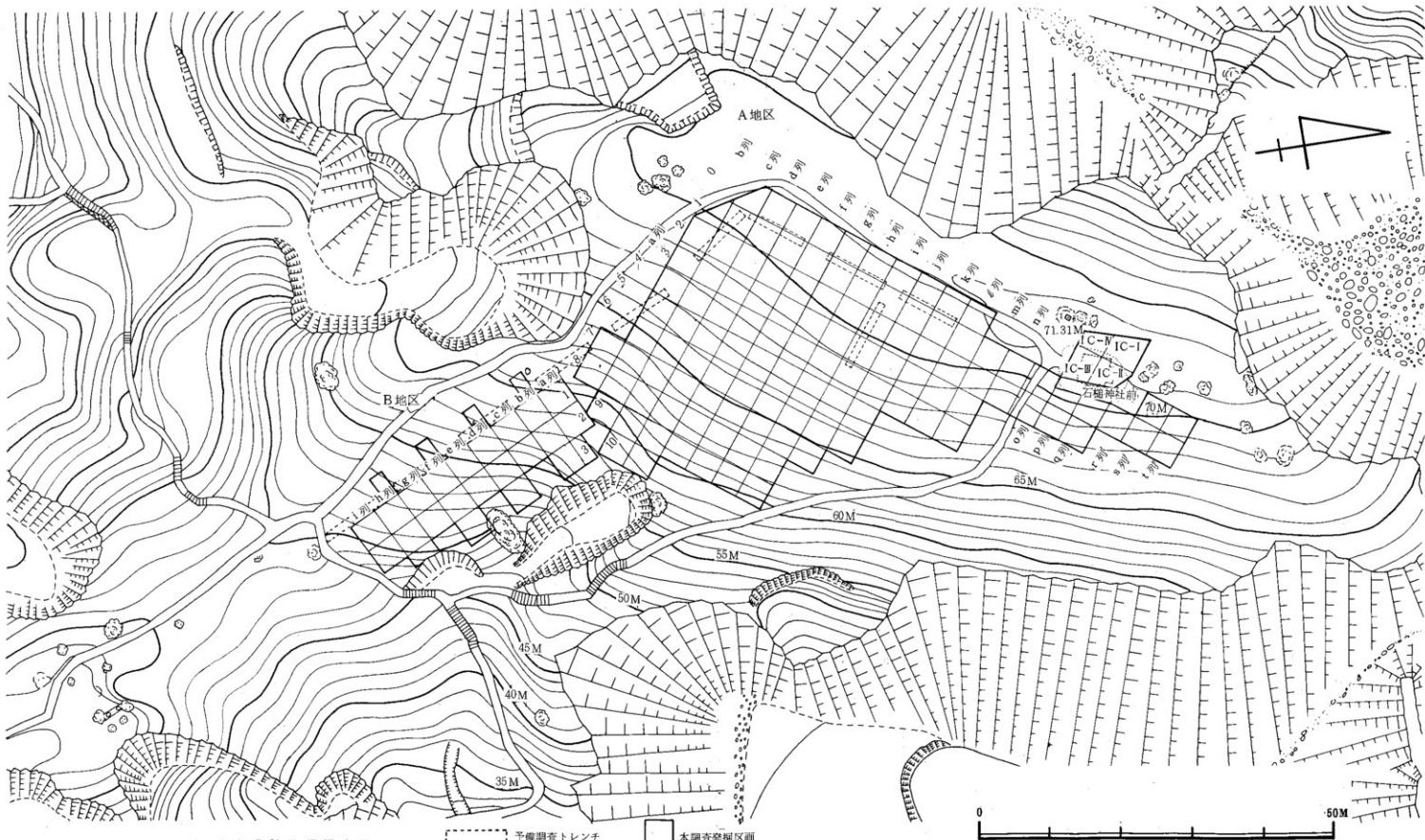


- 注(1) 香川県・岡山県国土調査「土地分類基本調査」による 第1図表層地質図参照のこと。
- 注(2) 香川県『香川の自然』昭和50年 第3図古地形復原図参照のこと。
- 注(3) 海上保安庁作成の海図を参考に等深線を10mごとに結線した。50m以下のアミ目部分が湖沼であったと推定できる。
- 注(4) 第1図表層地質図参照のこと。サヌカイトは、新生代（新第三紀）中新生一讃岐層群（讃岐火山岩類）に属し、玻璃質で鉄分を多く含み、緻密・堅硬な安山岩質岩である。純粹のサヌカイトは、白峰山・五夜ヶ岳・西山（以上五色台山系）・城山・金山にしか存在しない。
- 注(5) 高科哲男「蛍光X線法によるサヌカイト石器の原産地比定」
この報告によると、次の3点が挙げられる。
●与島サヌカイト石器は坂出市金山産である。
●金山産サヌカイトは、広く、西は広島から東は加古川まで、さらに北へ丹後半島までもたらされている。
●從来言われてきた五色台産サヌカイトは余り使用されていない。
- 注(6) 注(2)と同書
- 注(7) 注(2)と同書及び注(1)と同書
- 注(8) 坂出市立与島小学校保管
- 注(9) 坂出市立与島中学校保管
- 注(10) 坂出市「坂出市全図」「史跡・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在図」
- 注(11) 高橋邦彦「坂出市与島町西方及び東方遺跡の調査報告」「文化財協会報」特別号第5集
- 注(12) 香川県教育委員会『与島東方遺跡』香川県埋蔵文化財調査報告1973
この時、石器3、剝片23点・土器片若干数を採集、特に、全長14.5cm・最大幅5cm・厚さ1.4cmの尖頭器、全長5.8cm・最大幅2.5cm・厚さ0.8cmの丁寧に調整が施された有舌尖頭器（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵）が注目される。
- 注(13) 森井正『坂出市師楽式与島貝塚』香川県文化財調査報告第7。
- 注(14) このことは、川畑達氏の御教示による。
- 注(15) 言い伝えによると、塩飽の船が港に停泊するとき、または、海上を航行するときには、船を中心にして左右75尋の海域を自由航行できるとされている。
これに対し、眞木信夫氏は從来の説に反対して、「織田信長朱印状は、塩飽船の海上における特権の確認状ではなく、塩飽船の海賊行為取締の沙汰書である」と二・三の論拠を挙げて論ぜられている。これについては、まだ議論の余地があるようだが、しかし、後の豊臣秀吉朱印状は、あきらかに、塩飽人の優秀さを特に利用し御用船方としたものであり、海賊の発展的解消と転換を指向したものである。
- 注(16) 「塩飽諸覚覚」『香川叢書』Ⅰ。
- 注(17) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(I)昭和52年を参照のこと。
- 注(18) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(II)昭和53年を参照のこと。

第Ⅱ章 調査について

第1節 調査の経過

- 52年11月 本州四国連絡橋公団と「海峡部埋蔵文化財発掘調査委託契約」締結、発掘調査計画決定
発掘調査器材の搬入。
- 12月 調査区域の現地確認、B地区で27調査区画設定。
- 53年1月 B地区の発掘作業着手。(A地区平坦部に近い高所ほど出土遺物数が多く1m³あたり、7
～8個が最高。)
- 2月 排土をA地区平坦部へ移動のためベルトコンベア搬入。
第1調査区画群をA地区内南側斜面部とし、27調査区画を設定。発掘に着手(B地区に
比べ、多量の遺物出土を見るため、地山までの平面分布実測図が10枚以上になる調査
区画あり)。
- 3月 B地区調査終了(第1調査区画群の排土で埋戻しを行う。)
- 4月 「香川県教育委員会埋蔵文化財坂出連絡事務所」設置。
A地区第2調査区画群平坦部において花崗岩の礫群検出(北側調査区画に続く状態であ
り、遺構の可能性も考えられたため、掘り下げる一時中断し、この範囲のみ第3調査区
画群と並行して調査することとした。)
- 5月 A地区第2調査区画群(A地区h～jの5列以下)10調査区画で発掘開始(第1調査区画
群の5列以下と土層序においてほぼ同じだが、出土遺物数は少ない。)
- 6月 第1調査区画群調査終了(平坦部ほど遺物は多く、総点数約35,000余。)梅雨期に備え
B地区・第1調査区画群下方に簡易な流土防止柵を設置。
- 7月 第2調査区画群の調査終了。
第3調査区画群で調査開始。(最大面積を有する区画群であり、遺構の存在が十分予想さ
れるため層別に発掘するつもりであったが、全面に多量の遺物が出土したので層別調査
を続けられなかった。)
- 8月 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(I)与島西方遺跡」刊行。
石槌神社付近(o～tまで)を第4調査区画群とし、10調査区画設定。
- 9月 台風のため、遺物出土地点を示す目印の箸・札が飛散し、修復のため作業が遅れること
もあり。
- 10月 第4調査区画群で発掘着手(包含層薄く、最も遺物の多い所でも8個/m³である。)
- 11月 石槌神社東方へ移転。跡地をIC区とし4調査区画設定。
礫群周辺区画の畦畔を除去し、全景写真・実測を行う。
- 12月 層序掘りをAf調査区画で実験的に始め、第5調査区画群(Ad～gの3列以下17区画)
全域で採用することを決定。
礫群は断面観察の結果、花崗岩脈が風化し帶状に配列している自然のものと判明。
第3調査区画群内で遺構(d₄区、g₂区、e₃区でピット)検出作業。
- 54年1月 第3・4・5調査区画群の全景写真撮影後、埋戻し作業を行い、A地区的調査終了。



第4図 西方遺跡発掘調査図

----- 予備調査トレンチ

■ 本調査発掘区画

第2節 調査区の設定（第4図）

今回の調査で対象とする区域は与島西方遺跡の北端に位置し、最大値をとるならば南北約90m、東西約80mで標高50～70mの範囲にある。調査区域周辺は南側を除いて石材業者による採石のため切り立った崖面が迫るほどに削取され、現在でも北西側の丁場では作業が進められている。そのため残存する自然地形は、今回の調査区域とこれに続き南方に延びる尾根筋にしか見られない。調査区域の地形を詳細に見ると、西方丘陵の鞍部（標高50m）より北西にあがる斜面とそれに続く標高約70mの平坦部にわかれる。平坦部の平均的な幅は、採石によって狭くなっている一部を除けば約15mほどで、それが南北方向に約90m伸びている。斜面部の傾斜角は、平坦部に近い1～2列あたりで約15度前後であり、標高60m（8～9列）近辺で25度ぐらいを示す。

発掘調査は4m方格の調査区画を調査区全域に広げ、全面発掘することを原則とした。また、調査区画設定のための基軸線は、地形や予備調査での基軸線との関係を考慮して、尾根筋方向に平行させることとした。その結果、調査区域を石塙神社の所在する標高70mの平坦部及びそれより南東方向に下り単純傾斜をなす針面部と、南方向と東方向に傾き複合斜面を形成する標高50～60mの区域に分割し、調査の都合上、前者をA地区、後者をB地区と命名した。A地区南東部下半の斜面は、平坦部の尾根筋とその南端から南東に下降する尾根筋との谷筋にあたり、かなり内曲した地形をなす。

A地区的基軸線は真北より約36度東に偏し、南から北にかけて4mごとにa～zまで、西から東にかけ0～10までの杭打ちを行い、199の調査区画を数える。ただ、発掘作業の安全性や遺物・遺構の出土状況から考えて実質的に発掘調査したのは119区画である。B地区的基軸線は真北より約27度西にふれ、基軸線方向で上方から下方にa～iまで、尾根筋から下方に向かう0～3までの杭打ちをして、27調査区画を設定した。

第3節 調査の方法

低木、下草の繁茂する松林の自然景観を急激に変えないため、また、発掘完了後の埋戻し作業を容易にするための排土置場の確保や調査の円滑な運営を進めるために、調査区域を6調査区画群に分けた。そのうち、一番広い面積を有したものは、遺構の存在が想定されていた平坦部とそれに連なり微傾斜を示す第3調査区画群で、50区画を数える。各単位とも伐採後、地形測量と発掘前の全景写真撮影をし、発掘に着手した。発掘後は、完了写真を撮り他の調査区画群の排土で埋戻しを行った。

各調査区画における作業は、発掘→遺物検出→写真撮影（区画内の遺物分布を示す全景写真と石器等出土状況を示す部分写真）→遺物の分布実測→遺物の取り上げまでの手順で地山直上まで層別に行い、最後に各調査区画の北壁と西壁の断面実測、写真撮影を実施することとした。ただし、複合斜面をなし傾斜の急なB地区では断面図への遺物出土地点投影に正確さを期すため、基軸線に直交する方向で各調査区内を2分する畦部を設け、それの西壁断面実測も行った。

出土遺物の整理は、水洗い→注記（記名）→遺物台帳の作成→遺物の分類・分析等の過程で実施することとし、簡易な作業は現場作業と並行して行った。図面作成・写真撮影・遺物実測等を含む本格的な整理作業は「坂出連絡事務所」でしているが、今回の調査による出土遺物が14万余点にも及ぶ膨大

な量であるため、本書作製までには十分な整理作業を行うに至らなかった。そのため、本報告書において比較検討した遺物はA地区の1列・c列・h列の計38調査区画出土のものが大部分である。残された遺物整理を今後とも続け、次の報告書において今調査の成果をより明らかにしたい。

(牟礼)

○層序掘りについて

前記の調査方法は、昭和51年からの予備調査時に導入し、その後の本調査でも継続された。この調査方法によりA地区内の発掘調査を進めていった結果、次のような問題点及び疑問点が生じた。それは、

- ① 各層の上面を精査することが困難であること、つまり、
 - イ) 調査区の大半が斜面であり、各層を層の傾斜に対して均等に掘り下げることができないこと。
 - ロ) 出土遺物が多く、面として把握できること。
- ② 遺物の含まれる層は、基本的に包含層として一括されるべきものであり、包含状態はさして意味を持たないと考えること。

などである。そのため、第5調査区画群(Ad_{s-s}, Ae_{s-s}, Af_{s-s})の計17区画において層序掘りを行った。

層序掘りとは、従来、縄文時代以降の遺跡を調査する際に用いられるような、一層ごとに掘り下げ、各層上面を精査し、遺構を検出する方法である。

具体的には、次の作業順序で行った。A地区的調査区画である4×4mを、さらに2×2mの小区画に分割し、左上の小区画より時計回りにI・II・III・IV小区画とし、この小区画を基本単位とした調査区を設定した。

その後、各小区画ごとに第I・II層、第III層、第IV層、第V層の上面を検出する方法を執った。これに付随して、各層中に包含される遺物は、フルイによって採集した。この方法の利点は、各層上面の精査を従来の調査方法以上に忠実に行える点である。層上面において遺物の集中が見られた場合には、平面分布図の作成・レベルの測定・写真撮影などはもちろん実施せねばならない。又、包含層中の遺物についてもその時点での検討できるという利点もある。当初、この点を重視し、1×1mの小区画を設定して調査に臨んだ。しかし、斜面であり、1m²の小面積では作業行程そのものに不利な影響を及ぼすことから、f.区1区画のみで中止し、残り16区画は4m²の小区画に切り替えた。

層序掘りは、各層上面を重視する為、従来の調査方法とは相容れない面がある。それは、旧石器時代の遺跡における「文化層」の概念についてである。

「文化層」に関する認識には、基本的な誤認があるかもしれないが、その点を考慮したうえで疑問点を挙げたい。

いかなる時代に属する遺構でも、遺構はその時代の生活面より掘り込まれているのが通例である。この一点からしても、「文化面」は想定しても、「文化層」は想定しえない。

すなわち、生活面をもつ土層（以下基盤とする）と、その上の堆積土が同一土質であっても、生活面の存在を否定することはできない。又、基盤と堆積土が同一土層となるのは、ローム層においてのみ可能であり、非ローム層地帯においては想定できない。関東ローム層の場合、たとえば鈴木遺跡においては、第IV文化層中に礫群などがほぼ同一レベルで検出されている。このレベルが生活面のレベルと考えられる。しかし、基盤とその上の堆積土が同一土質であり、実際に生活面を検出することは非常に困難であると思う。又、一方非ローム層地帯では、基盤とその上の堆積土が同一

土質である場合は想定できないので、縄文時代以降の遺跡同様、遺物を含む層は包含層として理解することができる。

次に、遺物が自然状況によって上下に移動するという見解に対する疑問であるが、これに関しても次のような場合を想定して否定的にならざるをえない。

遺物と遺物の接合例から、遺物が動くという認識が生まれたと理解しているが、それは、当時の生活面がほぼ平坦であると思うものの、なおも多少の起伏があったと考えられる。そうした場合に、接合しうる資料がレベル的に上下差のある関係を持ちうる状態が想定できるし、生活面からの掘り込み（ピットなど）による場合も想定できる。これは、あくまで想定上の問題ではあるが、遺物の接合例がすなわち遺物の上下移動の問題と結びつくことにならないと考える。以上のような想定では、遺物の上下移動の問題点に対する積極的な反証とはならないが、一考を要する課題である。

まして、非ローム層地帯における遺物の上下移動の事例を知らない現時点では、瀬戸内でのこの課題に対する論及はできない。

以上、「文化層」と「遺物の上下移動」の疑問点を踏まえて、少なくとも非ローム層地帯である瀬戸内において従来の調査方法は、有効な手段になりえないと考える。

これまで述べてきた二つの問題は、A地区の遺物出土状況を検討する中で生まれた。全119区画中、102区画を従来の方法で調査し、残りの17区画で二つの問題の要点を踏まえて調査方法を変更して層序掘りを実施した。

最後に、層序掘りの実施に伴う問題点を整理すると、

- ① 断面で明確に土層を確定することが難しかったことから、平面的に層を十分に把握しきれなかった。
- ② ①に付随して、各層上面の精査が十分にできなかった。
- ③ 傾斜面での作業行程と係わり、小区画（=1m²）設定は困難であった。
- ④ 従来の調査方法と比較して、十分な資料化ができなかった。ここでいう十分な資料化とは、

整理段階でどのような資料操作をすればよいのかが、まだ把握できていないことである。

の4点が挙げられる。これは、あくまで調査方法に起因するものではなく、調査方法の実施に伴うものであるから今後の改善を望みたい。しかし、層序掘りはあくまで暫定的な方法であり、より的確な方法をめざしたい。

（真鍋）

注(i) 鈴木遺跡調査団「鈴木遺跡Ⅰ」 1978 鈴木遺跡刊行会。



発 挖 風 景

第1表 A地区遺物出土数一覧表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
a							332	237				569
b		1,847	2,075	1,758	1,648	1,027	772	896	460	329		10,812
c	2,304	3,964	2,706	2,478	2,129	1,791	1,398	1,220	879	639	202	19,710
d	2,480	4,902	3,218	2,339	1,820	1,232	1,069	1,254	1,143	985	513	20,955
e	1,768	4,070	3,218	2,050	2,289	1,950	1,839	1,093	1,020	1,044		20,341
f	1,316	4,002	4,243	2,984	2,163	1,880	1,352	1,254	474	646		20,164
g	430	2,375	2,589	1,669	1,053	804	560	504	312	368		10,664
h	348	1,676	1,643	1,377	845	867	563	590	453	309		8,671
i	367	1,233	1,042	982	1,060	782	605	558				6,629
j	294	1,860	2,071	1,809	1,539	1,002	517					9,092
k	121	1,200	1,213	1,298	644							4,476
l	666	1,334	697	1,148	186							4,031
m		1,135	799	1,164	422							3,520
n		85	63									148
o	IC-I 706	64	92									156
p	IC-II 367	32	46									78
q	IC-III 193											1,570
	IC-IV 304	32	23									55
r		17										17
s	15	0										15
t	0	0										0
計	11,679	29,828	25,738	21,056	15,798	11,335	8,525	7,701	4,978	4,320	715	141,673

註 遺物出土数は本調査によるものであって、予備調査での出土数は含まない

第Ⅲ章 調査の概要(1)

第1節 土層序について

A地区の土層とその上下関係を示したのが第5図である。第Ⅰ層=黒褐色表土層、第Ⅱ層=暗黄褐色砂質土層、第Ⅲ層=茶褐色砂質土層、第Ⅳ層=茶白褐色砂質土層、第Ⅳ'=茶白褐色バイラン土層、第Ⅴ'=暗茶褐色バイラン土層、第Ⅵ層=暗茶褐色砂質土層、第Ⅶ層=弱風化花崗岩(地山)に区別し得る。

先に報告した概報と記載を違っている部分について述べると、まず、今回新たに第Ⅳ'層と第Ⅴ'層とを加えた。

次に概報では、第Ⅶ層=黄褐色バイラン土層、第Ⅷ層=弱風化花崗岩層(地山)としていたが、第Ⅶ層と第Ⅷ層との違いは花崗岩の風化度の差程度であつて区別する必要はないとの判断したので今回は、第Ⅶ層として一括した。

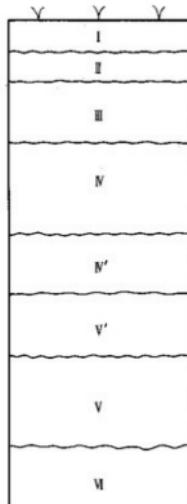
第Ⅱ層と第Ⅲ層とは、明確に区分できるが、第Ⅲ層と第Ⅳ層の違いについて概報では「第Ⅳ層は、第Ⅲ層に比較して色調に白味が加わりやや硬くなる点に違いがある」としている。しかし、この一点では区分できない区画があるため、新たに、第Ⅲ層・第Ⅳ層に共通してみられる斑文の濃淡で区分したり単に硬さのみで区分した区画もある。しかし、層序の連続性を問う場合に、区分法の違いのみで層序を明確に分離することができず、それぞれ第Ⅲ層、第Ⅳ層中の差としてとらえた。

第Ⅴ層は、硬質ブロック状土塊を含むことで設定した土層であり、ベースは第Ⅳ層とほとんど変わらない。硬質ブロックを多量に含むことで一層として認識しうる。

第Ⅳ'層と第Ⅴ'層は、通有の第Ⅳ層・第Ⅴ層とは異なり、花崗岩バイラン土をベースとするところから設定した。土質の違いで区別した層であるが、色調・含有物においてはほとんど第Ⅳ層、第Ⅴ層と変わらない。この第Ⅳ'層、第Ⅴ'層は調査区全域に見られるものではない。層序としては、第Ⅳ層、第Ⅴ層の組み合せが一番多く第Ⅳ'層、第Ⅴ'層を含めた4層が層序をなして検出された区画はない。

0列から10列まで概報に記した通り、調査区域ほぼ全域にわたって、ほぼ均一の堆積状況を示す中で、平坦面(0~2列)の土層が斜面部(5~10列)より乱れているということは留意すべきである。これは、平坦面が斜面部より自然の影響を強く受けた(人為的な攪乱とは考えない)結果であると思われる。

又、各層の厚さも、平坦面が一番薄く、斜面部の方が厚いという状況が見られる。



第5図 土層柱状図

第2節 遺物出土状況

出土遺物の総数は、概算142,000点（第1表）を数え、本調査の畦畔部分の遺物数（推定）を加えると、180,000点余りになろう。第6図は、発掘面積1m²あたりの出土数を表したものである。この表によれば平坦面南側に集中する傾向が見られる。又、5列以下斜面部で遺物数が激減することは、調査区内での地形変化と合致する。

平坦面北側は、極端に少なくなることから、遺跡の中心部は本来、南側にあり、北側は中心よりはずれていたことがうかがわれる。

しかし、北側部分は石槨神社造営に伴い、一部削平が行われ、東側斜面に土盛りをして平坦面を形成した為に、本来遺構があったとしても消滅してしまった可能性は否定できない。しかも、An-Atの0～2列出土の遺物数と比較しても多いことから、何らかの遺構が存在したと予想される。

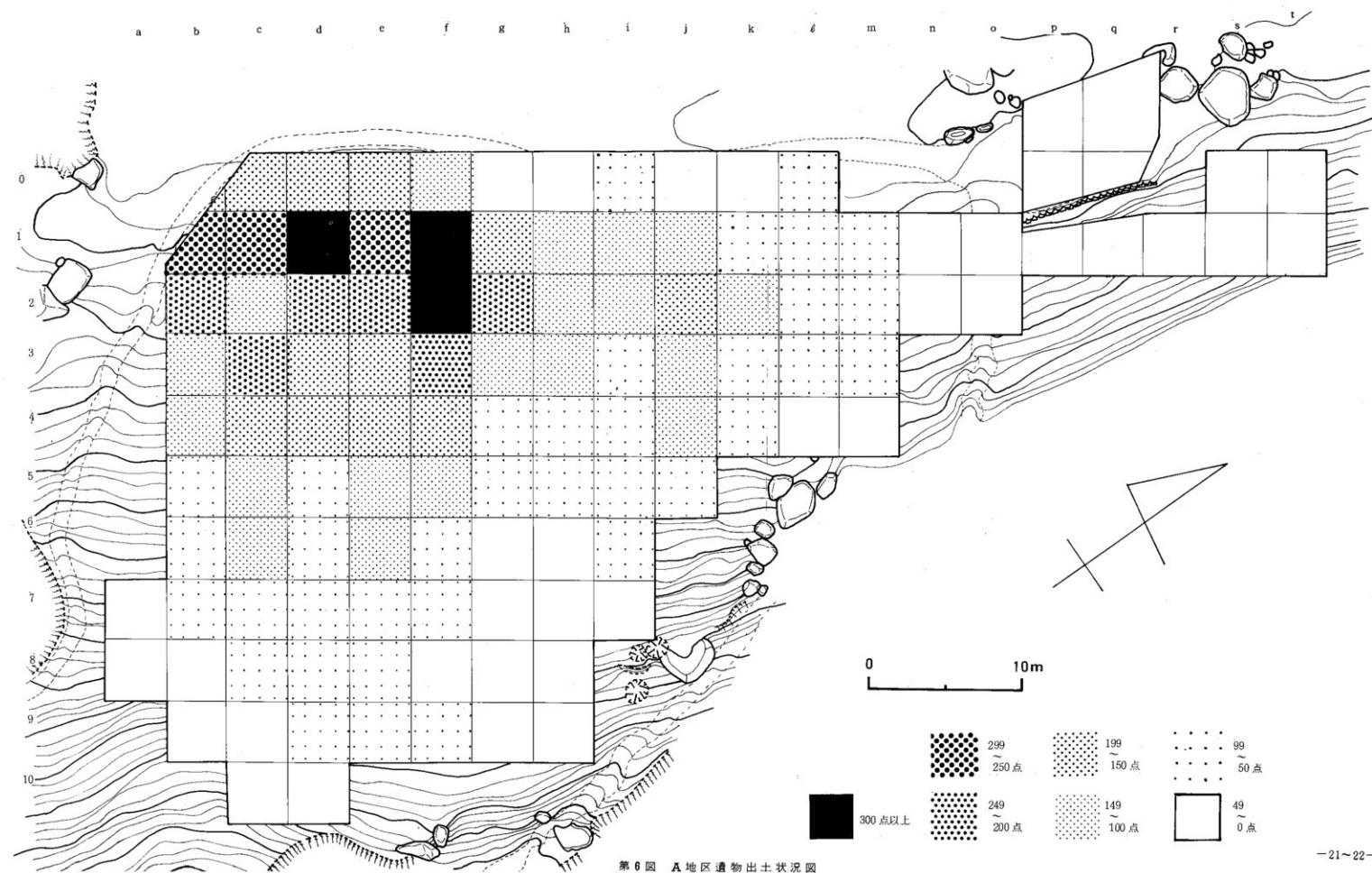
（1）層序掘地区的状況

従来の調査方法では、平面的に層序を把握することが困難であり、整理段階で北壁に投影することにより、出土層位を規定する方法を用いている。しかし、層序別の出土率を正確に把握する意味で、層序掘を行った地区（第5調査区画群）の結果を示したものが第2表である。これは斜面部での状況を示すものであることを付記しておく。

第2表 層別遺物包含状況

層 区画	I～II		IV		合 計
	遺 物 (土器)	遺 物 (土器)	遺 物 (土器)	遺 物 (土器)	
Ad	3	565 (29)	925 (25)	804 (9)	45 (0) 2,339 (63)
	4	380 (34)	607 (46)	688 (19)	145 (2) 1,820 (101)
	5	415 (64)	123 (12)	633 (30)	61 (2) 1,232 (108)
	6	309 (67)	290 (14)	431 (11)	39 (1) 1,069 (93)
Ae	3	514 (53)	372 (34)	1,164 (16)	2,050 (103)
	4	533 (75)	343 (47)	1,413 (27)	2,289 (149)
	5	501 (51)	266 (20)	1,183 (53)	1,950 (124)
	6	711 (38)	591 (28)	478 (20)	1,780 (86)
	7	379 (53)	136 (10)	578 (12)	1,093 (75)
	8	409 (55)	242 (17)	369 (7)	1,020 (79)
Af	3	871 (38)	555 (16)	1,491 (26)	67 (3) 2,984 (83)
	4	338 (16)	732 (38)	1,034 (15)	59 (0) 2,163 (69)
	5	531 (44)	232 (29)	1,117 (13)	1,880 (85)
	6	412 (70)	150 (21)	790 (8)	1,352 (99)
	7	377 (75)	202 (22)	675 (12)	1,254 (109)
	8	203 (48)	271 (27)	255 (6)	729 (81)
	9	225 (55)	104 (16)	317 (14)	646 (85)
	合 計	6,808 (865)	5,719 (422)	13,122 (298)	408 (8) 27,650 (1,593)

鉛 数字は点数であり、()内数字は遺物数内の土器片数を示す。



(遺物の取り上げは小区画(2×2m)ごとに行い、集計は調査区画ごとにして表を作成した。)

第I層は、腐植土層であることから、第II層の遺物と一緒に取りあげている。又、第V層出土遺物とは、第V層の上面において検出したもので、同層中に包含される遺物と考えていない。

この結果、遺物包含の主体は第IV層であり、以下第III層、第I・II層、第V層の順で出土数が減少する。これは、第IV層が厚いことにもよるが、それを考慮しても、第IV層が濃密であるといえる。

土器片の集中する層は第I・II層及び第III層であり、第IV層では若干少なく、第V層ではさらに少量となる。このように、部分的には第V層上面まで、全体的には第IV層まで土器を伴出することで、各層出土の旧石器時代遺物は一括遺物として認定できず、後世の二次堆積として取り扱えると思う。又、第V層は基本的には無遺物層であり、地山と考えられよう。

層位的な問題は、次にあげるh列及び1列の平・断面図でより詳しく説明したい。

(2) 平面的分布の状況

第7～8図は、A地区の全体的傾向を示す例としてとりあげたAh1区の、層別出土状況図である。以下、説明を加える。

第I・II層ではナイフ形石器及び土器が多く、その他の器種は散漫に出土している。他の遺物を含めても全体的に分散した状況であり、集中する傾向は見られない。

第III層でもナイフ形石器及び土器が最も多量に出土し、他の器種も量的に増加する。これも散布的なあり方をするのみで、集中は見られない。

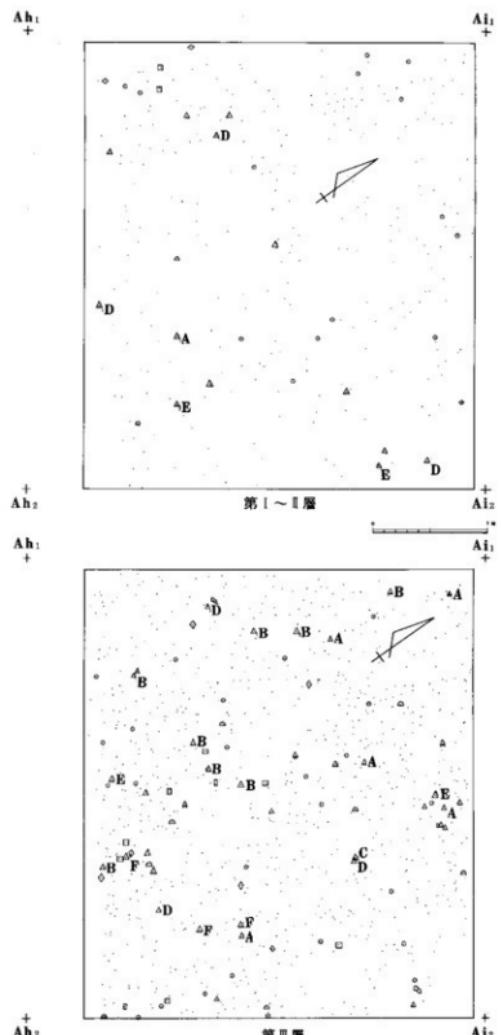
第IV層は、出土土器の最低レベルを一つの基準として設定し、それより上、下の遺物を分けて図化した。第IV—上層において、土器の出土数は減少するが、ナイフ形石器は相変わらず多い。調査区画内東辺に遺物が集中してくるが、これは、西から東へと傾斜している地形によるものであると理解している。こうした傾向は、傾斜変換線である。3列・5列により顕著に見られるものであるから、この想定にはあやまりないものと考える。

第IV一下層～第V層上面においては、遺物の散布も、ごく少なく、ナイフ形石器が1点と、若干の碎片、剥片類になる。第IV—上層と第IV—下層とは土器の最低レベルの上下で、密集度に変化があるが、あくまで仮定上の区分であるから、この点は御了承いただきたい。

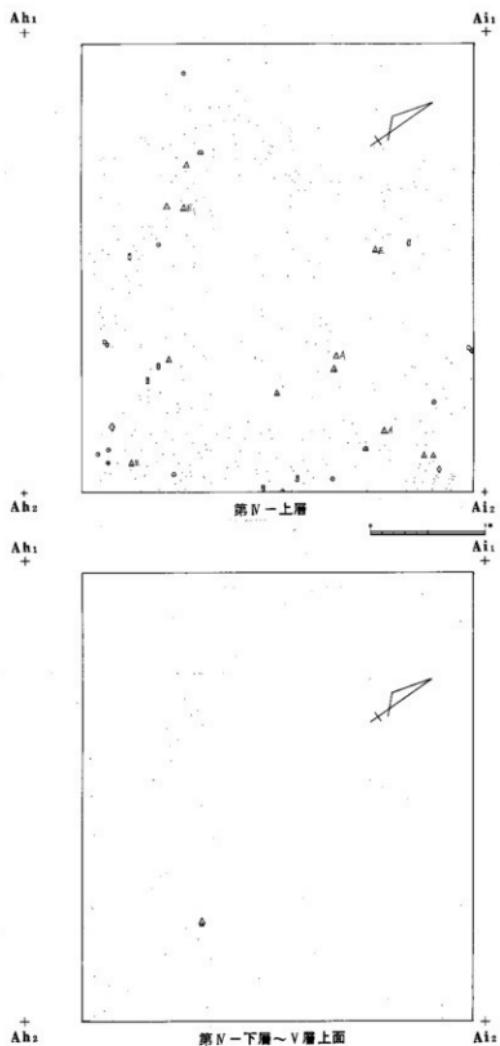
第3表は、各層出土のナイフ形石器の型式別出土率の傾向を見るために作成したもので、採用した資料は型式がわかるものだけに限定し、破片で型式が明確でないものは不明としておいた。なお、このタイプは次章の分類案によるものである。



図中記号一覧



第7図 A h1区層別遺物出土状況図(1)



第8図 Ah1区層別遺物出土状況図(2)

第Ⅰ・Ⅱ層ではA型・D型・E型が見られ、B型・C型は出土していない。

第Ⅲ層ではB型が一番多く、次にA型・D型・F型・E型・C型の順である。

第Ⅳ一上層では、A型・E型のみ出土した。

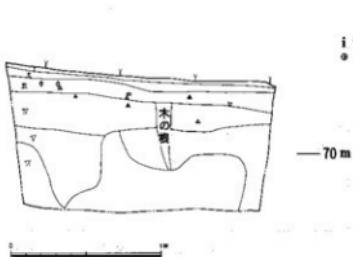
第Ⅳ一下層・第V層上面ではどの型式に含まれるか明確にできなかった。

以上の点からすると、A型は全層にわたって多く、B型は第Ⅲ層のみ、C型も第Ⅲ層のみ、D型は第Ⅰ層～第Ⅲ層、E型は全層にわたり、そして、F型も第Ⅲ層のみから出土するという結論を得た。土器を含むということで、層序自体の純粹性は指摘できない。そこで、層別の傾向から堆積状況について考える。この資料化ではあったが、この結果、第Ⅲ層中にB型・C型・F型が偏在すること、A型・E型は全層にわたって出土すること、D型はⅠ～Ⅲ層で出土するという傾向がでた。これをどう理解するかについては、1例を行った、第Ⅳ一下層～第V層上面でのナイフ形石器の型式別の出土数との関係において考えることとし、ひとまずこの説明を終える。

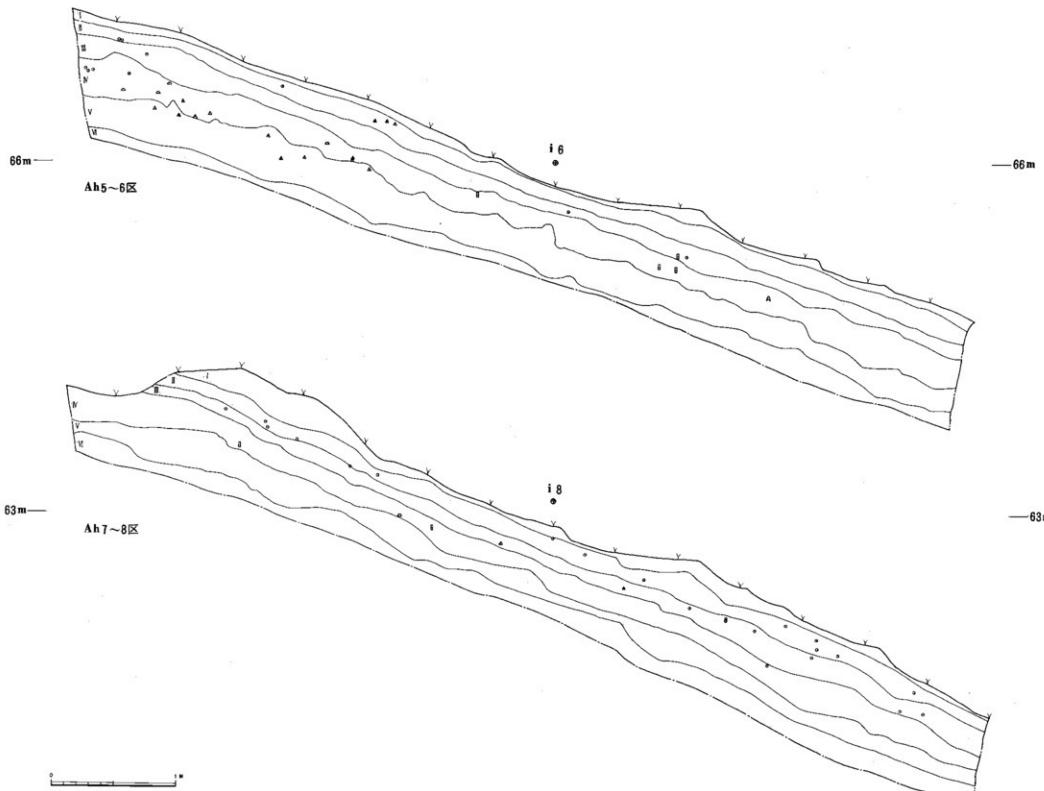
(3) 層位的分布の状況

第3表 Ah1区出土ナイフ形石器型式別割合

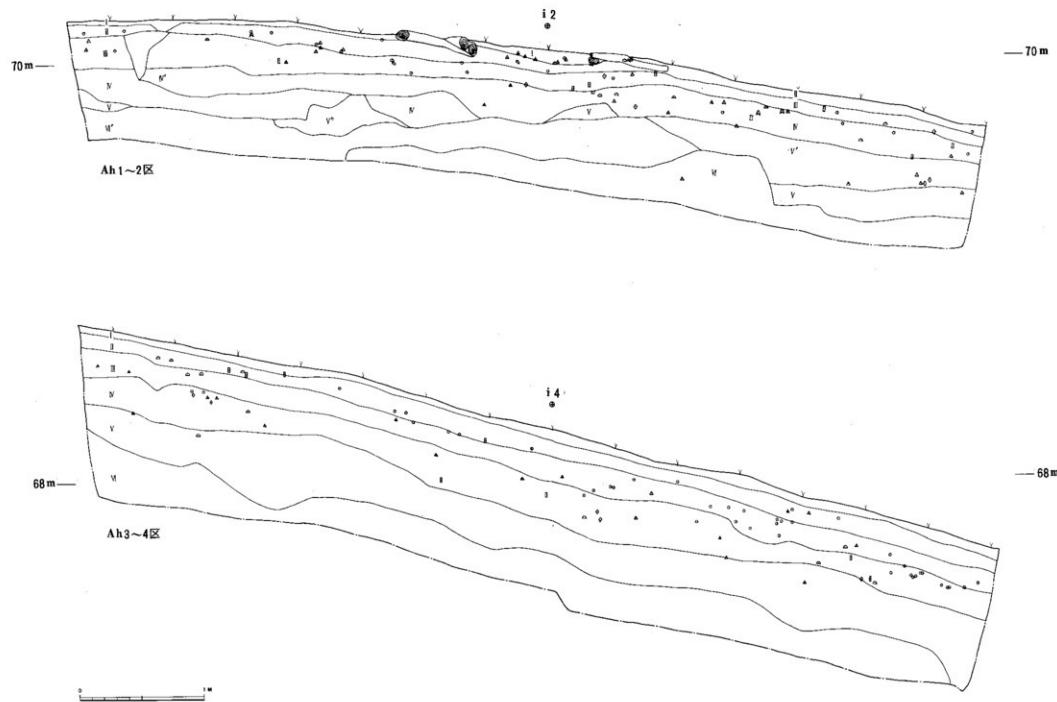
型式	層	I～II		III		IV-上		IV-下～V-上		計	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
A	数	2		5		2				9	
	%		15		14		17				14.8
B	数			8						8	
	%			23							13.1
C	数			1						1	
	%			3							1.6
D	数	2		4						6	
	%		15		11						9.8
E	数	2		2		3				7	
	%		15		6		25				11.5
F	数			3						3	
	%			9							4.9
不明	数	7		12		7		1		27	
	%		55		34		58		100		44.3
計	数	13		35		12		1		61	
	%		100		100		100		100		100



第9図 Ah0区北壁断面遺物投影図



第11図 Ah5~8北壁断面投影図



第10図 Ah1~4区北壁断面遺物投影図

Ah5・6区では、Ah1・2区、Ah3・4区に比べて層が薄くなり、出土石器の数も減少する。しかし、Ah5区に集中する傾向が見られる。又、第V層上面でのナイフ形石器の出土数が多く、理解しがたい。

Ah7・8区では、全体的に土器片の出土が多く、第II・III層に集中する傾向が見られる。土器の中もAh5・6区程ではなく、やや散在的であると言える。

Ah9区では、第III層にナイフ形石器が2点と土器片1点が出土したのみで、全体的な傾向として出土数の減少が見られる。これは、平面分布の状況と同一である。

A地区内における土層序は、全般的に同一堆積と認めざるを得ず、この結果、旧石器時代を中心と考えた場合には、後世の遺物が第IV層まで含まれていることから、第I～第IV層までの包含層は搅乱層とせざるをえない。第IV層における土器の包含が、第IV層全般に見られず、その上半までに限られることは、土層の区分そのものに問題があるのか、別の理由があるのかは明確にし難い。しかし、第V層を地山と認定しており、第IV層下半の無土器層と第V層上面の遺物は、搅乱を受けていない可能性があるのでないかという考え方から、一列を代表させて検証したのが次の作業である。

第9図～第12図までは、h列北壁断面図に出土石器等（器種の明確なもののみ）及び土器片を投影したものである。この図を作成するにあたっては次の点に留意した。

- ① 斜面の南北方向への傾斜・層の凹凸を考え、北壁より1m内の範囲に限り投影した。
- ② 全層にわたって出土した製品類を投影した。

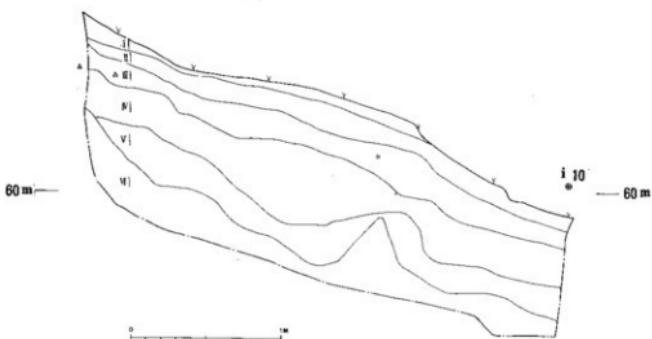
Ah0区では、第I層・第II層が5cm内外の厚み、第III層は10cm前後、第IV層は薄いところで10cm、厚いところで30cm程の堆積がある。石器は第III層中に集中し、土器の伴出が見られない。このことは重要であろう。

Ah1・2区では、第I層より第V層上面まで均等に遺物は出土しているが、土器・石器は第IV層中まであり、石器中ではやはり、ナイフ形石器の出土が主である。各層は比較的厚くなるとともに、土層序の乱れも多く見られる。

Ah3・4区でも層は厚く、堆積状況は良好であるといえる。ここでも土器の出土は、第IV～上層までであるが、Ah4区で土器の集中箇所が三ヶ所見られる。こうした出土状況はA地区内でしばしば見られるが、現場にて精査を行ったにもかかわらず、ピット及び木の根等による落ちこみの結果とすることができない。同一個体の二次堆積途上の細片化としておきたい。



Ah1区 北壁断面



第12図 Ah 9 区北壁断面遺物投影図

(4) 1列における分布の状況

ここで意図したことは、第IV一下層～第V層（無土器層）における、単一文化の抽出であった。土器の出土が第IV層半ばでとぎれ、第IV層下半及び第V層上面での出土がまれであることは、第IV層を二分割することの明確な根拠とは必ずしもなりえないが、ひとつの指標とはなりうる。なおかつ、こうした状況の中で第V層上面を生活面としていた文化の存在は、次節で述べる三つのピットの検出で裏付けられ、第V層上面に存在するナイフ形石器の出土率によってそれを補強していくこうとした。第1列を選んだ理由として、平坦面であり、投影による一層序の混乱を最少限にとどめ得ること、出土石器が多いことから、統計上の資料を多くすることができ、より客観的なデータが得られることなどがあげられる。以上の観点から、第13図～第24図を作成し、それをグラフ化したものが第4表である。図の説明と表の説明を行ったのち、その結果を検討してみることとする。

○図の説明

図はAb 1～Am 1までの1列、計12枚作成した。

以下、各区画の傾向を平・断面とも簡単に説明する。

Ab 1区（第13図） 調査区画縁辺に偏よる傾向は見られるが集中するまでにはいかない。なお、Ab 1区の北壁断面図は作成しておらず、投影はしなかったが、大半は第IV層中の遺物である。

Ac 1区（第14図） 北辺に集中が見られる。この集中は、①断面図においては第IV層の落ち込みに堆積している。②ナイフ形石器のタイプが多様で一時期のものと考えられない。このことから、遺構とは認定しえなかった。（平面図中に書き加えた予備調査トレンチの遺物は、断面に投影しておらず、遺物の再検討も行わなかったので、今回の資料からは除外している。）

Ad 1区（第15図） この区画も、断面図の作成を行わなかった。なお、発掘区画外（西側）の遺物は、畦畔部除去に伴う出土である。平面的には散在した状態を示している。

Ae 1区（第16図） 区画内東辺に若干偏在するが、断面図に見られる第V層上面における落ち込みに含まれていたもので、第IV層中の遺物とすることができます。

Af 1区（第17図） 遺物は全体的に散布していたが、特に東辺部に集中する傾向が見られ、そのうちでも北側と南側に集中箇所が見られる。北側に含まれるナイフ形石器は、A型・E型・F型、

南側のものはC型・E型に分かれ。共に明確な集中とは言い難い。なお、断面中の遺物のあり方として、北側のものは第V層上面に、南側のものは第V層中に投影されているが、第V層は無遺物層であり、北側から南側にかけて若干傾斜していることがわかる。

Ag 1区(第18図) これも東辺に若干散布する。層位は第IV'層上面であろう。

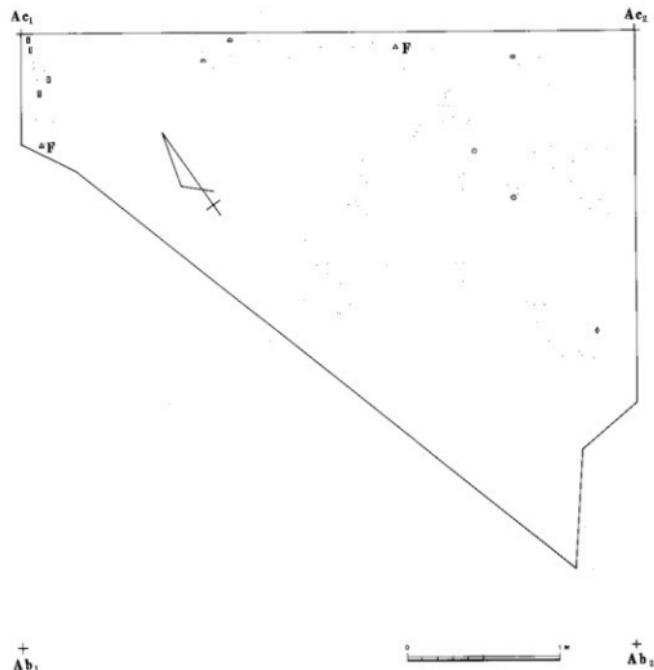
Ah 1区(第19図) 散在状態を呈す。層位はIV'層中に大半が包含される。

Aj 1区(第20図) 集中の傾向として北辺に帯状に分布する。ナイフ形石器はC型を除く全型式が見られる。層位は第III層～第IV一上層である。

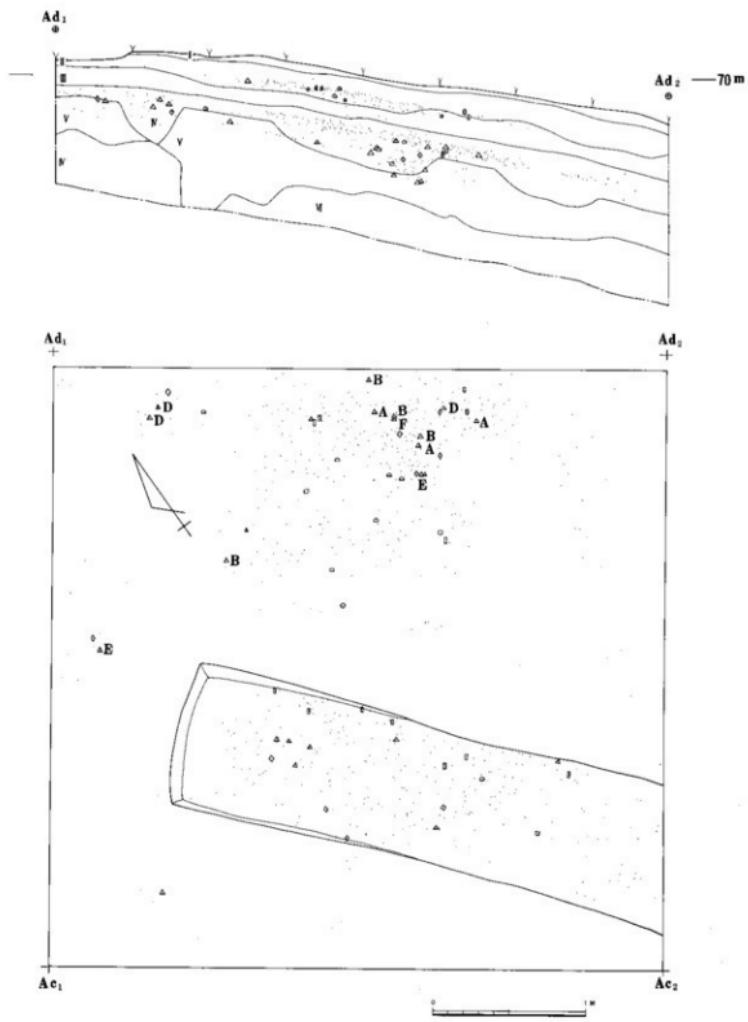
Aj 1区(第21図) 巨視的には東辺部に多く、一部中央にも集中する。ナイフ形石器はC型・D型を除く全型式が見られ、第II層～第III層に包含される。

AK 1区(第22図) 南辺に帯状に分布する。ナイフ形石器及び縦長剝片が多い。ナイフ型石器はB型・F型を除いた他の型式が出土している。ここでは第III層が確認されなかった。層位は第IV一下層から第V層上面である。

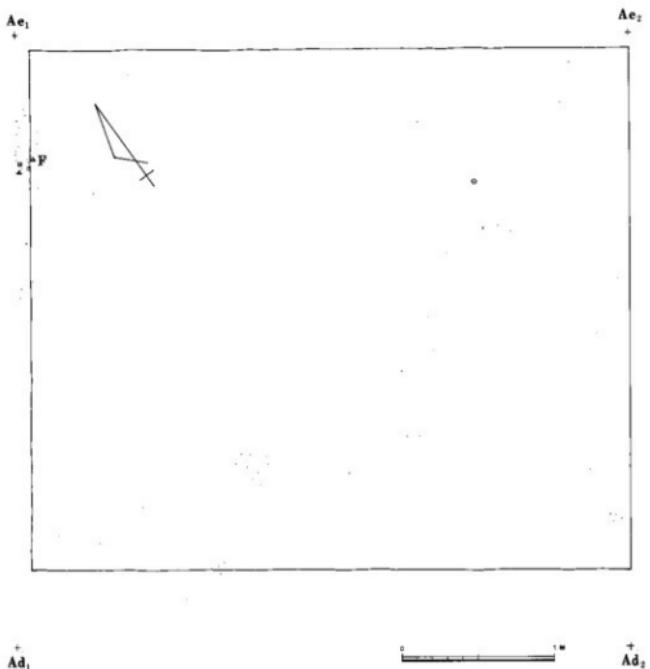
A&1区(第23図) 全体的に遺物が出土している。ナイフ及び翼状剝片が多い。ナイフ型石器ではC型を除く全型式が出土し、第III層中に包含される。



第13図 Ab1区平面遺物投影図



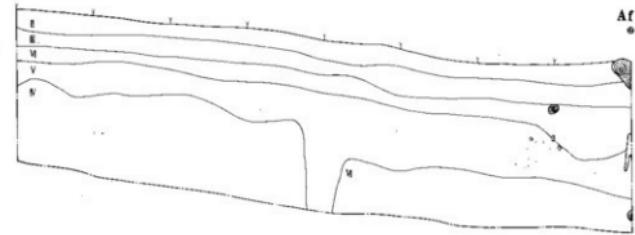
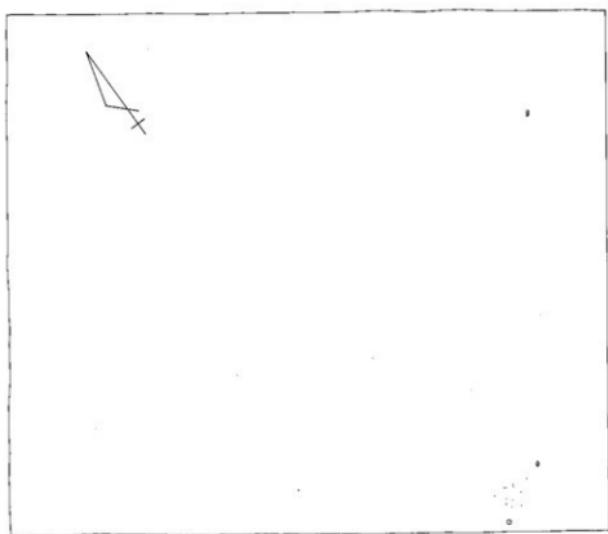
第14図 Ac1区平・断面遺物投影図



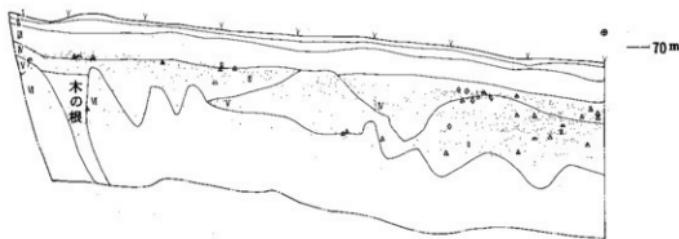
第15図 Ad1区平面遺物投影図

Af_1 Af_2

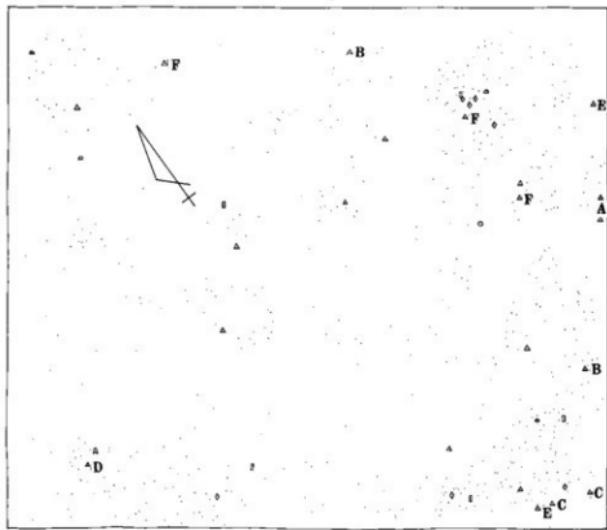
— 70 m —

 Ae_1 Ae_2  Ae_1  Ae_2 第16図 Ae_1 区平・断面遺物投影図

Ag₁ + Ag₂

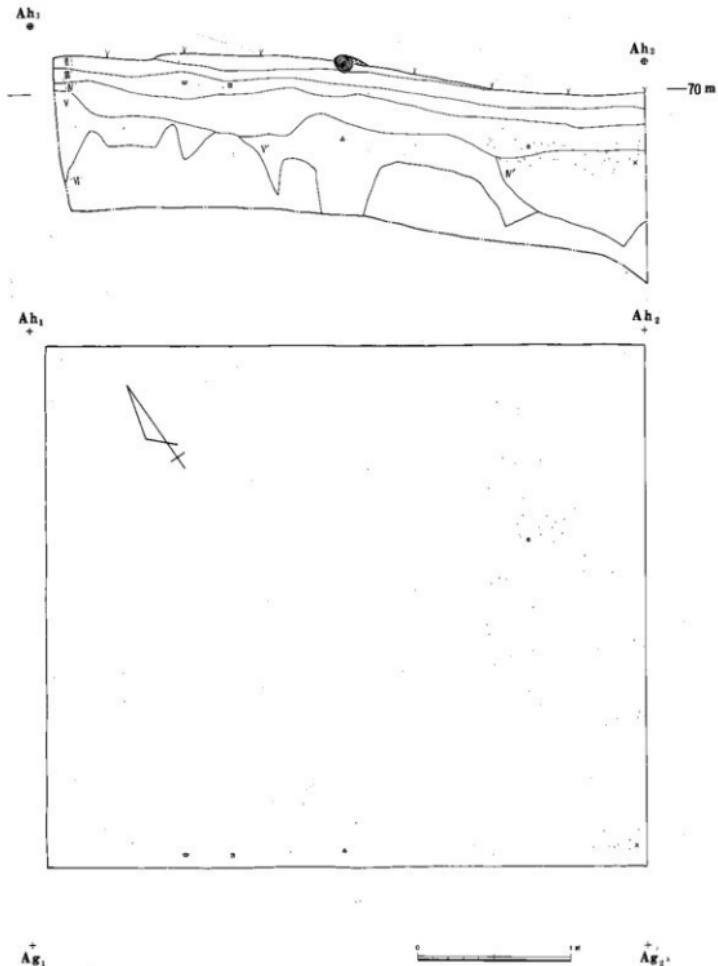


Ag₁ + Ag₂

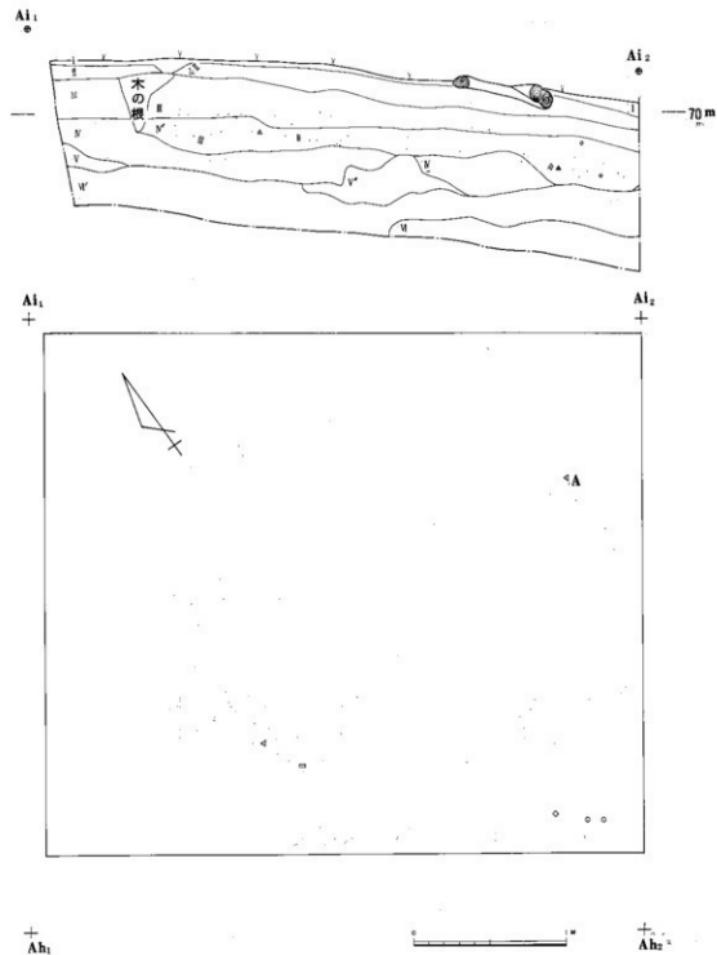


Ag₁ + Ag₂

第17図 Ag1区平・断面遺物投影図

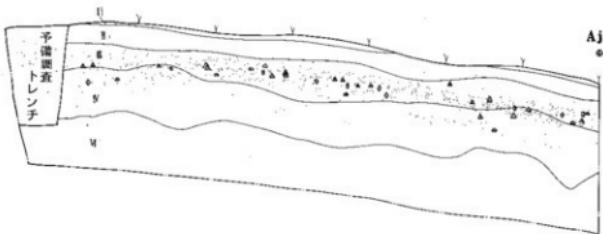


第18図 Ag1区平・断面遺物投影図



第19図 Ah₁ 区平・断面遺物投影図

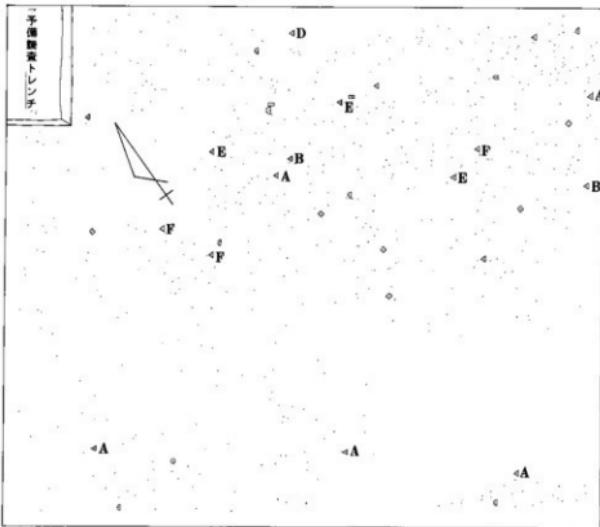
Aj₁



— 70 m —

Aj₁

+

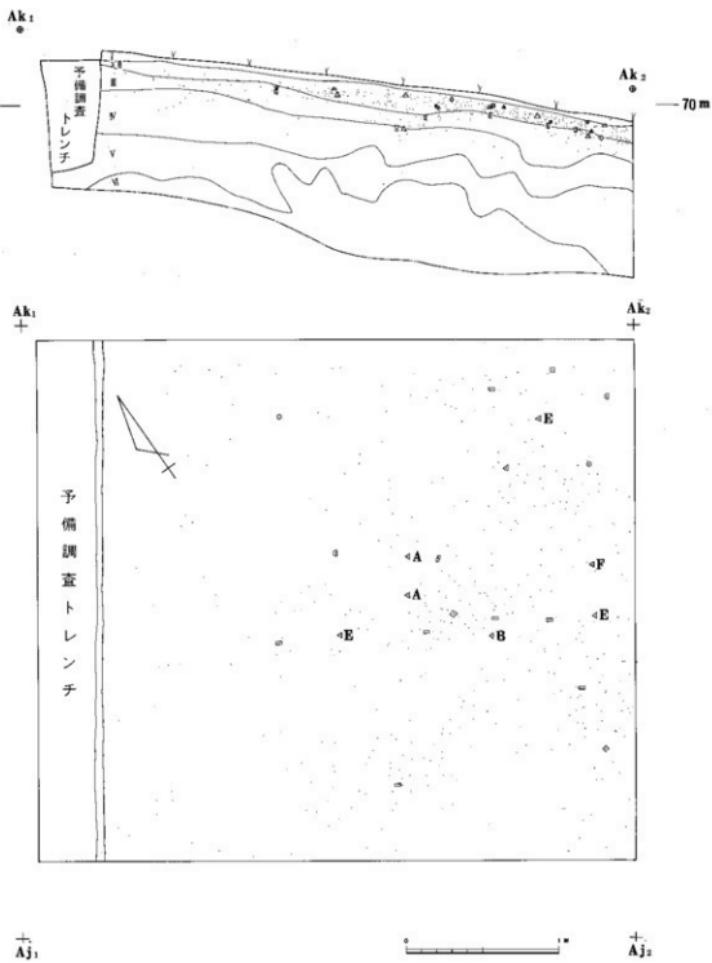


Aj₁

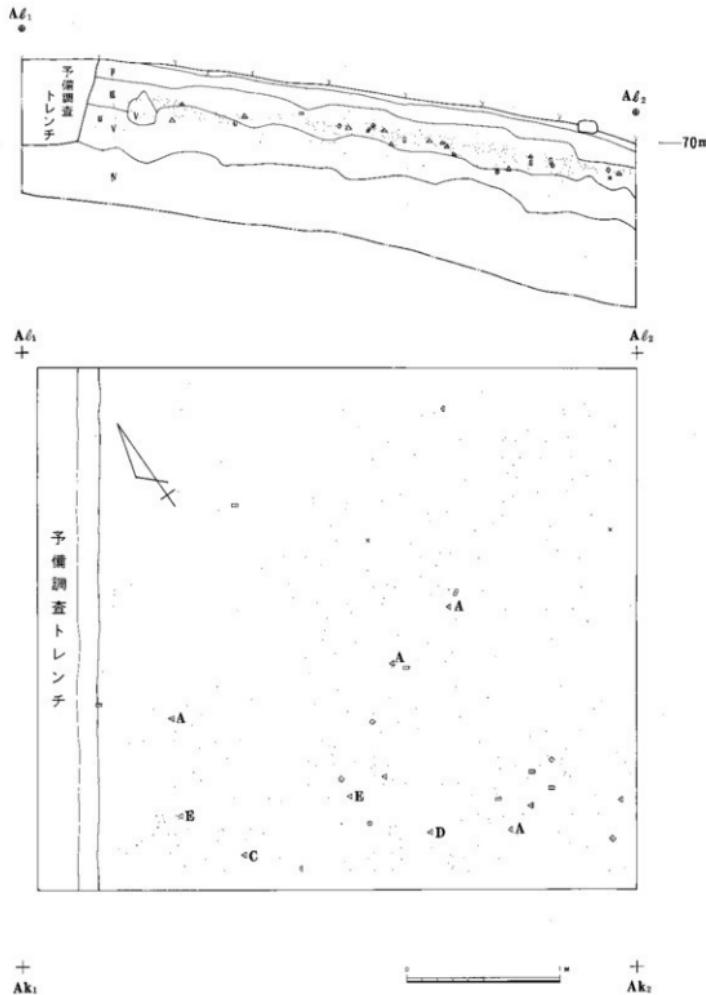


Aj₂

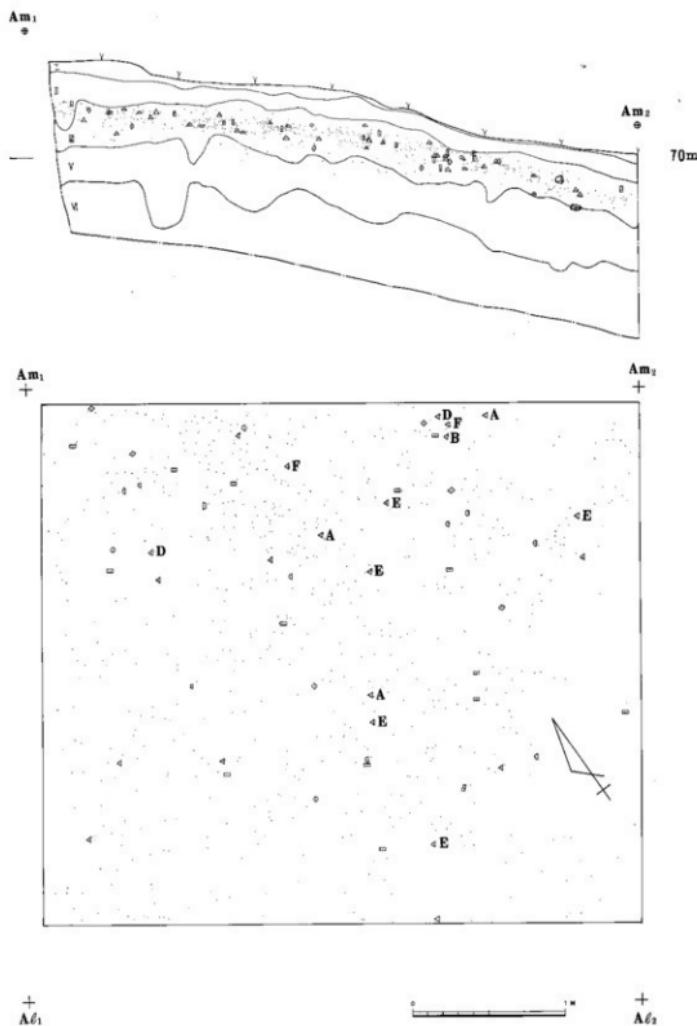
第20図 Aj1区平・断面遺物投影図



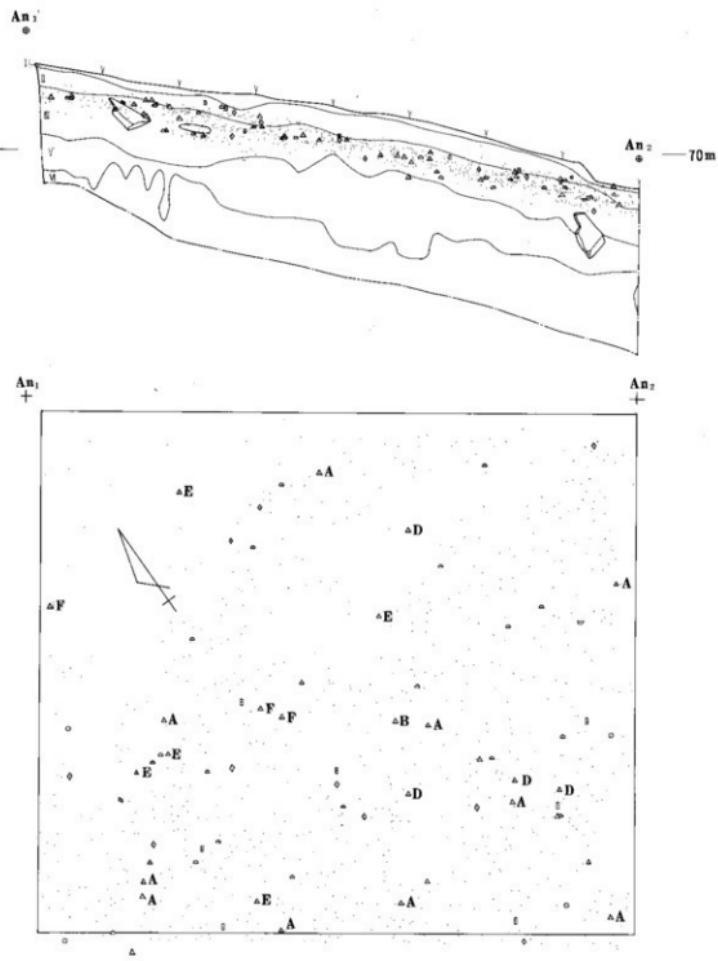
第21図 Aj1区平・断面造物投影図



第22図 Ak1区平・断面遺物投影図



第23図 A61区平・断面遺物投影図



第24図 Am1区平・断面遺物投影図

Am1区(第24図) ここでも全体的に出土しており、あえて言えば、北辺よりも南辺に多い。包含する層は第Ⅲ層に集中する。C型を除く全型式の出土を見る。

以上のことを、先のAh1-1区同様に表にしたもののが第4表である。

第4表 1列出土ナイフ形石器型式別割合

区画	A		B		C		D		E		F		不明		計
	出土数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	
Ab-1	数										2				2
	%										100				100
Ac-1	数	3	3			3	3		1		11	24			
	%	13	13			13	13		4		44	100			
Ad-1	数								1		1	2			
	%								50		50	100			
Ae-1	数											0			
	%											0			
Af-1	数	1	1	2	1	3		4		9		21			
	%	5	5	10	5	14		19		42		100			
Ag-1	数									1		1			
	%									100		100			
Ah-1	数	1								1		2			
	%	50								50		100			
Ai-1	数	6	2		1	3		3		3		18			
	%	33	11		5	17		17		17		100			
Aj-1	数	2	1					3		1		8			
	%	25	12					39		12		100			
Ak-1	数	4		1	1	2				3		11			
	%	37		9	9	18				27		100			
Aℓ-1	数	3	1		2	5		2		9		22			
	%	14	5		9	23		9		40		100			
Am-1	数	10	1		4	5		3		7		30			
	%	33	3		13	17		10		24		100			
計	数	30	9	3	12	24		17		46		141			
	%	21	6	2	9	17		12		33		100			

各調査区画で状況の違いが見られるが、ここでは全般的な傾向を見てみたい。

量の違いからすると、Ac1・Af1・Ai1・Aℓ1・Am1の各区で出土数が多く、他の地区では少ない。これは、各区出土ナイフ形石器の全体量からして、必ずしも比例している数値とは言えず、Am1区では出土総数の約77%にも達する。又、Aℓ1区では約50%となり、平坦面北部の方に集中する傾向が見られる。これに比べ、平坦面南側に位置する各区では、大半が数%にとどまり、全体の出

土数とは逆転した形となる。この傾向に関しては、指摘するにとどめ、具体的な想定はさしつかえる。

各タイプの比率は、第5表の比率に比較的近い。すなわち、型式の不明なものの中の割合が約33%と、全体の1/3にあたる為、各型式共に減少するが、基本的には同率としてよい。

第5表 ナイフ形石器型式別欠損率表

	○	△	▽	○	?	計 (%)
A	43	77	29	18	10	177 (21.3)
B	54	46	25	18	5	148 (17.8)
C	10	8	1	1	2	22 (2.6)
D	42	52	17	17	4	132 (15.8)
E	110	80	12	5	2	209 (25.1)
F	76	38	12	7	7	140 (16.8)
黒耀石	2	2				4 (0.5)
流紋岩	1					1 (0.1)
	338	303	96	66	30	833 (100)

- 完形
- △ 先端部欠損
- ▽ 基部欠損
- △ 先端部・基部欠損
- ? 不明

次に第6表は、1列出土の完形ナイフ形石器の型式別の長さを表したものである。この表の意図は、調査中の所見によると、第V層上面で出土したナイフ形石器中、従来言われている「井島型ナイフ形石器」=小型ナイフ形石器の割合が多かった点から、客観的資料として提示できるものかどうかを判断する材料として作成したものである。

① 小型ナイフ形石器をとりて一つの型式とせず、A～Fに含まれている今回の分類では、すなわち、全型式が出土していても、小型ナイフ形石器の割合が高ければ、逆に、小型ナイフを一型式として認定でき、しかも第V層上面の文化期を限定できるものと考えた。

② 翼状剝片の内、最も小型のものの長さが3.7cmであったことから、一つの指標として3.5cm以下を小型ナイフ形石器とした。

この結果、3.5cm以下のナイフは、出土総数の27%にあたり、必ずしも一つの傾向を示すものとはならなかった。

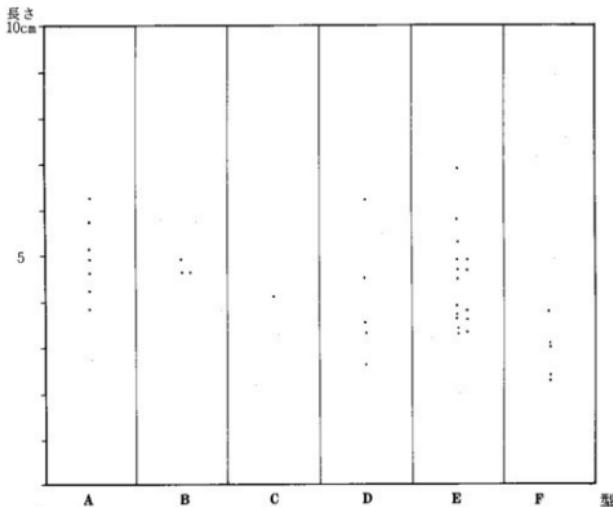
○結論として

① 出土状況からすると、東辺部に遺物が集中する傾向が見られる。これは西から東へと傾斜している地形の中で理解できる。

② 第IV一下層～第V層上面を重視したが、全体的なナイフ形石器のタイプ別比率と同様な結果が出たことは、第IV一下層～第V層上面が、安定した層でないことを裏付けた。

③ 1列北側のグリッドでは、比較的上部の層での出土が多く、必ずしも全体を同列に扱えないのではないかとの疑問が生じる。ただ、層序としては連続性を持っているので、層序区分のあり方に対する疑問として受けとめたい。

第6表 1列出土ナイフ形石器計測表



(5) 小 結

以上の結果から、今回分類したナイフ形石器に編年的な意味を持たせたにしろ、従来の編年が確定的なものであるにしろ、与島西方A地区では、①土器片が共存すること、②各タイプのナイフの共存が見られること、などから良好な出土状況を呈するとは言えず、旧石器時代以降の包含層と認定するに至った。なお、この包含層の形成過程については不明な点が多い。この点が今後の調査の焦点となることは疑いなく、より幅広い検討が必要であると考えられる。

第3節 遺 構

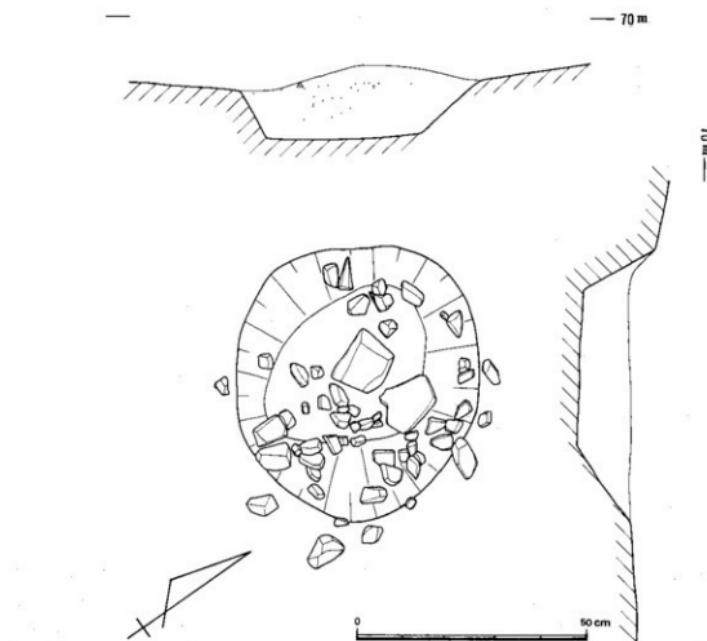
遺構は、Ad0・Ag2・A&3 の各区画内で確認され、便宜上、ピット1・ピット2・ピット3と呼称する。

3つのピット共、第V層上面から掘り込まれたと判断されるが、実際確認したのは、第IV層上面においてであったり、断面においてであり、全体の形状は多分に破損していることから、部分的に図上復原したものもあり、若干の推定を加えていることをおことわりしておく。

次に各ピット及び出土遺物の説明をする。

(1) ピット1〔Ad 0区〕(第25図)

長径59cm×短径53cmの楕円形を呈する。深さは10~15cm(第VI層上面から)で、推定20~25cm程の深さとなろう。ピット内には13~15cm程の花崗岩が、ピットの壁に貼りついたような状態で出土

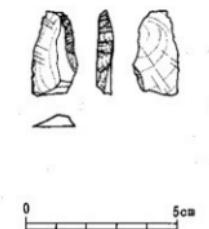


第25図 ピット1実測図

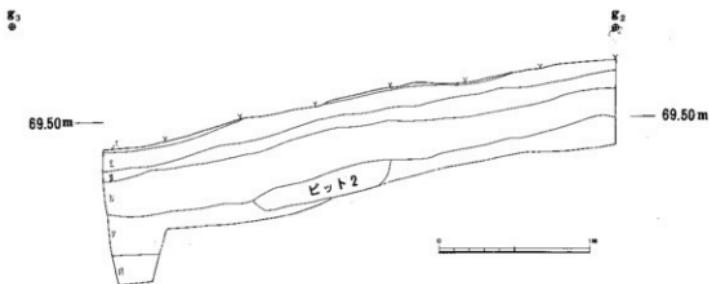
している。遺物は、25点の剣片・碎片と、ナイフ形石器が一点出土している。ピット内の土は、第V層の土に近似しているが、若干砂質である。ナイフ形石器(第26図)は、先端・基部共に折れており、全体の形状は明らかにできないが、ネガ面・底面とも一つずつ確認できるので、A型に属するものと考えられる。プランティングは、打面調整とは思えないネガティブな面からの一撃を除いて、ポジティブな面より細かい調整を行っている。断面は三角形を呈する。

このピットの性格は、現時点では不明であり、類例の増加を待って、新ためて論及したい。

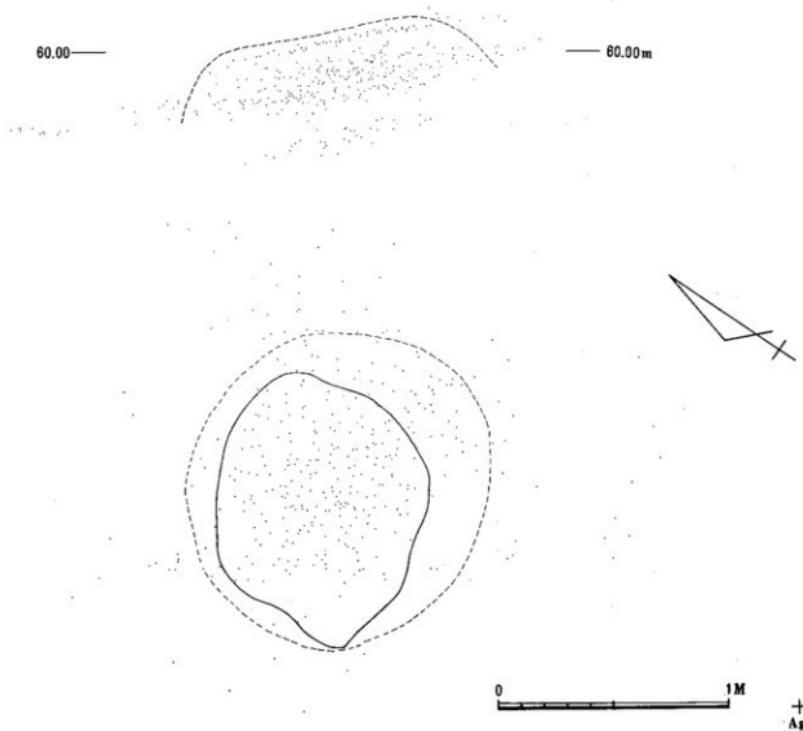
(2) ピット2〔Ag 2区〕(第27図~第28図)



第26図 ピット1出土
ナイフ形石器実測図



第27図 Ag2区南壁断面図(ピット2)

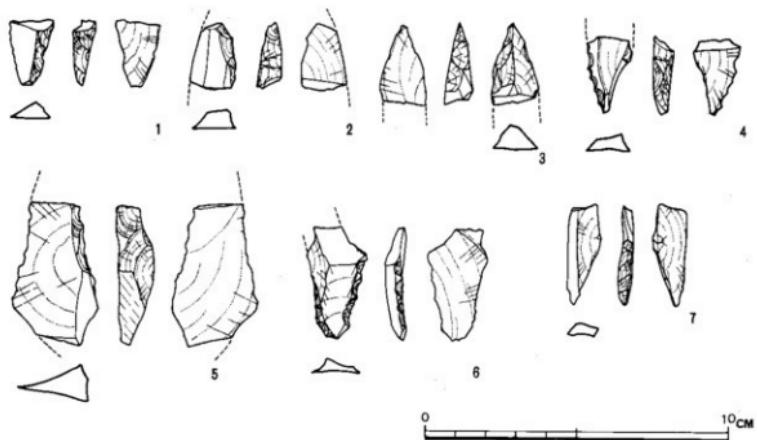


第28図 ピット復原図

ピット2は、遺物の集中が見られた為に、遺構ではないかと考えた時には、すでに上半を掘り下げていたもので、全体の形状は明らかにしえなかった。

第27図は、Ag2区の南壁実測図である。これは、遺物の集中が遺構であるかどうかを確認する為に作図した。この結果、第V層上面より掘り込まれていること、埋土はピット1同様、砂質傾向が強い第V層土に近似した土であること、畦畔部内に一端がかかっていることが確認された。上半は掘り下げていて確認できなかったので、図面を重ね合わせて推定復原図を作成した。これが第28図であり、径1.40m、深さ0.3mの円形ピットであったことがわかる。又、第28図の平面図で最終的に確認したピットの下端を書いているが、これを見てもわかるように、畦畔部に入っていた部分の遺物は極端に少なく、ピット内でも北側に偏在していたようである。

ピット内からは、多数の剝片と碎片及びナイフ形石器6点、翼状剝片1点（第29図）を検出した。



第29図 ピット2出土石器実測図

○遺物の説明

1は、ナイフ形石器の基部と考えられる破片で、ポジティブな面からプランディングが施されており、断面は三角形を呈する。破片であり型式は明確にできない。

2は、ナイフ形石器の先端・基部を欠損しているものである。ポジティブな面からプランディングが施されており、底面・二つのネガティブな面が確認でき、断面は台形を呈する。B型に属するものと思われる。

3は、ナイフ形石器の先端の破片で、ポジティブな面からプランディングが施されており、断面は三角形を呈する。型式は不明である。

4は、ナイフ形石器の基部の破片で、ネガティブな面から打面調整が、ポジティブな面からプランディングが施されている。刃部にもプランディングが施されている。底面・ネガティブな面が各一確認できる。A型に属するものと思われる。

5は、ナイフ形石器の先端・基部を欠損しているものである。ポジティブな面からプランティン

グが施されており、断面は三角形を呈する。不定形剥片を利用しているように思われるが、一応D型としておく。

6は、ナイフ形石器の先端部が欠損したものである。ポジティブな面から、二辺にわたってブランディングが施されている。不定形剥片を利用しているが、切出形を呈するので、E型としておく。

7は、翼状剥片の破片である。底面1・ネガティブな面1・ポジティブな面1が観察される。ネガティブな面からは、比較的細かい打面調整が施されている。翼状剥片A型に属する。

ピット内出土の遺物から、このピットの性格を推定したい。

ピットの特徴としては、第28図でわかるように、多数の剥片が含まれていたこと、剥片・碎片の統計的処理はできなかったが、小形（小形ナイフ形石器同様3.5cmを一つの指標としている）の剥片・碎片が大部分で構成されていること、ナイフ形石器・翼状剥片共破損していること、ナイフ形石器の型式は一型式に限定できないこと等である。ナイフ形石器の形状からして、大形剥片が含まれるとする方がより妥当であり、石器製作の諸段階の一端を示すものと理解したい。すなわち、ナイフ形石器の場合には、原石から翼状剥片を含めた剥片の採取を第一段階とし、剥片から製品を作る調整（プランディング等）を第二段階とする。こうした場合、このピットの性格は、第二段階には不適当な剥片、第二段階で生まれた碎片、調整段階で破損した製品を一括して廃棄した廃棄坑と考えられる。

石器製作をこうした二段階に分離することは、第一段階と第二段階は別地点で行われたことになり、従来の考え方とは必ずしも合致しないかもしれない。しかし、このピットの特徴からすると、最も合理的な解釈であると考えるので、今後のこうした類例の増加を待って、再度検討したい。

③ ピット3〔Aℓ3区〕(第30図・第31図)

ピット3は、Aℓ3区掘り下げ終了時に、西壁第V層中に小児頭大の石を見いだし、他地区第V層中にこうした石の包含が認められなかつたので、珪質部を除去して確認したものである。西壁で確認した際には、第V層上面からの掘り込みは確認できなかつた。

長径1.3m×短径1.0mの若干不整形な楕円形を呈する。深さは第V層上面からすると30cm前後になるものと思われる。含まれていた石は大きなもので長径35cmあり、30cm前後のものが大半をしめる。石質は花崗岩であり、著しく風化を受けているが、部分的に火を受けているものがあるよう思われる。この点についての分析結果は、今回の報告に間にあわなかつたので、次回の報告にゆずりたい。遺物は碎片が一点出土したのみで、時期は限定できなかつた。

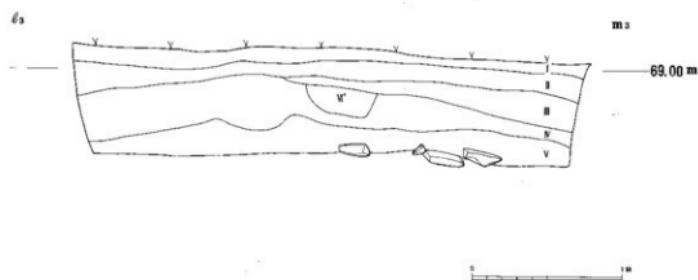
ピットの性格としては、ピット中の花崗岩が確実に火を受けていた場合には、炉跡と認定できるのではなかろうか。旧石器時代の炉跡と明確に断定できる資料は未見である為、こうした形状のものでも良いものかどうか判断できかねる。

又、火を受けていない場合、このピットの性格は不明とする他ない。

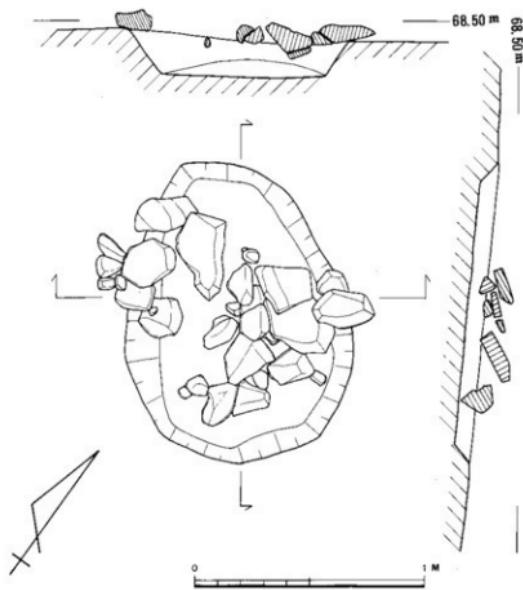
④ 小 結

全調査区での遺物の出土状況、及びピットの存在は、第V層上面が旧石器時代の一時期の生活面であると認定できる資料となった。この時期がナイフ形石器の文化に包含されることはピット1・2の資料で十分であろう。又、第V層上面を生活面としていた時期を明確にすることが、瀬戸内におけるナイフ形石器の分類に大きく寄与することは疑いない。それは、第I層～第IV層までに、従来の編年観による国府型・宮田山型・井島型を包括するため、第V層上面の文化が最も古いということができるよう。

ピット2から出土した翼状剥片と、ピット1・2出土のナイフ形石器を見る限り、国府型期とす



第30図 Aℓ3区西壁断面実測図



第31図 ピット3実測図

べきかもしれないが、畿内で言われる国府型ナイフ形石器と本遺跡のものとでは、若干異質な感をする。この点については次章で詳述する。

○ 磨群について

概報作成時より Ab 1・2 ~ Ac 0・1・2 区にまたがって所在した磨群の性格については種々の意見が出されていたが、その性格を限定できるものはなかった。その後、磨群全体の形状を確認する為に Ad 0~2・Ae 0~2 区をも含せて平坦な面とした。この結果、上方西側の磨群は Ae 0 区まで確認でき、未調査区方向に伸びることが判明した。下方東側のものは南から断続的に続いたが、次第に帯状の形状をなさなくなり、自然に消滅することが判明した。

この段階で、Ac 1~Ac 3 ポイント上と Ad 0~Ad 3 ポイント上に、確認の為に幅 1 m のトレンチを設定した。その結果、磨群としていたものは、岩盤の露頭であることが確認され、風化して拳大になった花崗岩が遊離して帯状の広がりを持つものと判明した。

(真鍋)



調査区より鷲羽山を望む

第Ⅳ章 調査の概要(2)

与島西方遺跡A地区において出土した遺物総数は、約14万点に達する。今回報告する遺物は、A地区の1列、c列、h列の計38区画から出土したものである。以後遺物の数量等はこの38区画におけるものである。

遺物は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、及びその後の時期に属する遺物が出土している。

第1節 旧石器時代の遺物

出土した遺物の大半が、旧石器時代に属するものである。遺物の共伴関係は認められない。翼状剥片石核、翼状剥片、横長剥片石核、横長剥片、縦長剥片石核、縦長剥片、ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器、円盤状石核、碎片、及び旧石器時代に属するものと考えられる叩き石がある。全遺物を報告することが不可能なため、器種毎に分類し、その代表的な遺物を図化し報告する。

(1) ナイフ形石器

ナイフ形石器は、破片も含めて1083点出土している。ほとんどが、サヌカイトを石材として利用している。翼状剥片、横長剥片、縦長剥片に調整加工を施して形成したものである。数点、黒曜石や流紋岩質のものがある。縦長剥片を利用したナイフ形石器も、少数ではあるが出土している。外形から観察しうる特徴をもとに分類した。その結果6型式に分類した。それに異石材質のナイフ形石器の一群を加えた。

A型ナイフ形石器 (図版1.1~12)

横長の剥片を素材とし、底面及びネガティブな面が1面の剝離面よりなるものである。177点出土している。12点図化した。

1. 2. 4. 6. 8. 10. 11. ネガティブな面とポジティブな面がほぼ平行している。両面の打点の位置が接近しているものである。プランティングは、ポジティブな面から施している。6は基部近くに打面調整の痕跡が、残存しているものである。

3. 5. 7. 9. 12. ネガティブな面とポジティブな面がずれている。両面の打点の位置が離れているものである。3. 9は両方向からのプランティングが認められるが、他のものは、全部ポジティブな面からプランティングが施されている。

A型ナイフ形石器は、外的な要素としては、国府型ナイフ形石器の条件を充たすものである。

B型ナイフ形石器 (図版2.1~15)

横長の剥片を素材とするもので、明確な1面からなる底面を有し、ネガティブな面を複数有するナイフ形石器である。148点出土している。15点を図化した。

1~6. やや大形のナイフ形石器である。いずれも刃部に剝離痕を有しているが、加工を意識したものではない。5は基部が折れている。6は基部に調整を施している。ネガティブな面を2面~4面有する。

7~15. やや小形のものである。ネガティブな面を2面~4面有する。14. 15は長さが4cm以下

の小形のものである。

C型ナイフ形石器（図版3. 1～5）

横長の剥片を利用し、複数の底面からなるものである。22点出土している。5点を図化した。

1. 底面が3面からなるものである。底面の剥離の方向は、いろいろな方向からの剥離痕が残っている。
2. 底面及びネガティブな面が2面からなるものである。
3. 4. 底面が2面、ネガティブな面よりなる。
5. ネガティブな面を残さず、底面が2面からなるものである。

D型ナイフ形石器（図版3. 6～11）

横長の剥片を利用し、断面形が三角形を呈するもので、底面を有しないものである。123点出土している。6点図化した。いずれもポジティブな面からのプランティングを施しているものである。

6. 刃部に古い剥離痕を有するが、特別の加工を意識したものではないであろう。断面形にあらわれる両側面のなす角度が大きいものである。

7～10. 断面形にあらわれる両側面のなす角度が大きいものである。

11. 断面形にあらわれる両側面のなす角度が小さいものである。

翼状剥片を用いたものかは明らかではない。

E型ナイフ形石器（図版4. 5. 1～23）

刃部が加工を施されていたりして一部に限られているものである。この型の中には、前記したA型～D型に属するもので、刃部に加工痕を有するものも含まれる。また、刃部に施された加工が極端な場合に、切出し状を呈するものもある。209点出土している。

- 1～5. いずれもA型のナイフ形石器の刃部に加工を施したものである。プランティング、及び刃部の加工は、ポジティブな面から施されている。1の長さ3.1cmのものから、3の長さ5.8cmのものまである。

6～8. B型のものの刃部に加工を施したものである。プランティング、及び刃部の加工は、ポジティブな面から施されている。6は、先端部、及び基部に加工を施している。

9. C型のものに加工を施したものである。

10. 11. D型のナイフ形石器の刃部に加工を施したものである。刃部の加工は、ポジティブな面から施されている。10のプランティングは、ポジティブな面からだけではなく、ネガティブな面からも行われている。

12～14. 不定形な剥片を利用したものである。12. 13は、刃部に加工を施しているが、14は、剥片を剥離時から、底面は平坦なものである。

15～20. 基部ではなく、先端部を鋭くするために刃部に加工を施したものである。18は、加工が刃部全体に及ぶものである。20は、全体的に丸みを帯び、先端のみを鋭利しているもので、ポイント状のものである。

21～22. いわゆる切出し状のナイフである。いずれも底面に刃部があるものではなく、打点に近い一側縁が、刃部となるものである。

23. 縦長剥片の両側縁に加工を施したものである。

F型ナイフ形石器（図版6. 1～6）

今までの分類に組み込めないナイフ形石器である。140点出土している。6点図化した。

- 横長剝片を素材としたものである。底面と剝離面がなす角が直角を呈し、刃部となり得ない。打点側の一側縁を刃部としている。
- 横長剝片を素材としたナイフ形石器である。明確なネガティブな面は有しない。自然面を一部に残す。刃部は一部に限られている。
- 横長剝片を素材としている。底面に自然を残す。
- やや大形のナイフ形石器である。刃部が半分程度欠失している。
- 縦長剝片を素材とする。打点に近い両側縁部にプランティングを施す。
- 横長剝片を素材とする。打点を残しプランティングも一部を除いてネガティブな面から施している。

異石材質のナイフ形石器 (図版6. 7~8)

ナイフ形石器のほとんどはサスカイト製のものであるが、異石材をもとにしたナイフ形石器が5点出土している。残存度の良い2点を図化した。

- 黒曜石を原材とする。小形の切出し状を呈する。縦長剝片に加工を施して、成形している。重(1)
- 流紋岩と考えられる石材を利用している。縦長剝片を素材としたもので、切出し状を呈する。
- 5点出土した異石材質のナイフ形石器は、流紋岩製の1点をのぞいて黒曜石製のものである。全部縦長剝片を素材としている。

各形式のナイフ形石器の中で完形のものの大きさは、表のとおりである。

A型は、外形的には、翼状剝片を素材とした。いわゆる国府型ナイフの条件を充たすものである。長さが約3cm以上6.5cm未満、幅が3cm未満の中におさまる(表7)。これは、翼状剝片石核の剝離痕の計測値の分布範囲と大きな差は認められない。ネガティブな面とポジティブな面とがほぼ平行し、両面のリング、フィッシャーの収束から推定する打点の位置が近接しているものは、石核から翼状剝片を剝離する際に、打点がほぼ一直線に後退していくものであろう。また、両面の打点の位置がずれているものは、翼状剝片を剝離する際に打点が打面上を左右に動いているものである。打点が打面上を左右に動きながら剝片を剝離したものであろう。

B型はA型と比較すると表8における計測値の分布範囲がやや広がる傾向が認められる。しかし、それほど大きな差ではない。翼状剝片石核の剝離痕の中に、ネガティブな面を複数有するものがある。また、翼状剝片にもネガティブな面を複数有しているものがある。B型の中には翼状剝片を素材としたナイフ形石器も含まれる可能性がある。

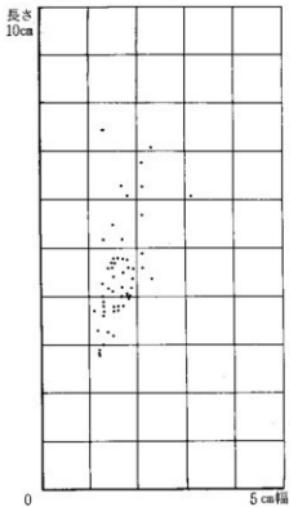
C型は、出土点数が他の型のものと比較すると異常に少ない。しかし翼状剝片石核の中に底面を複数有するものがあり、翼状剝片を素材としている可能性がある。また、C型の計測値(表9)もA型・B型とそれほど差がない。

D型は断面三角形を呈するが、その中にはプランティングにより、ネガティブな面を除去したも

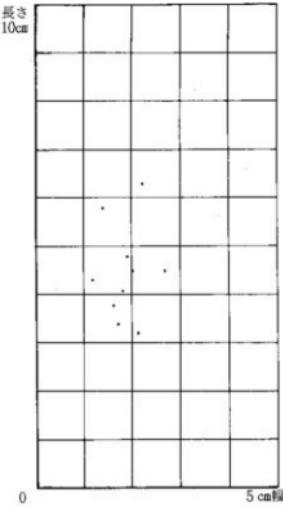
第7表 ナイフ形石器(A型)計測表

長さ 10cm			
0			
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76			
77			
78			
79			
80			
81			
82			
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94			
95			
96			
97			
98			
99			
100			

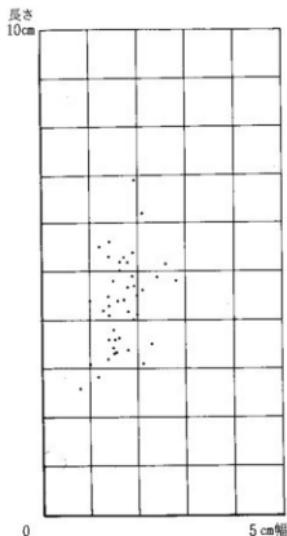
第8表 ナイフ形石器(B型)計測表



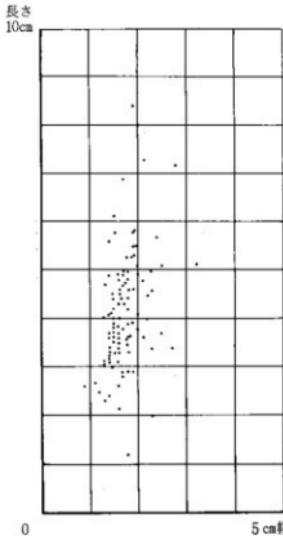
第9表 ナイフ形石器(C型)計測表



第10表 ナイフ形石器(D型)計測表



第11表 ナイフ形石器(E型)計測表



の存在が想定される。表10にみられる計測値の分布範囲にも、A型、B型、C型のものとさほど差違も認められない。

E型のナイフ形石器も、刃部に加工を有しているものの、それ以外の面においては、A型、B型、C型、D型のナイフ形石器を含み、それらは、翼状剥片を利用している可能性があることから、いちがいに、不定形の剥片を利用したものであると断定を下すわけにはいかない。しかし、切出し状のナイフ形石器の中には、翼状剥片を利用したとは考えられないものもある。また、E型の計測値（表11）の分布範囲は、A型、B型、C型、D型のものと比較すれば、大きく拡がる傾向が認められる。このことも翼状剥片を素材としていないナイフ形石器の存在を示している。また、E型に分類したものの中に刃部の先端部に加工を施しているものがある。これは、機能的にはナイフというより、むしろポイントと考えた方が良いものである。

F型は不定形の剥片を利用しているものが多いため、大きさは様々である。表12に計測値の一覧を示した。

(2) 翼状剥片（図版7.1～11）

横長剥片の中でネガティブな面、ポジティブな面、及び底面があること。ネガティブな面からの打面調整痕を残すもの。ポジティブなバルブを残すもの。以上の条件を充たすものを翼状剥片と認定した。翼状剥片は、約400点出土している。

出土した翼状剥片は、以上の条件を充たしながらも、3種類に大別できる。

A型は、明確な打面調整痕を残し、ネガティブな面が1面からなるもの。打面調整によって生じた縦線上に打点がある。この型の翼状剥片は、形状においては、典型的な翼状剥片と認定できるものである。

B型は、ネガティブな面を複数有するものである。

C型は、打面調整を施しながらも、打点が縦線上ではなく、すべて平坦な面上を打撃しているものである。

Aに属するものは、2点図化した。

1. 2. いずれも2回の打面調整により、打点部を形成している。1は、底面が広く、2は、底面が一部欠失しているものである。

B型に属するものは、4点図化した。

- 3～5. いずれもネガティブな面が2面からなるもので、打点が左右にずれている。

6. 約半分が欠失しているものである。数度の打面調整を行っている。ネガティブな面が上下2段になっている。底面を2面有するものである。

C型に属するものは、5点図化した。

第12表 ナイフ形石器（F型）計測表

長さ 10cm								
	0		5 cm				幅	
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・

7. ネガティブな面を5面有するものであり、狭い底面を有するものである。
8. 2回の打面調整により打点部を形成し、底面が2面からなるものである。
9. 小形のものである。基部が欠失している。2回の打面調整により、打点部を形成している。
10. 底面が2面からなる翼状剥片であり、打面調整は明確ではない。
11. 数回の調整で打面部を形成したものである。ネガティブな面は複数ある。

B型、C型は、典型的な翼状剥片には含まれないが、翼状剥片石核の中には、剥離される翼状剥片のネガティブな面が、複数存在することが想定されるものや、打点が、打面調整によって生じる稜線上ではなく、平坦面を打撃して、剥片を剥ぎ取った痕跡を有するものがあることから、翼状剥片の範囲に加えた。翼状剥片の大きさは、表13に示した。A型で最小の計測値は、長さ28cm、幅1.5cm、最大が、長さ7cm、幅3.1cm。B型で最小の計測値は、長さ3cm、幅1.8cm、最大のものは、長さ5.3cm、幅2.8cmである。C型では、最小の計測値は、長さ2.7cm、幅2.1cm、最大の計測値は、長さ4.7cm、幅2.3cmある。A型、B型、C型ともに、大きさの面では、それほどの差違は認められない。翼状剥片石核の剥離痕は、長さが3cm～7.2cmと大きさに幅がある。翼状剥片もこの範囲の中に、ほぼ含まれ、大きさの面では、それほどの矛盾は認められない。

(3) 翼状剥片石核（図8、9、1～13）

翼状剥片石核と認定したものは次の条件を充たしたものである。

1. 明確な打面調整を施している。
 2. 明確な底面を有する。
 3. 打点が一定方向に後退して、底面を共有する剥片を連続して剥ぎ取ったと考えられるもの。
 4. 石核自体と目的である剥片の剥離痕の横の長さとが、それほど差がないもの。
- 出土した翼状剥片石核は、大きく2種類に分類できる。A型、1方向からのみ翼状剥片を剥ぎ取ったもの。B型、相反する2方向から翼状剥片を剥ぎ取ったものの2種類である。出土した点数はA型の方がB型よりも多い。
- A型に属するものは、9点図化した。
- 1～3. 翼状剥片の剥離痕と石核の幅が一致するもので、あまり打点が左右に乱れずに一直線に後退したと考えられるものである。2、3は、自然面を残すものである。
 4. 5. 底面が複数の面からなるものである。
 - 6～8. 打点が左右に乱れたために、剥離痕が、複数残存しているものである。いずれも自然面を残している。
 9. 打面調整は施しているが、剥片を剥ぎ取る際に、稜線上を打撃していないものである。

第13表 翼状剥片計測表

長さ 10cm				
5cm幅
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..

B型に属するものは、4点図化した。

- 10～12. いずれも相反する側面から剥ぎ取っているが、底面を共有するものである。10は、一方の剥離面において打点が左右に動き、ネガティブな面を複数有するものである。11は、底面が位置する側に自然面を残すものである。
13. 両側面から翼状剥片を剥離したものであるが、10～12とは異なって、底面を共有しないものである。一方の剥離痕は、底面を複数有するものである。他の剥離痕のある面は、底面が安定せず、底面側に自然面を有するものである。

翼状剥片石核の中には、翼状剥片石核の中には、翼状剥離する際の打点が、左右にややずれたためか、ネガティブな剥離面が、重なり合って複数残存しているものがある。このことは、翼状剥片及び、翼状剥片を利用した国府型ナイフ形石器においても、ネガティブな面を複数有するものの存在が想定される。また、底面が複数あり、剥離した翼状剥片にも底面が複数生じることが想定される翼状剥片石核もある。翼状剥片には、必ずしも底面や、ネガティブな面が単数であるものだけではなく、複数の面からなるものも存在することがわかる。また、A型の翼状剥片石核の中で、打点が、打面調整によって生じた稜線上にはないものが存在する。このことから打点が平坦な面上に位置する翼状剥片が存在することがわかる。

翼状剥片石核において、翼状剥片を剥離した後のネガティブな面の大きさは、表14に示した通りである A型の翼状剥片石核において、横幅は3.2cm～7.2cmである。この範囲の中に入る横長剥片、及びナイフ形石器は大きさの面では、翼状剥片もしくは、翼状剥片を利用したナイフ形石器、つまり國府型ナイフ形石器の範疇に含まれることになる。もしも小形ナイフ形石器を、大きさの面で國府型ナイフ形石器から分離するならば、少なくともこの地域においては、3cm未満のものでなくてはならない。

また、剥離技法の面において、B型の中に一方の面において底面を明確には有しないものが存在することは注意する必要があろう。この石核から底面が自然面となる翼状剥片の存在も推定される。

(4) 横長剥片石核 (図版10. 11. 1～6)

横長剥片を剥離した痕跡のあるもので、翼状剥片石核を除いたものである。大別して3種類ある A型、一方から剥離していくもの。B型、相反する二方向から剥離したもの。C型、並列して横長剥片を剥離したものである。

A型に属するものは、2点図化した。

1. 2打面調整状の剥離痕を有するものである。打面調整で得られる横長剥片と、その打面調整をもとに得られる剥片とが、大きさ、形状で極端な差はないものである 後者の剥片を剥ぎ取った痕跡は、打点が左右に大きくずれている。2は、底面がいろいろな方向からの剥離で乱れてい る。

第14表 翼状剥片石核の剥離痕計測表

長さ 10cm				
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

5 cm幅

0

B型に属するものは、3点図化した。

3～5. いずれも打面調整のための剥片を、目的とする横長剥片との区別がつかないものである。横長剥片を剝離した痕跡をそのまま打面調整として利用している。相反する二側面から剥ぎ取られているため、最終的には横に長い形を呈するものである。5は、側縁に細かく何度も打撃を加えている。スクレイパーに転用したのかもしれない。

C型に属するものは、1点図化した。

6. 最終的に横長剥片を剝離した痕跡は、かなり小さいものである。隣接する二側縁に打撃を加え、横長の剥片を剥ぎ取ったものである。スクレイパーに再利用されたものかもしれない。

A型のものは、広義の翼状剥片石核の範疇に含まれるものかもしれない。しかし、出土しているナイフ形石器で底面が自然面を有するものもあることや、翼状剥片石核で底面が自然面となる可能性があるなど、打面調整で得られた剥片も利用された可能性がある。翼状剥片石核と、B型の横長剥片石核の両方の要素を有するものと位置づけることができるであろう。横長剥片石核の剝離痕の計測値を表化した（表15）。翼状剥片石核の剝離痕の計測値の表と比較すると、横長剥片石核における方は、一定の大きさに集中する傾向があまり見られず、拡散していることがわかる。横長剥片石核は、確実な打面調整を施されず、翼状剥片石核ほど、剝離される剥片の大きさの規制を受けないからであろう。そのために、横長剥片石核から得られた剥片は、一貫性に欠けるものとなるのであろう。

(5) 縦長剥片 (図版 12, 13, 1～26)

縦長剥片石核から剝離された縦剥ぎの剥片である。約600点出土している。25点図化した大きさは、長さ 1.5 cm～8.5 cm、幅 0.4 cm～2.9 cmの範囲に含まれる。大きさの面で、かなりの差違がある。一線を画することは、難しいが、幅が約1 cm、長さ 3.4 cm以下のものと、幅 1 cm以上、長さ 3 cm以上のものとに分離することができるかもしれない。

1～15. やや大形のものである。断面形は、三角形のものと、合形のものがある。3は自然面を一部に残している。

15～26. 小形のものである。断面形は、三角形を呈するものがあり、大形のものと共通している。

縦長剥片のほとんどは、表面が白く風化して、やや軟質気味になっている。これは同シサヌカイ

第15表 縦長剥片石核の剝離痕計測表

長さ 10 cm							
	5 cm			幅			
0							
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
19							
20							
21							
22							
23							
24							
25							
26							

第16表 縦長剝片計測表

長さ 10cm				
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
0				5cm幅

トでありながらも、他の石器とは、石材が少し異なるものか、
もしくは、同じ石材であるが、他の石器より古い時期のため、長さ
風化がより進んでいるのか、いずれになるかは不明である。
縦長剝片石核も、表面が白く風化しているものが多い点は、
縦長剝片と共に通している。縦長剝片の計測値は表16に示した。

(6) 縦長剝片石核 (図版14.1~11)

縦長剝片石核は、剝離痕の位置、大きさ等から次の4種類に
区分できる。

A型 一側面をめぐるように、縦長剝片を剝離した剝離痕
が認められるもの。

B型 複数の面に、縦長剝片を剝離した痕跡が認められる。

C型 一側面から一枚の縦長剝片が剝離されたもので、石
核の幅と、縦長剝片の幅とが一致するもの。

D型 小型の剝離痕を残すものである。

A型の縦長剝片石核は、3点図化した。

1.板状の剥片を石核の素材として用い、側面に石核調整痕
は認められない。一回の剝離で、平坦な打面を形成する。
一側面に、3面の縦長剝片の剝離痕が認められる。

2.板状の剥片を石核の素材とする。一側面に、3面の縦長
剝片の剝離痕を有する。

3.板状の剥片を石核の素材とする。一回の剝離で平坦な打面を形成する。一側面に上下方向から
交錯する剝離痕が複数認められる。

B型の縦長剝片石核は3点図化した。

4.板状の剥片を石核として利用する。一回の剝離で打面を形成し、相反する2側面に複数の縦長
剝片の剝離痕が認められる。縦長剝片の剝離痕の一面を打点として利用し、縦長剝片を剥ぎ取
っている。

5.板状の剥片の石核として利用する。一回の剝離で打面を形成し、相反する2側面に、縦長剝片
の剝離痕が認められるものである。

6.柱状を呈するものである。板状の剥片を石核の素材としたのかは不明である。打面調整の剝離痕
を打面として、三方向に縦長剝片の剝離痕が認められる。

C型の縦長剝片石核は2点図化した。

7.板状の剥片を石核の素材とする。一回の剝離で打面を形成し、一面の縦長剝片の剝離痕が認め
られる。

8.板状の剥片を石核の素材とする。一回の剝離で打面を形成し、一面の縦長剝片の剝離痕が認め
られる。この石核だけでは不明であるが交互剝離を施して剥片を剝離し、それぞれの剝離が打
面調整を兼ねているのかもしれない。

D型は、3点を図化した。

9.打面を一回の剝離で形成し、一方の側面の縦長剝片の小形の剝離痕が認められるものである。
石核の側面に石核調整の剝離痕が認められる。

10.一回の打面調整で打面を形成し、一方の側面に縦長剝片の剝離痕を2面残すものである。一方

の側面に、石核調整のものと考えられる剝離痕が認められる。

11. 板状の剝片を石核の素材として利用する。一回の剝離で打面を調整した後に、一方の側面に縦長剝片 2 面剝離している。さらに、最初の打面調整の面と直交する面を、打面形成し、複数の縦長剝片を剝離している。

縦長剝片石核の大部分は、板状の剝片を石核の素材とする。そのため石核の側面の調整はあまり認められない。側面の調整を施しているものも一方の側面に限られる。打面調整は一回の打撃で平坦面を形成するものがほとんどである。出土した縦長剝片石核の剝離痕と、縦長剝片の大きさには差がある。縦長剝片石核の剝離痕は、最大長 4.9 cm、最大幅 1.7 cm である（表17）のに対して、縦長剝片においては最大長が 8.5 cm、最大幅が 2.9 cm あり、大形のものが多い点が異なっている。

このことは、検出された縦長剝片石核以外に、おそらく同様な技法を用いた大形の石核が存在することを暗示していると考えられる。また小形の剝離痕においては、長さ 1.1 cm、幅 3 mm のものがあり、また縦長剝片石核においては、長さ 1.5 cm、幅 4 mm のものがある。両者は小形のものにおいては、ほぼ共通する範囲におさまっている。

また A 型の石核には、上下方向からの交錯する剝離を施しているものがあり、剝離法に若干の差が認められる。

C 型の石核は、彫器の可能性もある。

(7) スクレイパー (図版 15, 16, 1 ~ 10)

スクレイパーとして認定したものは、鋭利な側縁に加工を施して刃部を形成しているものである。約 100 点出土している。10 点を図化した。

1. 2. 大形のものである。両者ともに刃部とは逆な側面に自然面を残存している。断面形が三角形を呈するものである。1 は、刃部にみられる加工は基本的には一方からのものである。2 は、両側面から加工している。
3. 不定形の剝片を素材としているもので、刃部の加工は両側面からのものである。
4. 横長剝片を利用したものである。刃部の加工は、一方の側面からのみである。
5. 6. 横長剝片を素材としたものである。刃部は、一方の側面からの加工で形成されている。いずれも刃部とは逆な面に調整を施している。
7. 二側縁に加工を施して刃部としているものである。刃部の加工は、一方の側面からのものである。
8. 横長剝片を素材としている。刃部は、一方の側面からの加工で形成されている。刃部と逆な側面にはプランティング状の加工が施されており、ナイフ形石器に属するものかもしれない。
9. 横長剝片を素材としている。小形のものである。刃部は、一方の側面からの加工で形成されている。
10. 翼状剝片石核を再利用したものである。隣接する二側縁を刃部とするものである。刃部は、一方の側面からの加工で形成される。

第17表 縦長剝片石核の剝離痕計測表

長さ					
5 cm
4.
3.
2.
1.
0					
					5 cm 幅

(8) 舟底形石器 (図版 17. 1~5)

舟底形石器は約15点出土している。そのうち5点を図化した。

1. 2. ほぼ完形のものである。風化が進んでいるため甲板面の剥離方向は不明である。両側面の剥離が底面までは及んでいないため断面は台形を呈する。1は底面に自然を残すものである。
3. 完形のものである。横長剝片を素材としている。断面は三角形を呈する。
4. 5. 破片であるために甲板面の剥離方向は不明である。断面は台形を呈する。1~3と比較するとやや大形のものであろう。

(9) 叩き石 (図版 18. 1~4)

叩き石と認定したものは、石材の端部もしくは、側面に石器製作の際に使用痕と考えられる剝離痕があるものである。石材は砂岩及び結晶片岩^(註2)である。結晶片岩製のものは、風化のためか、かなり軟質になっているものもある。約30点出土している。4点を図化した。

1. 砂岩質のもので、側面に使用痕と考えられる剝離痕が認められる。完形のもので長さ 3.3cm、厚さ 1.9 cmを計測する。
2. 砂岩質で、長さ 12.6 cm、幅 4.2 cmある大形のものである。両端に剝離痕があり、一方は大きく剝離している。
3. 4. 両者ともに端部に使用痕と考えられる剝離痕が認められる。使用の際に生じたのかどうかは不明であるが、途中から折れている。結晶片岩製の叩き石である。後者は、断面が半分欠失している可能性がある。

(10) 円盤状石核 (図版 17. 5~6)

円盤状石核と仮称したものは、任意なる方向から剝片を剥離した石核で、外形が円形を呈するものである。2点出土している。

5. やや小形のものである。縁辺から中心に向って剝片を剥離したものである。
6. 大形の石核である。任意な方向から剝片を剥離している。盤状というより、むしろ球形に近い外形を呈する。

(11) 小 結

今回調査した地区において、遺物は各層に混在して出土し、層位自体が限られた時期の遺物を包含している状況ではない。そこで遺物を器種毎に大別して、その代表的なものを紹介してきた。しかし大半の遺物は現在整理中であるため、石器の総点数、器種毎の数量及び今回報告しなかった区域における実体の解明等の作業の成果はまだ公表できないのが現状である。そのため今回報告した以外の器種や、器種の中でのバラエティの存在は否定することができない。遺物の先後関係や共存関係は、本調査においては、確認することができなかった。

ここでは、遺物の項目でふれなかった点について述べてみたい。

現在瀬戸内地域において、旧石器時代は各遺跡から出土した遺物に代表させて次のような編年が組まれている。敲打器→刃器→ナイフ形石器→細石器→有茎（舌）尖頭器（石鏃、土器併存）である。^(註3)

今回報告する A 地区 1 列、c 列、h 列で出土した遺物が関連する時期は、時期の帰属が不明である縦長剝片石核をのぞいて、ナイフ形石器に代表される時期以降である。ナイフ形石器は、鎌木義昌氏により国府型ナイフ形石器、宮田山型ナイフ形石器、井島型ナイフ形石器に分類・編年された。国府型ナイフ形石器は、瀬戸内技法により石核から剝離された翼状剝片を素材として得られるナイフ形石器である。宮田山型ナイフ形石器は、"瀬戸内技法のように整然としたシステム" なく、

外形や大きさがきわめて変化にとんでいるナイフ形石器となされている。井島型ナイフ形石器は、小形のナイフ形石器で、切り出し状の外形を有するものもある。宮田山型ナイフ形石器と井島型ナイフ形石器は、大きさの面で区別されている。宮田山型ナイフ形石器は、4 cm以上のもので、井島型ナイフ形石器は、4 cm未満のものであるとされた。また間壁葭子氏は、櫛石島で採集された遺物の中で、『剥離面と打面が交互に入れかわる方法で、剥離が繰り返され』やや小形の横長剝片を無駄なく剥離したと考えられるものを宮田山型ナイフ形石器の石核と考えられた。またこの石核から剥離されたと考えられる横長剝片にはネガティブな面を複数有するものが存在しているとされた。この交互剥離により剝片を剥ぎとった石核は、翼状剝片石核とはかなり異なるが、打面調整が少なくなっただけで、効率よく剝片を得るように、翼状剝片石核から進んだものであると解釈した。^{注(5)}

近年大阪府高槻市及びその周辺において旧石器時代に属する遺跡の調査が進み、郡家今城遺跡^{注(6)}、津之江南遺跡^{注(7)}、塚原遺跡^{注(8)}等の内容が報告された。郡家今城遺跡C地点においては、国府期に属するユニット・礫群が検出され国府期における石器群の組成の一部が解明された。津之江南遺跡C地点において出土した石器群は上記した国府期に続く宮田山期に位置づけられた。また塚原遺跡で採集された石器群は、一部の国府型ナイフ形石器を除いて、小形化しており、技法の上でも瀬戸内技法によつておらず、兵庫県飾磨郡太島遺跡、香川県香川郡井島遺跡の遺物とならんで小形ナイフ形石器に代表される時期の遺物とされた。

与島西方A地点で検出されたナイフ形石器は、大形のものから小形のものまで混在して出土した。このことは国府期のものから、小形ナイフ形石器に代表される時期のものまで含んでいることを示すものであろう。出土したナイフ形石器の中で完形のものを選出し、大きさの分布を調べたが、一線を画するような分布の偏在は認められなかった。このことは、単に大きさの面だけではナイフ形石器の分類とはなり得ないことを示しているように思える。ナイフ形石器を編年する上で、瀬戸内技法が盛行した時期、衰退する時期、瀬戸内技法が認められない時期に区分することが可能であれば、外形の大小だけではなく、ナイフ形石器の成形技法の問題を考慮しなければならない。そこで出土した翼状剝片石核及び横長剝片石核についてみてみたい。

翼状剝片石核は、規格化された一定の大きさを有する剝片を、効率的に無駄なく連続的に剥ぎ取ることを具体化した瀬戸内技法によるものである。そのため翼状剝片石核と認定するには次の条件が必要となる。石核自体の幅と、目的である剝片の幅がほぼ一致すること。打撃の方向が一点に集中することを、より可能とする打面調整が施されていること。安定した刃部を剝片が有するように、明確な底面相当面を有すること。打点が一定方向に後退して底面を共有する剝片を連続して剥ぎ取ったと考えられるもの。以上の4点が原則としてあげられる。この条件を原則として充たすものとして取り上げた翼状剝片石核にも、剥離痕（石核の大きさに当然制限される）の大小、一方向からのみではなく、逆方向からも剝片を剥ぎ取ったもの的存在、打点が左右に少々ずれたもの的存在等のバラエティが存在する。目的である剝片の剥離痕の長辺の長さは、3 cm～7.2 cmまでの幅がある。このことは、この大きさの中に含まれる横長の剝片及びナイフ形石器は大きさの面では、翼状剝片もしくは翼状剝片を利用した可能性を有するものとすることができます。また打点が左右にずれないと考えた翼状剝片石核は、目的である剝片の剥離痕が、横に複数のネガティブな面を有するものであり、ネガティブな面は互いに切り合っており著しくは離れていないものである。この石核から剥離される翼状剝片石核はネガティブな面を複数有するものであろう。このことからネガティブな面を複数有する横長の剝片もしくはナイフ形石器も、翼状剝片もしくは翼状剝片を用いたナイフ形石器である可能性を有する。

また横長剝片石核は、横長の剝片を剥ぎ取った石核の中で翼状剝片石核を除くものである。可能性の問題としてはさまざまな石核の存在が推定できるが、今回取り上げた横長剝片石核には次のようなものがある。

石核自体の幅が、目的である剝片の剝離痕の幅とは大きく異なるもの。打面調整がそれ独自の機能を有するものではなく、打面調整の際に剝離された剝片をも石器の素材として利用する目的を有しており、その結果として本来の打面調製としての完結性に欠け、機能的に乱れているものであるこの条件を充たすものとしてA型、B型、C型の横長剝片石核をあげることができる。

A型の横長剝片石核は広義において翼状剝片石核の範疇に加えることができるものかもしれないが、目的である剝片の剝離痕が石核の幅と比して小さく安定した大きさの剝片を剥ぎ取ることが難しいものである。この石核自体は、より打面調整にちかい剝離痕が存在する側の面に自然面を残す盤状の剝片を石核の素材として用いたものであるが自然面を有しない盤状の剝片を素材とした同様の石核の存在が容易に推定し得る。この種の石核においては打面調整により剝離した剝片も石器の素材として利用された可能性がある。この型の石核は翼状剝片石核A型のものと共通する要素として、一方向から剝離していく点があげられる。B型の横長剝片石核は、完全に、打面調整と目的である剝片の剝離とが区別できないもので、交互剝離により、剝片を剝離し、利用可能な剝片を石器の素材として用いたものである。一方向からだけではなく相反する方向からも交互剝離により剝片を剥ぎ取った石核である。相反する方向から剝片を剝離する点においてはB型の翼状剝片石核と共に通する要素を有している。A型、B型からはネガティブな面を複数有する横長剝片が剝離される可能性が大である。C型の横長剝片石核は、目的である剝片の剝離痕と石核自体幅が大きく異なるもので、安定した大きさの剝片を剥ぎ取ることが難しいものである。この石核から剝離した剝片は、ネガティブな面が一面からなり、底面を有し、打面調整痕を残す。翼状剝片も外形的な類似のものであれば横長剝片石核から剝離可能である。また横長剝片石核の剝離痕の長辺の長さは、2.5 cm～11 cmまであり、剝離痕の大きさの差が目立つ。このことは横長剝片石核が剝離した剝片の大きさより、石核自体の方がかなり大きいことや、打面調整が本来の目的の完結性を失なって不十分である点に起因するものであろう。本遺跡において出土した翼状剝片石核と横長剝片石核は、定形化した横長の剝片を得られ易いか、難しいかの面で大きな差があるが、諸属性において隔絶したものではなく、技法上においては連続したものであるとみなすことができるであろう。このことは間壁震子氏が、翼状剝片石核から宮田山型の石核が暫時変化したと考えられていることとほぼ同様であろうが、横長剝片石核から剝離された剝片は大きな面で大きなばらつきがあり、刃部等の安定度も少ないものである。剝片の中で素材として利用可能なものは、剝片の数量の割には欠して多くなく、むしろ非能率的な剝離技法であろう。

ナイフ形石器をA型～F型まで分類したが、石核から剝離される剝片の様相（外形及び大きさ）を考慮に入れると、ナイフ形石器におけるA型～C型は翼状剝片石核、横長剝片石核の両者のいずれを石核として利用したものであるかの区別はし難い。ナイフ形石器のみでは、数量的にかなりまとまるが、石核と共に伴しない限り時期もしくは所属を決定するのは難しいであろう。またE型の一部及びF型はかなり不定形の剝片を素材としており、中に翼状剝片を素材としたとは考えられないものがあり、瀬戸内技法によるものではないものとして区別することが可能であろう。

また本遺跡のナイフ形石器はA型に属する外形上は翼状剝片の要素を有しているものにおいても小形のものが多い。郡家今城遺跡より出土したナイフ形石器と比較すると長さの面で、4 cm前後に集中する傾向がみられ、小形のものが多い点が指摘される。

また縦長剝片石核において板状の剝片を石核の素材とし、石核の側面の調整があまりみとめられないことも一つの特徴である。なおこの種の石核は現在整理中である羽佐島においても同様な傾向を示す。(藤好)

- 注 1 高松高等学校教頭山田幹夫氏の御教示を得た。ただ剝離面の風化が進んでいるので不安定な要素もある。
- 注 2 同 上
- 注 3 鎌木義昌・高橋 譲 1965 「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学 I』
- 注 4 同 上
- 注 5 間壁良子 1968 「香川県坂出市櫛石島採集の石器」『倉敷考古館集報 4』
- 注 6 高槻市教育委員会 1978 「郡家今城遺跡発掘調査報告書」『高槻市文化財調査報告書第11冊』
- 注 7 高槻市教育委員会 1976 「津之江南遺跡発掘調査報告書」『高槻市文化財調査報告書第8冊』
- 注 8 松藤和人 1978 「土器以前の文化」『大阪府史 I』
- 他 ○同志社大学旧石器文化談話会 1974 「ふたがみ」
○松藤和人 1974 「國府型ナイフ形石器をめぐる諸問題」『ブリュード 19』
○柳田俊雄 1977 「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点」『ブリュード 20』
○杉原莊介編 1965 『日本の考古学 I 先土器時代』
等の文献を参考した。

第2節 石 鑄

石鑄の出土総数は、300点余りを数える。今回報告するのは、1列、c列、h列出土のうち、概報で公表したc列の大部分を除く、47点である。

今回報告する意図は、予備調査報告Ⅱで問題提起された、石鑄の年代的帰属について、現時点での理解を提示することにある。

全体の約16%の資料であるが、全体を代表するものと考えている。

まず、分類案を提示したい。

今回、4大別11類に分類した。分類の基準として、

①形態を主に考えた。

②①に付随する問題であるが、調整に一定の法則性を見い出すことができず、個別資料の個性と考えて從とした。

③中間タイプは、形態的により近い側に含ませ、多くのタイプを設定しないようにした。
の、三点を挙げた。

最初に大別として、(I)凹基・(II)平基・(III)凸基・(IV)大形に分けた。このうち、(IV)大形の基準は、あとで述べるが、第18表の結果を見ても、他の石鑄に比べて大きく、重いことがあげられる。

(I)(A)としたのは、正三角形もしくはそれに近い形のもので、二等辺三角形のものは(B)とした。
(A)-1類は、抉りが浅く、縁辺部に調整を加えただけで、中央部には剝片段階の面(平坦な面)を残す。

(A)ー2類は、鎌身と鎌幅がほぼ同じ長さで、正三角形を少しづぶした形になる。抉りは深く、縁辺部の調整も細かい。又1類に比較して小形である。

(B)ー1類は、抉りが浅く、他の二辺が直線的に伸びるものとした。調整は細かく、中央に平坦な面を残さない。断面はレンズ状を呈する。

(B)ー2類は、抉りが浅く、他の二辺が直線的に伸びない為に、両耳で最大幅にはならないものとした。

調整は細かく、中央に稜をつくるもの多いため、断面は菱形状を呈する。

(B)ー3類は、抉りが深く、他の二辺が直線的に伸びるものとした。抉りが深い為、両耳が顕著に見られる。調整は細かいが、縁辺部に限られ、中央に平坦な面を残す。

(II)は4形態に分類した。

(II)ーA類は、正三角形を呈するものとした。比較的小形のものが多く、調整も顕著ではない。点数は三点だが他のタイプに比べて風化が進んでいる。

(II)ーB類は、二等辺三角形を呈するものである。調整は大きく、荒い。

(II)ーC類は、ロケット形のものである。(II)ーB類のように、二辺が直線的に伸びず、途中で外方向に変わり、両耳を造り出す。調整は丁寧である。

(II)ーD類は、柳葉形を呈するものである。調整が荒く、中央に平坦面をもつ。風化が他の形態のものより、(II)ーA類同様進んでいる。

(III)類は、卵形の鎌身に、茎を付け加えたものである。調整は大きく荒い。風化は(II)ーD類同様進んでいる。

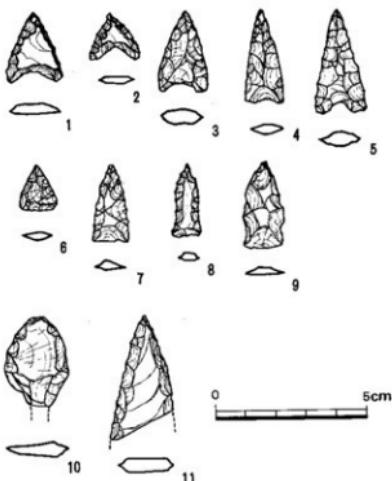
(IV)類の大形鎌は、多様な形態のものがあるが、ここでは一括した。形態を大きく見れば、二等辺三角形を呈するものが多い。又、調整から見ると、丁寧なものと荒いものに二分できる。丁寧なものは二長辺の縁辺部に調整を施しており、中央に平坦な面を持つ。荒いものは、中央に平坦な面を造らず、大きな階段状剥離によるものが多い。

第32図は、各形式の典型的なものを図示した。

分類は以上である。

第18表は、長さと幅の相関図である。どの形式も、おおかたまとまりを見せ、石鎌の分布範囲は、長さ 0.9 ~ 3.5 cm、幅は 1.0 ~ 2.7 cm である。特に多いのは、長さ 1.3 ~ 3.0 cm、幅は 1.0 ~ 1.8 cm で、全体の約 2/3 をしめる。

第19表は、重さを示す為のもので、長さを考慮した相関表にした。重さでは、G (III類=凸基式), H (IV類=大形) がやはり重く、3 g 前後と 5 g 前後の二つにまとまりを見る事ができる。全体



第32図 石鎌実測図

の傾向として、0～2 g の範囲に含まれ、1 g 前後に集中する。1 g 未満のものは約47%である。

第18表、第19表を参考に考えると、弥生中期後半～末の時期には、1 g 前後の石鎚が主体をしめる。凸基式のものは、3 g 余りの重さを持ち、重いといえる。石鎚の形態は、平・凹基式のものに凸基式のものが加わる。その加わる時期は、弥生時代中期に求められる。1 g 前後と3 g 前後のものとで、どういう性格の違いがあるのかわからぬが、次のように想定できる。

①鎌の重さの変化は、弓の変化を伴うとし、弓矢自体に画期的な変化がもたらされた。

②対象物によって鎌を使いわけた。弓に変化はない。

③対象物の変化が主たる要因となり、①同様の結果がもたらされた。

以上三点である。

佐原真氏は、「石鎌の重さは矢の重量の一部にすぎない。1 cm長く1 g重いことは弓の長短と直結しない」と述べられており、これを前提とすれば、②となる。

とすれば、弥生時代中期後半の、平基・凹基式と凸基式の共存の事実及び率が問題となる。凸基式の出現を、狩猟とは違って弥生時代中期後半に戦争があった為とするにはまだまだ問題がある。平・凹基：凸基の割合は、凸基が全体の3割前後であり、1 g 前後の石鎌がなおも多いことを考えるに、たとえ戦争を考えたとしても、中期後半段階ではそれが主因としては考えられない。

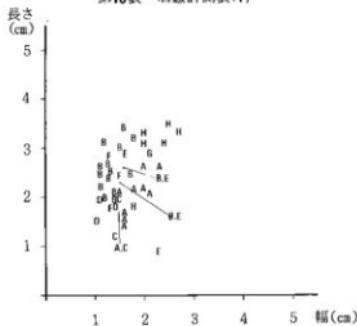
今後資料の増加を待って検討したい。

次に、各類の帰属年代について考える。

与島西方遺跡A地区（以後与島Aと略す）では、次節で述べているように、弥生時代中期後半～末に比定される土器が出土している。この時期に伴う石鎌を限定する意味で、ほぼ同時期と考えられる、三豊郡詫間町紫雲出遺跡と、坂出市長者原遺跡・岡山県児島城遺跡をとりあげてみたい。

紫雲出遺跡では、90点が図示されている。これを与島Aの分類案（以下分類案と略す）で操作すると、I-A-1類が10点（11%）、I-A-2類が0点、I-B-1類が13点（14%）、I-B-2類が28点（31%）、I-B-3類が0点、II-A類が2点（2%）、II-B類が4点（4%）。

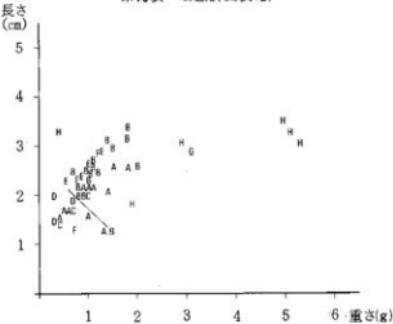
第18表 石鎌計測表(1)



凡例

A: I-A-1, I-A-2	E: II-C
B: { I-B-1, I-B-2	F: II-D
C: II-A	G: III
D: II-B	H: IV

第19表 石鎌計測表(2)



II-C類が0点、II-D類が4点(4%)、III類が20点(22%)、IV類が9点(10%)となる。紫雲出遺跡出土の土器は、紫雲出I式・II式・III式に分類されている。

児島城遺跡による、弥生時代中期を六段階に分ける案に立てば、それぞれ、中期2・3・5の段階となる。この案では、与島A出土土器は、中期5・6に該当し、共通の時間帯を持つことになる。土器の各型式にどの形式の石鐵が伴うかは判別できないが、両遺跡に共通する形式は、弥生時代のものとして認定できよう。時期差は、出土率(%)の違いに反影されると理解している。

次に、長者原遺跡を例に考える。完形の30点を分類すると、I-A-1類が1点(3%)、I-A-2類が0点、I-B-1類が3点(10%)、I-B-2類が4点(13%)、I-B-3類が0点、II-A類が1点(3%)、II-B類が7点(23%)、II-C類が0点、II-D類が1点(3%)、III類が10点(33%)、IV類が3点(10%)となる。

長者原遺跡では、30点中、凸基式が10点をしめる。凸基式として一括しているが、次のように4類に分けることができる。

① 鐵身は柳葉形で、くびれることなく茎部へ移行するもの。調整は縁辺に限られ、粗雑な感じを与える。

② 鐵身は卵形で、すこしきびれて茎部を造り出すもの。調整は縁辺に限られる。①同様、粗雑な感じを与える。

③ 鐵身は卵形だが、②よりも大きく、少し茎部を造り出すもの。調整は縁辺に限られ、中央に平坦な面を有する。

④ 鐵身は柳葉形で、茎部を特に造り出さない。調整は縁辺に限られ、中央に平坦な面を有する。

長者原遺跡での比率は、10点中①類が1点(10%)、②類が5点(50%)、③類が2点(20%)、④類が2点(20%)であった。紫雲出遺跡では、20点中、①類が1点(5%)、②類が8点(40%)、③類が0点、④類が11点(55%)であった。与島A出土の1点は、この分類では②類に該当する。

又、長者原遺跡では、11点の破片が出土している。これを見ると、先端部が6点、先端部・基部が欠損しているものが5点である。先端部のうち、4点が斜基状を呈している。大形鐵のうち1点が、斜基式と呼べる形式であり、基部にも少し調整を加えている。基部は、本来、根ばさみて固定される部分であるから、未調整であっても差しつかえない。とすれば、斜基式として一形式を設定することも可能である。

基部の破片が出土しておらず、破片は製品の破片であるから、折れたのは、使用後と考えられる

次に児島城遺跡の例を見てみる。I-A-1類は0点、I-A-2類も0点、I-B-1類が8点(27%)、I-B-2類が2点(6%)、I-B-3類が0点、II-A類が2点(6%)、II-B類が9点(30%)、II-C類が0点、II-D類が1点(3%)、III類が8点(27%)、IV類が0点である。

城遺跡で、石槍として取り上げられているものが、与島AのIV類としたもののうち、二等辺三角形を呈す調整の丁寧なもの(第32図-11)に類似するので、与島Aのものも、石槍として考えられるかもしれない。

以上四遺跡は、すべて弥生中期に属するものの、時間的な幅はまちまちである。これを相対関係で示したもののが第20表である。これとは別に、分類案別出土率を示したものが第21表である。

第20表 土器形式相対編年表

	從來の型式	与島西方 A 地区	素 雲 出	長 者 原	城
中期 1	高 田				
中期 2	南 方 II		I (?)		
中期 3	菰 池 (古)		II		I
中期 4	菰 池 (新)				
中期 5	前 山 II	○	III	○	II
中期 6	仁 伍	○			III

第21表 石器形式別出土率表

形式名 \ 遺跡名	与島西方 A 地区	素 雲 出	長 者 原	城
I - A - 1	○ 21 %	○ 11 %	○ 3 %	
A - 2	○ 2 %			
B - 1	○ 15 %	○ 14 %	○ 10 %	○ 27 %
B - 2	○ 11 %	○ 31 %	○ 13 %	○ 6 %
B - 3	○ 6 %			
II - A	○ 6 %	○ 2 %	○ 3 %	○ 6 %
B	○ 9 %	○ 4 %	○ 23 %	○ 30 %
C	○ 11 %			
D	○ 4 %	○ 4 %	○ 1 %	○ 3 %
III	○ 2 %	○ 22 %	○ 33 %	○ 27 %
N	○ 13 %	○ 10 %	○ 10 %	△ 石 榆

この結果をまとめると、

① I-A-1類・I-B-1類・I-B-2類・II-A類・II-B類・II-D類・III類・IV類は、弥生時代中期に属するものと考えられる。

② I-A-2類・I-B-3類・II-C類は、弥生時代中期に属さないと考えられる。

③ 率の違いは、中期の中での時間差、地域差にもとめられる。

④ 凸基式のものは、与島Aでは1点のみの出土であり、今回取り上げなかったものを見てもその例を知らない。他の遺跡の場合を考えると、異常に少ないと気付く。これに関する解答はないが、今後注意すべき問題である。

次に、鎌木義昌氏が井島遺跡で提示された資料について考える。

鎌木氏は、その特徴から6形態に分類されている。

① 比較的長い両耳が内曲し、尖端部はかなり鋭利となっている。石器の面には非常に細かなretouchが整然と加えられ、石質もチャートと考えられるものが多い。瀬戸内の縄文遺跡、弥生遺跡に殆んど見られない形。

② 脊の部分がやや狭くなり両耳の部分が急激に外反する特異な形態をもっている。他の石器に比して磨滅が極めて著しく、retouchの殆んど見えないものさえある。瀬戸内の縄文、弥生両遺跡にほとんど見られない。

③ 背の低い両耳の内曲した石器で脊部の張りは強い。瀬戸内の縄文、弥生両遺跡ではやはり殆

んど見られない。

- ④ 特に変ったものではない。
- ⑤ 特に変ったものではない。
- ⑥ 両耳の尖った点に特徴があるが、瀬戸内の他の遺跡にも類似のものが若干ある。

以上の6分類を、与島Aの分類案におきかえると次のようになる。

- ①-〈I-B-2類〉 20% (井島遺跡での出土率)
- ②-〈II-C類〉 40% (井島遺跡での出土率)
- ③-〈I-B-2類〉 17% (井島遺跡での出土率)
- ④-〈I-B-3類〉 3% (井島遺跡での出土率)
- ⑤-〈I-B-3類〉 3% (井島遺跡での出土率)
- ⑥-〈I-A-2類〉 17% (井島遺跡での出土率)

第21表の結果から見れば、①と③は弥生時代中期のものとすることができる。ただ、①～⑥まで、抉りが深い点が異なるので、この点は、まだ問題として残る。

次に、I-A-2類、I-B-3類、II-C類の帰属について見てみたい。

弥生時代前期においては、前期後半の丸亀市中ノ池遺跡の場合、^(註7) 総計36点の石鏡が出土している。内訳は、凹基式27点、平基式9点である。比率では、27:9=75%:25%になる。いくつかの類型に分けられるが、分類案で考えると、I-A-1類が6点(17%)、I-A-2類が0点、I-B-1類が4点(11%)、I-B-2類が9点(25%)、I-B-3類が0点、II-A類が0点、II-B類が7点(19%)、II-C類が0点、II-D類が2点(6%)、となる。残り8点(22%)は、II-C類(ロケット形)の凹基のものである。しかし、全体的に調整が大きく、荒い。分類案に含めにくい形態も若干あるので、より明確な細分案が今後の課題であろう。

この結果を再度まとめてみると、

- ① II-A類 弥生時代中期の所産か?
- ② III類 弥生時代中期のある時点より出現
- ③ IV類 不明
- ④ 凹基ロケット形は、II-C類の前段階と考えられる。
- ⑤ I-A-2類とI-B-3類は縄文時代に属する。

となる。

④の凹基ロケット形からII-C類の平基ロケット形が生まれるとするには、直接的な根拠はない。ただ、凹基・平基が縄文時代に共存するものの、凹基の方が高い比率を示す事実があり、弥生時代前期の中ノ池遺跡の場合も同様であるので、中期の所産として大過ない。

次に縄文時代の例であるが、山口県平生町岩田遺跡は、^(註8) 縄文時代後期・晚期の遺跡である。ここで出土している石鏡中に、I-A-2類とI-B-3類と思われるものが出土している。

大阪府東大阪市龍手遺跡は、^(註9) 縄文時代後期を主体とする遺跡である。ここでは、I-B-3類が出土している。

奈良県竹内遺跡は、^(註10) 縄文時代晚期の遺跡である。I-B-3類が出土している。

以上3例であるが、I-A-2類・I-B-3類について考えた。このふたつの形式が、縄文時代に通有なものか、時期的に限定できるものはわからぬ。

与島A地区出土石鏡の帰属年代は、以上のように考えられる。しかし、縄文時代の石鏡と考えたI-A-2類・I-B-3類は、これに伴う縄文式土器が出土しておらず、まだまだ検討の余地を残し

ている。

石鉄の帰属問題に紙数を費やしたが、少なくとも弥生時代中期後半～末の石鉄の形態は明らかに(註11)できた。今後の調査で問題となるのは、弥生時代中期後半～末の石器組成と弥生遺跡としての与島西方遺跡の位置付け、縄文時代の石鉄のあり方であろう。

(真鍋)

第22表 石 鉄 一 覧 表

番号	型	計測 値				残存度	出土 画 面	実測図 番号	写 真 番 号	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
1	I-B-2	2.0	1.2	0.4	0.9	▲	b--1		47-1	
2	II-B	1.5	1.0	0.2	0.3	▲	"		47-2	
3	I-B-1	2.3	1.5	0.4	1.0	▲	"		47-3	
4	I-A-1	1.6	1.6	0.5	1.0	▲	"		47-4	
5	I-B-1	2.0	1.4	0.4	0.8	▲	"		47-5	
6	I-B-2	2.6	1.1	0.5	1.1	▲	c-1		47-6	
7	I-A-1	1.7	1.5	0.3	0.6	▲	"		47-7	
8	II-B	1.9	1.4	0.4	0.7	▲	"		47-8	
9	II-A	1.4	1.2	0.3	0.4	▲	"	32-6	47-9	
10	I-B-1	2.4	1.3	0.5	1.0	▲	d-1		47-10	
11	I-B-2	2.2	1.1	0.5	0.8	▲	"		47-11	
12	I-B-2	2.5	1.3	0.5	1.2	▲	"		47-12	
13	II-A	2.0	1.5	0.4	1.0	▲	"		47-13	
14	I-B-1	3.0	1.5	0.4	1.5	▲	"		47-14	
15	N	3.3	2.0	0.5	0.4	▲	e-1		47-15	
16	II-C	2.3	0.9	0.2	0.6	▲	"	32-8	47-16	
17	N	3.3	2.7	0.5	5.1	▲	"		47-17	
18	II-B	2.0	1.1	0.3	0.3	▲	f-1		48-1	
19	II-A	1.7	1.5	0.2	0.7	▲	"		48-2	

番号	型	計測値				残存度	出土画	実測図番号	写真番号	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ					
20	II-C	2.4	1.5	0.3	0.9	▲	g-1		48-3	
21	I-A-1	1.7	1.6	0.2	0.5	▲	h-1		48-4	
22	N	3.1	2.4	0.7	5.3	▲	l-1		48-5	
23	I-B-3	3.4	1.6	0.5	1.8	▲	c-0	32-5	48-6	
24	III	2.9	2.1	0.5	3.1	▲	c-2	32-10	48-7	
25	I-B-2	3.1	1.2	0.5	1.4	▲	"	32-4	48-8	
26	II-D	2.8	1.3	0.4	1.2	▲	c-3	32-9	48-9	
27	II-D	1.3	1.8	0.3	0.7	▲	"		48-10	
28	II-C	2.6	1.6	0.3	1.0	▲	c-4		48-11	
29	II-C	2.9	1.6	0.4	1.3	▲	"		48-12	
30	I-A-1	2.6	2.3	0.4	1.8	▲	"		48-13	
31	I-B-3	3.2	1.8	0.4	1.8	▲	c-5		48-14	
32	II-B	2.5	1.1	0.3	0.7	▲	c-6	32-7	48-15	
33	N	3.1	2.0	0.5	2.9	▲	"		49-1	
34	I-B-1	2.6	1.6	0.6	2.0	▲	"	32-3	49-2	
35	N	3.5	2.5	0.7	4.9	▲	"		49-3	
36	I-A-1	2.1	2.1	0.5	1.4	▲	"		49-4	
37	N	1.8	1.8	0.5	1.9	▲	c-7	32-11	49-5	
38	I-B-3	2.5	1.7	0.4	1.0	▲	"		49-6	
39	I-A-1	2.6	2.0	0.4	1.5	▲	"		49-7	
40	I-B-1	2.7	1.5	0.4	1.1	▲	h-2		49-8	
41	I-A-1	2.2	1.8	0.3	0.9	▲	"	32-1	49-9	
42	I-A-1	2.2	2.0	0.3	1.1	▲	"		49-10	
43	I-A-1	2.2	1.8	0.3	1.0	▲	h-3		49-11	

番号	型	計測値				残存度	出土画	実測図番号	写真番号	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ					
44	II-C	23	1.5	0.3	0.8	▲	h-3		49-12	
45	I-A-1	21	1.5	0.3	0.6	▲	h-4		49-13	
46	I-B-1	21	1.4	0.3	0.6	▲	h-5		49-14	
47	I-A-2	15	1.6	0.3	0.4	▲	h-6	32-2	49-15	

註 残存度で、白メキは欠損部分。

- 注1 佐原 真「かって戦争があった」『古代学研究』第78号 1975年 古代学研究会 大阪
- 注2 小林行雄・佐原 真『紫雲出』 1964年 芩間町文化財保護委員会
- 注3 『香川県埋蔵文化財調査年報』 昭和53年度 香川県教育委員会
- 注4 伊藤 晃・山磨康平ほか「倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（19）』 1977年 岡山県教育委員会・岡山県文化財保護協会
- 注5 注4に同じ
- 注6 鎌木義昌「香川県井島遺跡－瀬戸内における細石器文化－」『石器時代』第4号 1957年 石器時代文化研究会 東京
- 注7 昭和51年度、県教育委員会・丸亀市教育委員会調査、調査担当者廣瀬常雄氏より教示を得た『丸亀市金倉町中ノ池遺跡確認調査』（調査現地説明会資料） 1976年 香川県教育委員会・丸亀市教育委員会
- 注8 潮見 浩ほか『岩田遺跡』 1974年 平生町教育委員会
- 注9 藤井直正ほか『楳手遺跡2』 1976年 東大阪市遺跡保護調査会
- 注10 久野邦雄・寺沢 薫「竹内遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1976年度』 1977年 奈良県立橿原考古学研究所
- 注11 与島A地区で、縄文時代・弥生時代のどちらに属するか不明の石匙が出土している。

第3節 弥生式土器

弥生式土器は、調査区全域より出土し、弥生時代の遺構は検出できなかった。層位もほぼ全層にわたって包含されていた。ここでは、土器の説明と、年代について考えたい。

各々の土器の観察は第23表にまとめた。又、観察した土器は写真図版及び実測図を作成したものに限った。

土器型式は、岡山県の編年によると、いわゆる「前山Ⅱ式」・「仁伍式」、および、最近報告された児島城遺跡の城Ⅰ式、Ⅲ式に該当する。又、年代は中期後半及び中期末に比定されている。この二つの型式を第23表の通し番号で分けたものが第24表である。

第23表 土器観察表

番号	器種	図版 番号	推定 番号	出土 区画	法量	形態の特徴	成形・調整手法の 特徴	色調	備考
1	タコ壺	43-1	34-1	Abl-381					第4節 参照
2	壺(?)	43-2			Abl-867	水平な受部から内傾して上方に拡張し口縁部を形成して、回線文を施す。		明淡赤褐色	
3	土師小皿	43-3			Ael-2090	ゆるやかに彎曲する底部を持つ。		淡黄色	中世か?
4	壺(?)	43-4	33-7	Agl-811		口縁端部を上下に拡張し凹線文を施している。	三条の凹線文 内・外面ともナデ	赤褐色	
5	土師小皿	43-5			Ac0-1237	ゆるやかに内彎しつつ立ちあがり、口縁端部を丸く仕上げている。	内・外面ともナデ	明淡赤褐色	中世か?
6	壺(?)	43-6	33-6	Ac4-265	口 径 11.2 cm	水平な受部から内傾して上方に拡張し、口縁部を形成して凹線文を施す。	二条の凹線文 内・外面ともナデ	赤褐色	反復転元
7	壺	43-7	33-4	Ac4-582	口 径 19.0 cm	頸部より外開きに広がり上方に拡張して口縁部を形成する。	外面に円形浮文、 内面に側突文・円形浮文を有する。 円形浮文は等間隔で全周するかどうかは判断できない。 外面には回線文らしきものがある。 内・外面ともナデ	淡白色	反復転元
8	壺	43-8			Ac4-675	外開きに広がり、 下方に拡張する口縁部を形成し凹線文を有する。	三条の凹線文、文様帶に丹彩か? 内・外面ともナデ	淡白色	
9		44-1			Ac5-691	ゆるやかに内彎していたものが、垂直に立ち上って口縁部を形成する。口縁端部は丸く終わる。			
10	壺	44-2			Ac5-693	頸部に板目状工具による刻目文をめぐらす。	刻目文は二段 外面は刷毛目の後ナデ 内面はナデ	淡褐色	赤色
11	壺	44-3			Ac5-823	「く」の字状に外反する口縁の端部を上下に拡張し凹線文を施す。		暗黒灰色	
12		44-4			Ac5-832	口縁部破片	口縁端部はナデにより若干凹面になる。 内・外面ともナデ	淡白色	
13	壺	44-5			Ac5-860	口縁端部を上下に拡張し凹線文を施す。	三条の凹線文 内・外面ともナデ	淡褐色	赤色
14	壺	44-6			Ac5-872	口頭部がほぼ直立するタイプである。	内・外面ともナデ	淡褐色	赤色

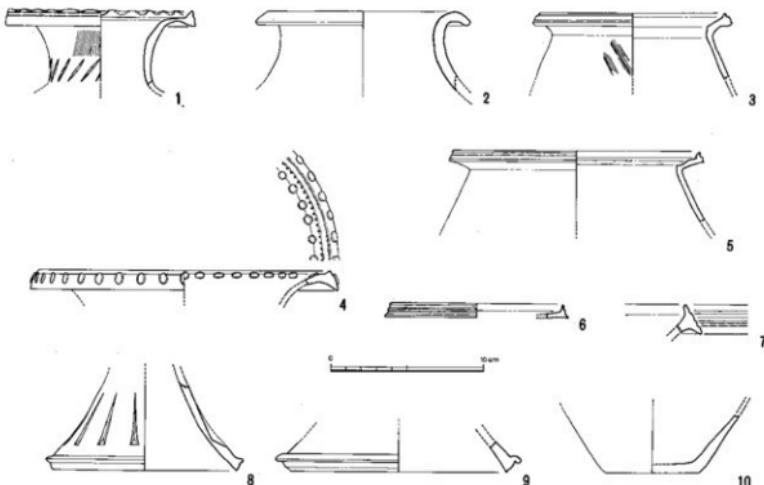
番号	器種	図番	版号	揮番	図号	出区	土画	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
15	壺	44-7			33-2	Ac5-937		口 径 12.2 cm	口縁部を折り曲げるタイプである。	内・外面ともナデ	淡白 乳色	反転復元 17と同一個体
16	壺	45-1				Ac5-1331			頸部片	外面は細かい、ヘラ磨きの後、貼付凸帯をめぐらす。貼付凸帯は、板目状工具による刻目文を施す。 内面はナデ	淡白 乳色	
17	壺	45-2			33-2	Ac5-1358						反転復元 15と同一個体
18	甕	45-3				Ac5-1396			「く」の字形に外反した口縁部の端部がわずかに上方に拡張し凹線文を施す。	二条の凹線文 外面はヘラ磨き 内面はナデ	淡褐 赤色	
19	高杯	45-4			33-9	Ac5-1405	底 径 14.0 cm		「ハ」の字形をした高杯の脚部である。外面には円孔?をもつ。	内外面とも不明	明淡赤褐色	反転復元
20	壺	45-5				Ac6-494			頸部片	外面はハケ目の後貼付凸帯をめぐらす。貼付凸帯は、板目状工具による刻目文を施す。 内面不明	淡白 乳色	
21		45-6				Ac9-83			口縁部片。頸部よりゆるやかに外反し、口縁端部が上方にわずかに拡張する。	内外面とも不明	淡白 乳色	
22	甕				33-3	Ac3-1157	口 径 12 cm		「く」の字形に外反した口縁部の端部が、わずかに上下に拡張し、凹線文を施す。	二条の凹線文 口縁部は肥厚している。 外面は刷毛目・内面はナデ	淡褐 茶色	反転復元
23	壺				33-1	Ac4-736	口 径 12 cm		頸部より外反した口縁端部が、上下に拡張し、凹線文を施す。	一条の凹線文 口唇部には指頭圧痕 頸部には板目状工具による刻目文 外面は刷毛目・内面は不明	淡褐 赤色	反転復元
24					33-10	Ahl-1604			底部片である。	内外面とも不明	明褐色	反転復元
25	高杯				33-8	Ah4-197	底 径 12 cm		「ハ」の字形をした高杯の脚部である。外面には三角形の透しを持つが、内面に貫通していない。	内外面とも不明	淡黄 乳色	反転復元
26	甕				33-5	Ah4-201	口 径 16 cm		「く」の字形に外反した口縁部の端部がわずかに上方に拡張し、凹線文を施す。	一条の凹線文 内外面とも不明	淡褐 赤色	反転復元

第24表 出土土器型式別一覧表

型 式	番 号
城Ⅲ式 (前山Ⅱ式)	10. 15(2) 16. 23(1)
城Ⅱ式 城Ⅲ式	11. 13. 18. 22(3)
城Ⅲ式 (仁伍式)	4(7) 6(6) 7(4) 14. 19(9) 25(8) 26(5)
不 明	2. 8. 9. 12. 20. 21. 24(10)

()内は実測図番号

(注2)
昭和54年度に香川県内において調査された坂出市長者原遺跡出土土器は、城Ⅱ式に該当し、讃岐の地方色を持つ土器は、与島西方A地区同様明確にできなかった。この二つの遺跡の状況は、中期後半段階においては、備讃瀬戸が一つの地域を形成していて、「吉備」・「讃岐」とは違ったまとまりを呈していたと理解できる。又、ここでいう「備讃瀬戸」の明確な範囲は規定できないが、およそ、讃岐中央部（中讃）現在の坂出市を中心とする地域及び島嶼部・岡山県児島周辺を含めて



第33図 弥生式土器実測図

の地域を考えている。

又、与島西方遺跡A地区で、中期後半～末の土器が出土したことは、興味深い。弥生時代の遺構は検出できなかったものの、調査区全域より出土している土器片の総量を考えると、旧石器時代だけでなく弥生時代の遺跡としても認定できる。

瀬戸内海沿岸部に、中期後半の時期から急激に、いわゆる「高地性集落」が増加するという指摘もあり、時期的にも、立地的（標高・比高共約70mで備讃瀬戸のほぼ中央部に位置する）に見ても、高地性集落の範疇と考えて差しつかえない。^(注3)

従来の高地性集落の定義自体、不明確な部分が多いが、住居址を伴わない場合でも、高地性集落の一類型として提示できるだろう。先にあげた、坂出市長者原遺跡は、住居址を伴う高地性集落と考えている。

高地性集落における住居址を伴うか否かの歴史的意義は、今後発見されるであろう低地性・高地性集落の資料を検討したうえで考えたい。

（真鍋）

注1 伊藤 晃・山磨康平ほか「児島城遺跡発掘調査報告」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（19）」1977年 岡山県教育委員会・岡山県文化財保護協会

注2 『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和53年度 香川県教育委員会

注3 小野忠熙「高地性集落について」『日本古代文化の探求・城』1977年 社会思想社

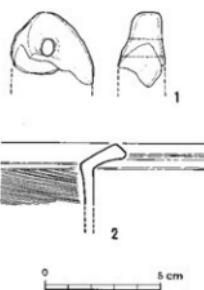
注4 注3と同じ

第4節 その他の遺物

第34図-1は、タコ壺の釣手部分の破片である。接合部で剥離しており、製作方法がわかる好例である。長さ3.1cm、幅3.6cm、厚さ2.1cmを計る。孔径は、0.7cmで一方から縫成前穿孔である。淡赤褐色を呈し、丁寧な仕上げがなされている。時期は、その形態から古墳時代以降と考えられる。（図版43-1）

第34図-2は、土師質土鍋の口縁部である。ほぼ垂直に立ち上がる胴部から、「く」の字形に外反する口縁部を持つ。胴部内面には刷毛目が施されており、その後、内外面ともナデで仕上げられている。外面にはススが付着している。時期は中世と考えられ、第23表の3・5と共に伴する可能性がある。

第35図は、「神功開宝」の破片で、「宝」の字を欠損している。径2.5cm、厚さ0.21cmを計る。「神功開宝」は、皇朝十二銭の三番目に鋳造されたもので、初鑄年は、奈良時代の天平神護元年（西暦765年）である。「神功開宝」と共伴する遺物は明確でなく、奈良時代以降に廃棄されたと考える。



第34図 時期不明遺物実測図

第36図は、不明石製品で、図示したのは三点である。
1は、長さ4.3cm、幅3.9cm、厚さ1.4cmを計る石材の、長辺の稜線上を利用している。各々U字状の溝に、明確な条痕を残している。

2は、長さ3.75cm、幅1.5cm、厚さ0.9cmを計る石材に、二本のU字溝が見られる。条痕は1同様である。

3は、長さ5.2cm、幅1.7cm、厚さ0.8cmを計る石材の一面に、一本のU字溝が見られる。条痕は1同様である。

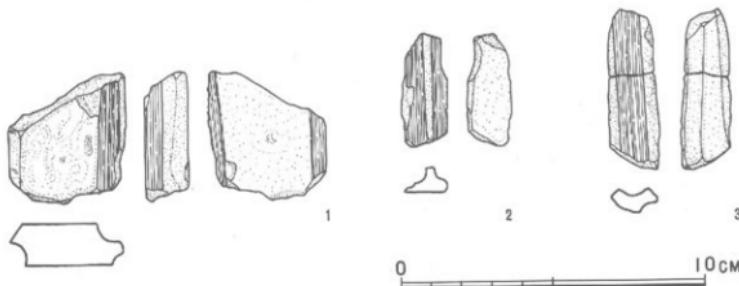
1・2・3とも、砂岩質である。明確な条痕が見られることから、矢柄研磨器と考えられるが、
断定することにちゅうちょする。明確な時期は不明である。類例は、岡山県の福島遺跡に見ること
ができる。

(真鍋)

注 間壁慶子「岡山県浅口郡船穂町福島採集の矢柄研磨器」『倉敷考古館研究集報』第9号 1974
年 倉敷考古館



第35図 神功開宝



第36図 不明石製品実測図

おわりに

坂出市与島西方A地区は、石槌神社付近を最高部とする尾根筋、及び斜面部からなり、地形上で一つのまとまりをみせる地区である。

A地区的特色として、出土した遺物量の多さをあげることができる。遺物の出土総点数は、約14万点に達し、包含層があるので一部セクションベルトを残したが、その点数を加えるとそれ以上になる。出土した遺物の大半が旧石器時代に属するものと考えられるものである。旧石器時代より後の時期のものとしては、縄文時代に属するものも一部含まれると考えられる石鏃、弥生式土器、須恵器、錢等がある。遺物の出土状況は、旧石器時代の遺物とその後の時期に属する遺物が、層位を別にすることなく、互いに混在して各層から出土したものである。そのためA地区においては、旧石器時代に属する遺物の共伴関係や前後関係等は、検出することができない。しかし遺物数の多さに比例して、各器種の個体数は多く、旧石器時代の諸様相を遺物の面から具体的にうらづける豊富な内容を有するものである。

旧石器時代の遺物の石材は、ほとんどがサヌカイト質である。数点ではあるが黒曜石、及び流紋岩質のナイフ形石器も出土している。昭和51、52年度に実施した予備調査の際に出土した遺物の中で、与島と櫛石島から出土したサヌカイト片を試料として、京都大学工学部で螢光X線法による元素組成実験が行なわれた。その結果提出した試料は、香川県坂出市金山を原産地とするものであることが判明した。提出した試料が少数であるために、全体を押し計ることはできないが、少なくとも与島及び櫛石島のサヌカイトの一部は金山を原産地とするものであることが判明した。与島、櫛石島は金山から距離的にあまり離れていない。石材を金山から運び、現在は島となっている両島において石器を製作したものであろう。また出土した黒曜石質ナイフ形石器は縦長剣片を利用したもので、横長剣片を利用するものがほとんどであるナイフ形石器の中で異質の技法を用いたものである。また石材の黒曜石は、備讃瀬戸地域において産する石材ではない。これは黒曜石原産地である地域から搬入されたものかもしれない。瀬戸内ののみならず、九州、東北地方まで瀬戸内技法による石核や翼状剣片等が出土していることから、ある程度は交流が行われていたことを示す資料となる可能性がある。また、A地区的出土した遺物の時期は、ナイフ形石器が存在する時期を中心としたものであろう。細石核らしき小形の縦長剣片石核は存在するが、櫛石島、羽佐島等で出土したものは定型化したものではなく時期的に位置付けることは現段階では難しい。

遺構としては旧石器時代に属する3基のビット状の遺構が検出された。しかしその性格は明確なものではない。

また後続する時期の遺物はかなりの数が出土しているが、いずれも遺構に伴わずに出土したものである。

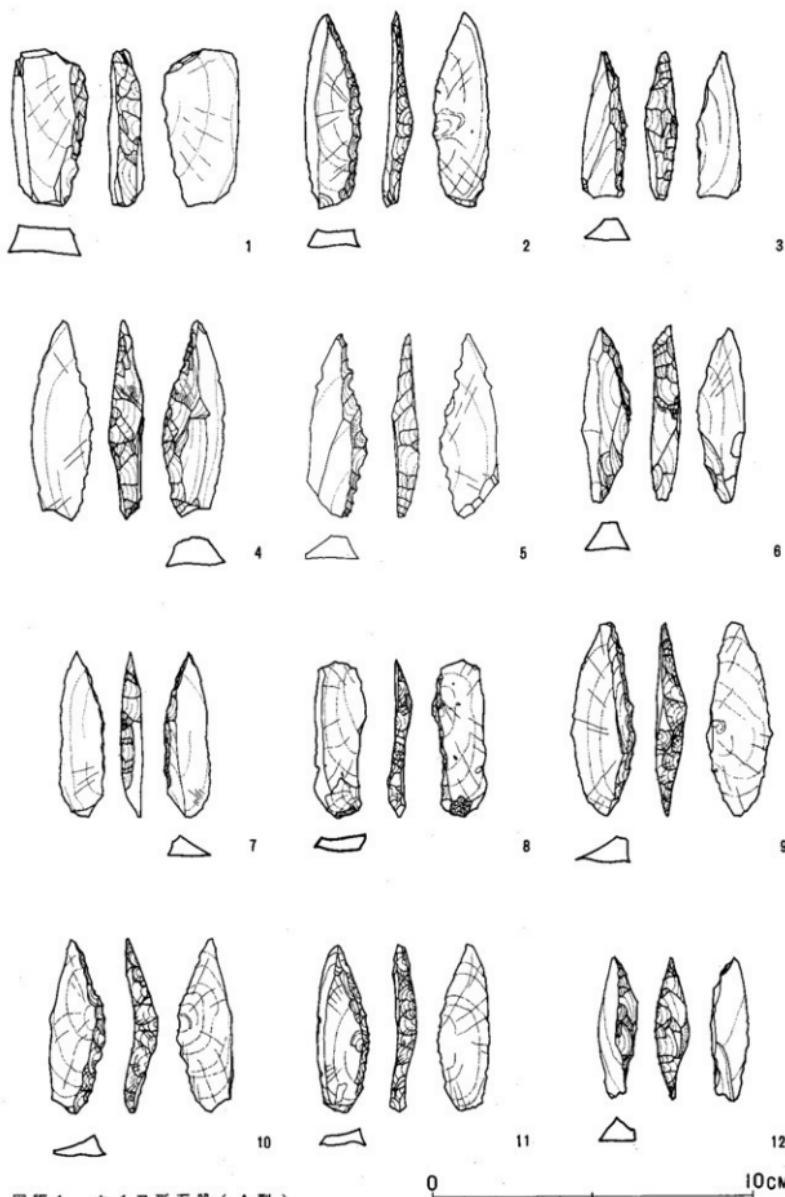
A地区は与島西方の北部尾根筋上を中心とし、一部斜面を含む地区からなっている。この地区は、水的資源に恵まれず、また冬季になると北西の季節風にまともにさらされているなど、日常的な生活を営む上ではかなり不適当な条件を有する地区である。遺跡が存続した時期の旧石器時代は、海水面が現在よりもかなり低下し、現在は海面下になっている地域がかなり陸化していた時期である。遺跡の性格を考える上で、當時陸化していた地域を無視することはできない。A地区では、碎片や剣片が多量に検出されていることや、叩き石、石核等がかなり存在することから、この地区で石器

を製作していたことはまちがいない。遺跡が立地するということは、立地する地域に何らかの利点もしくは必然性があると考えられる。A地区のみならず、島嶼部において旧石器時代の遺跡の立地は島の頂部附近に位置する傾向がみとめられる。前記したように現在ほど陸地部が限定されていない当時、水的資源にも気候の面においても決して恵まれているとはいえず、むしろ悪条件を備えていたこの地区に遺跡が立地する事実は、悪条件をも許容する必然的な他の要因の存在が推定される。理想的には海面下の旧石器時代の詳細な状況が解明されないかぎり、島嶼部における遺跡の性格は解明しにくいであろう。備讃瀬戸地域以外の現在広域にわたって陸地化している地域で、丘陵の頂上部に旧石器時代の遺跡の存在がみられるかどうか、調査が進むことを待ちたい。

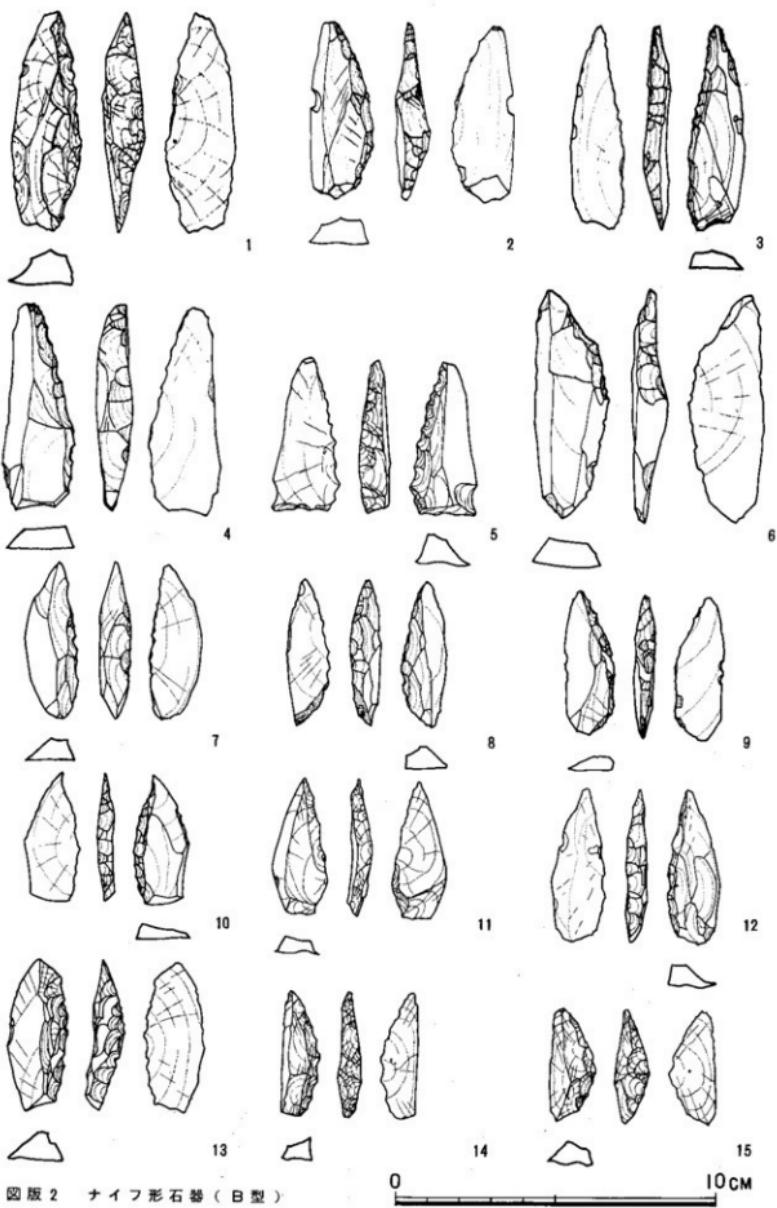
今回報告した区画は、A地区の中でも一部の区画のものである。今回報告し得なかった区画等について改めて報告したい。

(藤好)

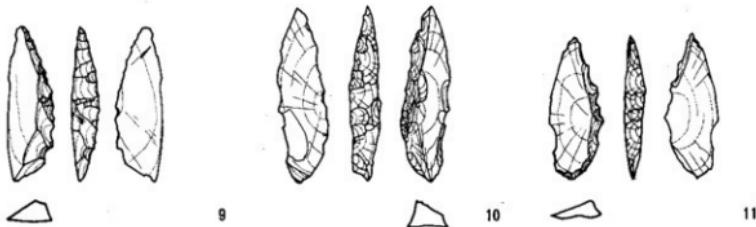
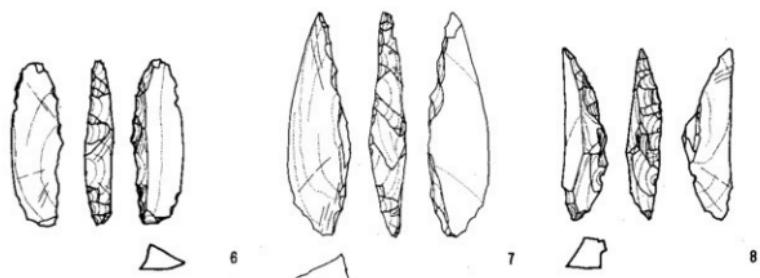
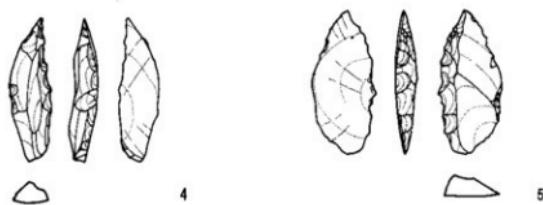
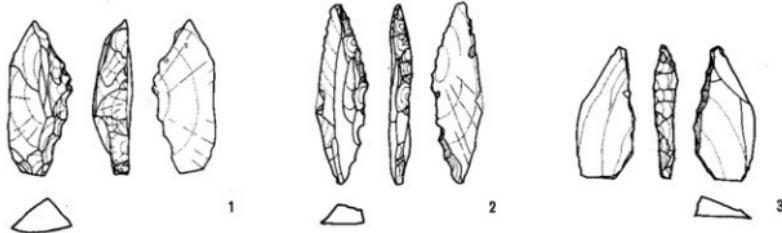
図版



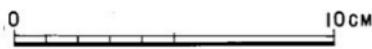
図版 1 ナイフ形石器 (A型)

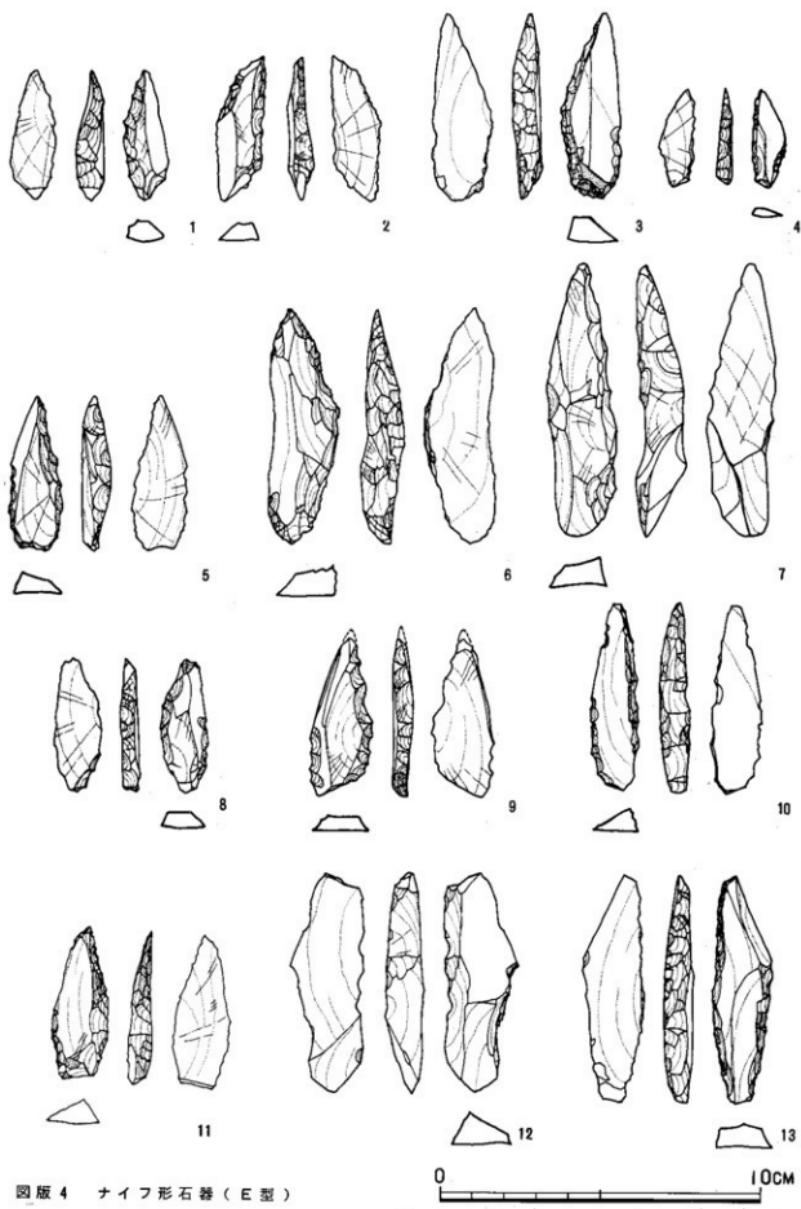


図版 2 ナイフ形石器(白型)

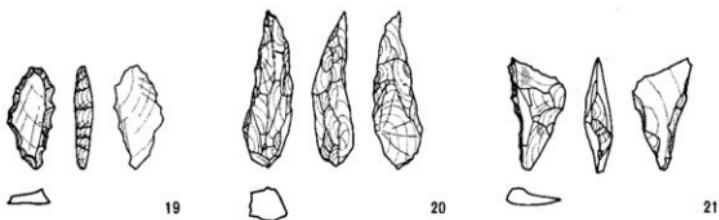
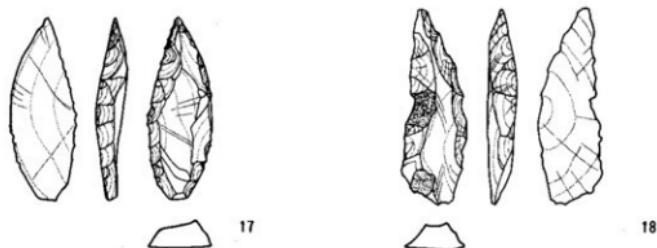


図版 3 ナイフ形石器 (C型・D型)



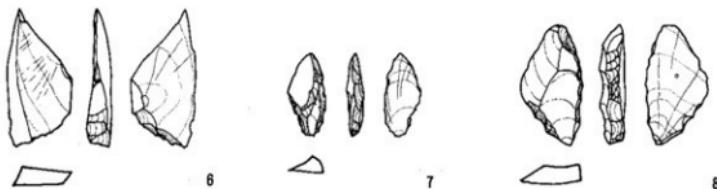
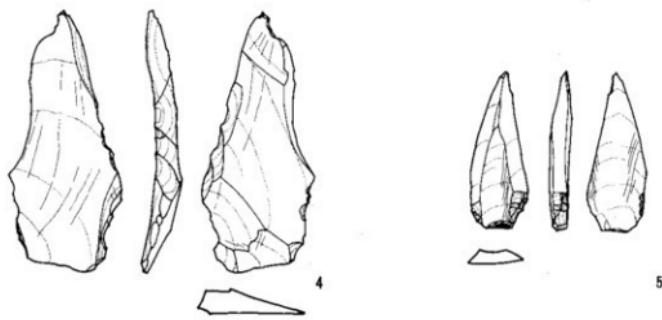
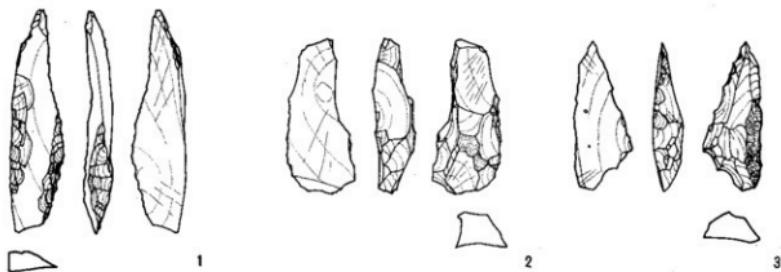


図版 4 ナイフ形石器 (E型)



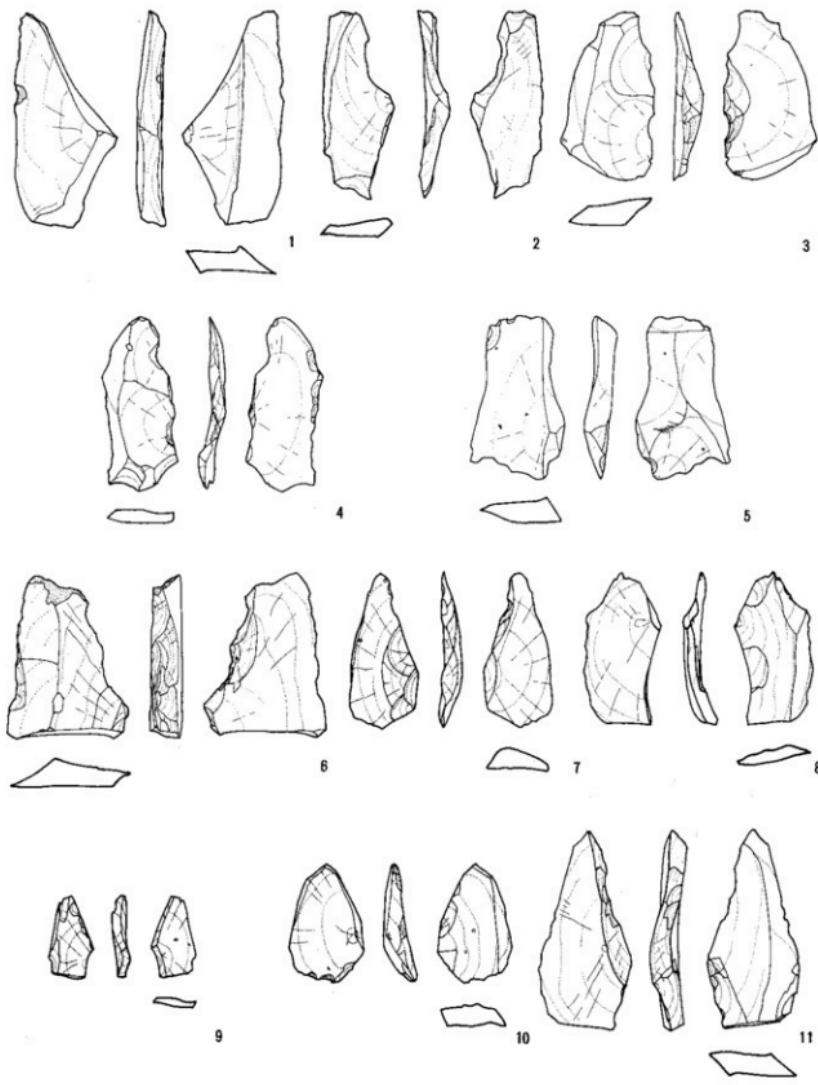
図版 5 ナイフ形石器 (E型)

0 10CM



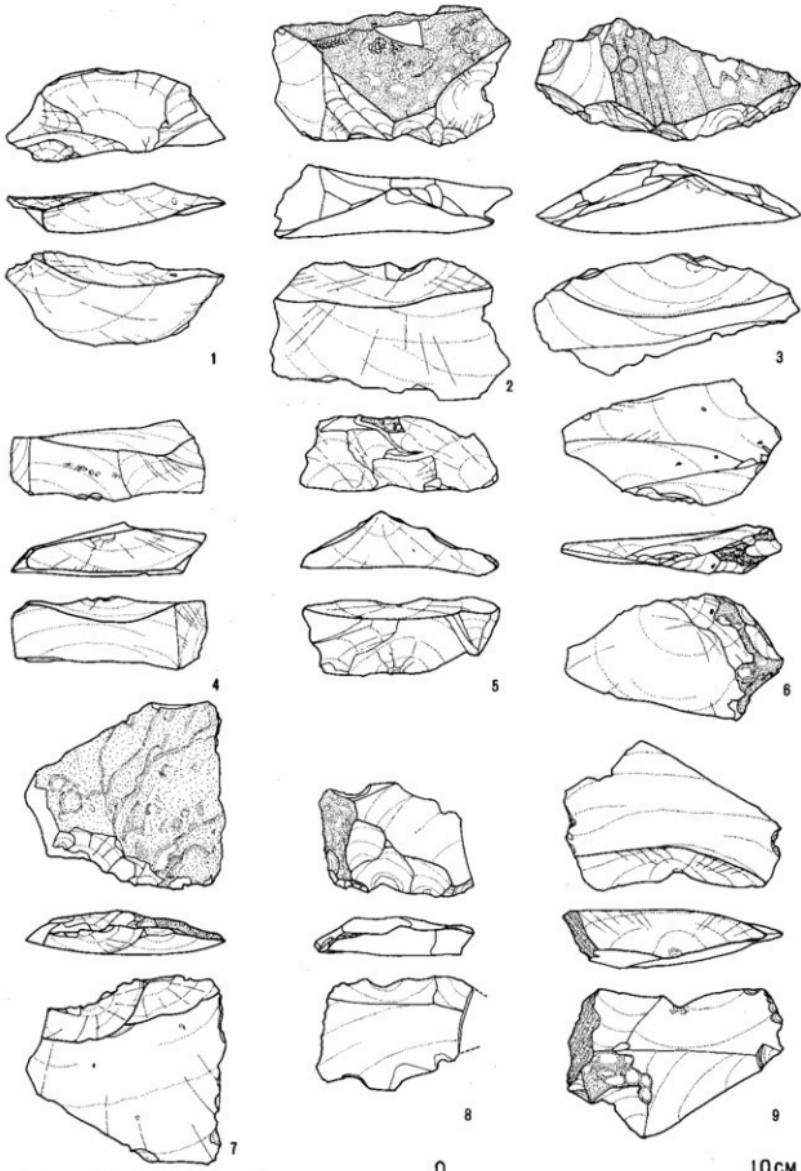
0 10CM

図版 6 ナイフ形石器 (F型・異石材質)



図版 7 翼状制片

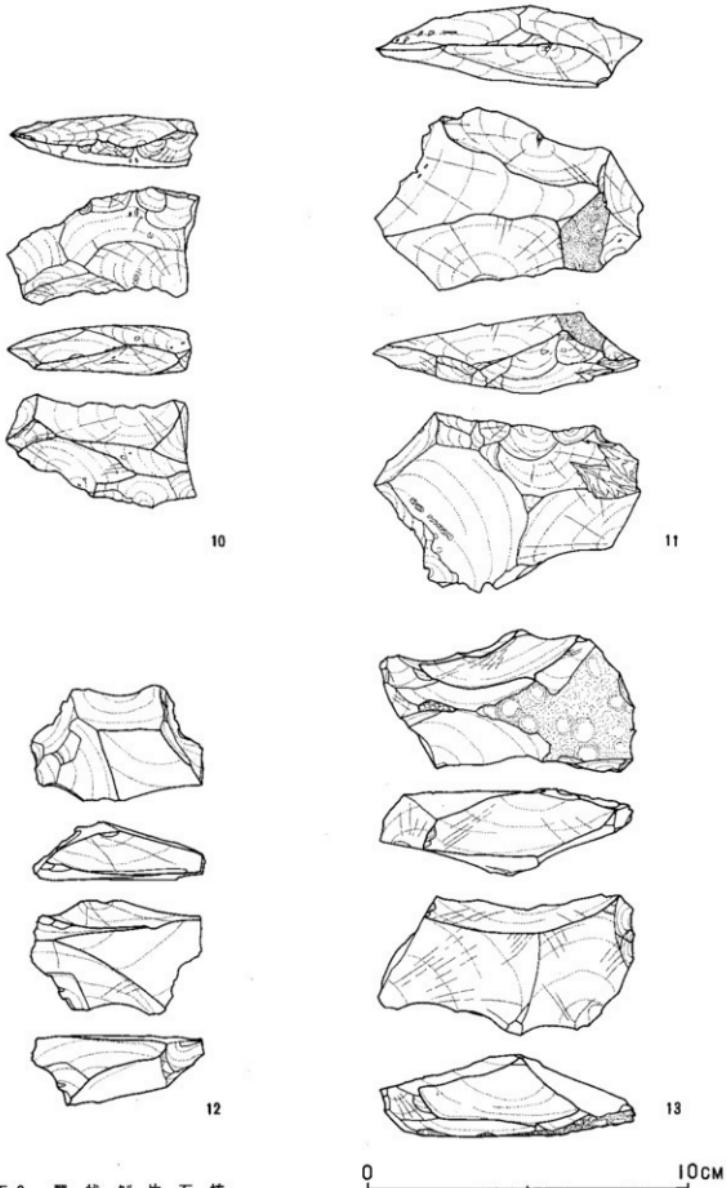
0 10 CM



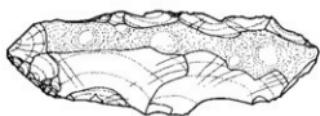
図版 8 翼状剥片石核

0

10CM

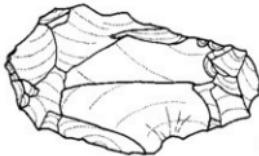
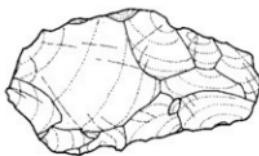


图版 9 翼状制片石核

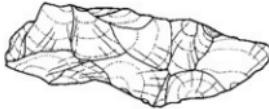


1

2



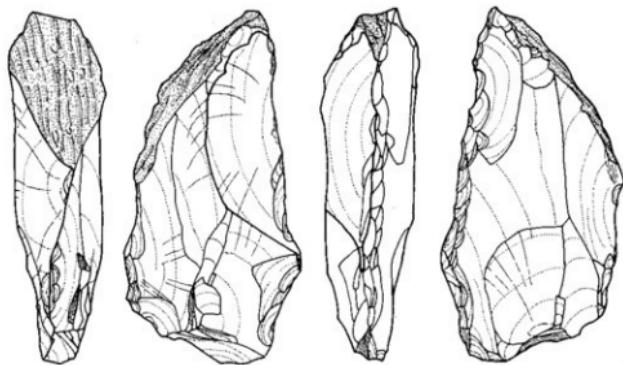
3



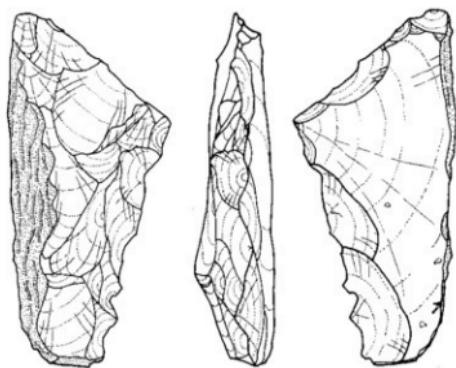
4



図版 10 横長剥片石核



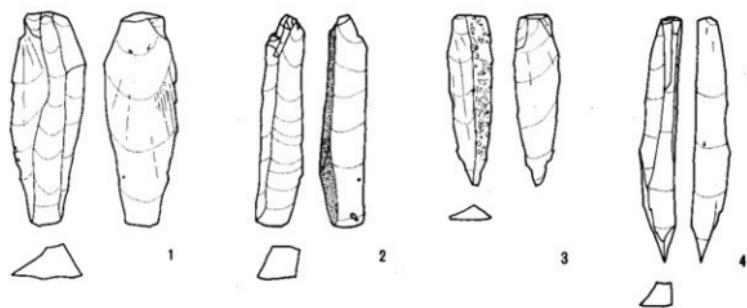
5



6

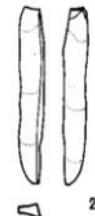
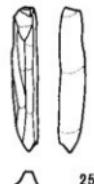
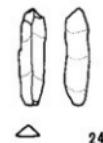
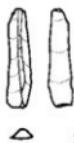
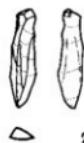
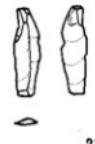
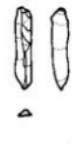
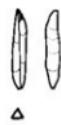
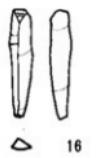
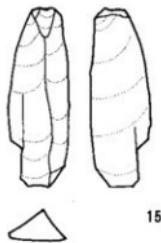
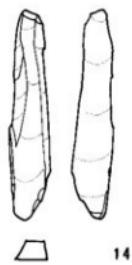
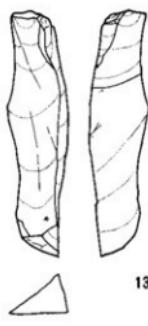
0 10CM.

図版 11 横長制片石核



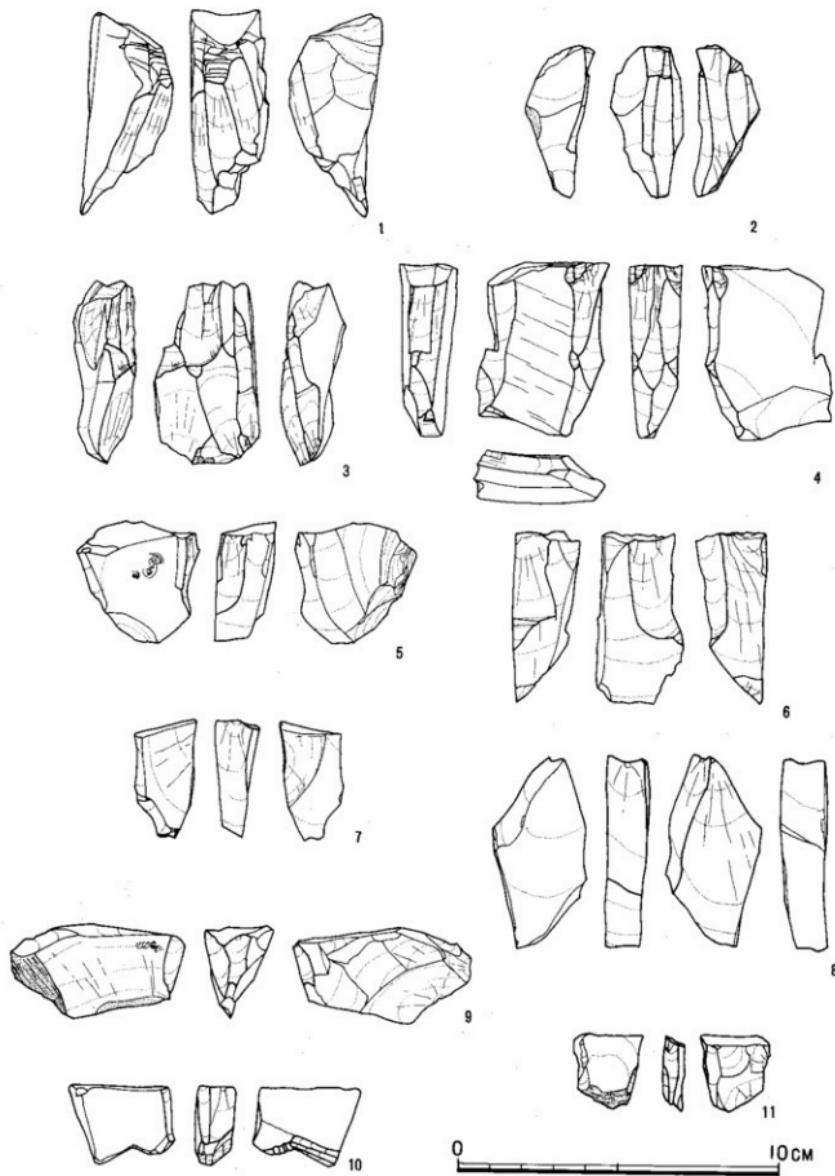
図版 12 縦長削片

0 10CM

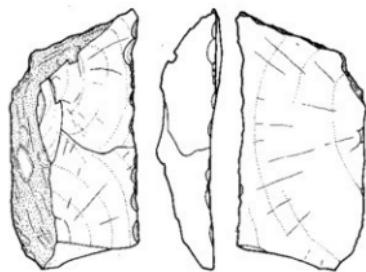


図版 13 縦長 制 片

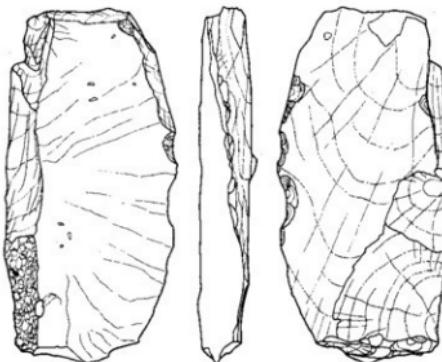




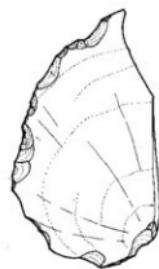
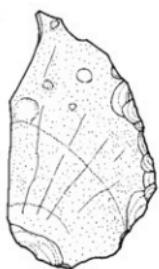
図版 14 縦長削片石核



1



2



3



4

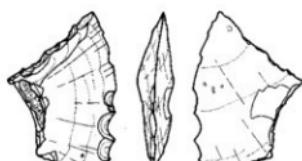


0

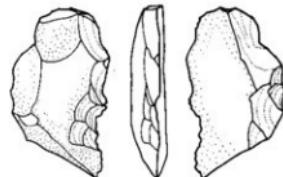


10 CM

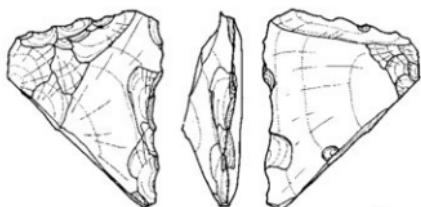
図版 15 スクレイバー



5



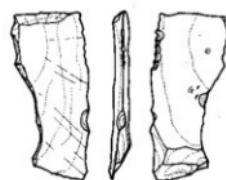
6



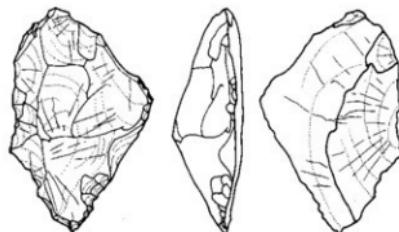
7



8



9



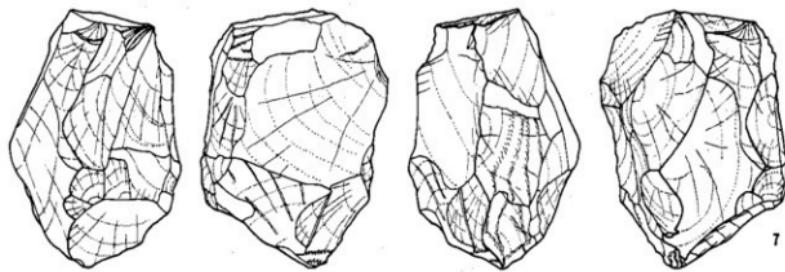
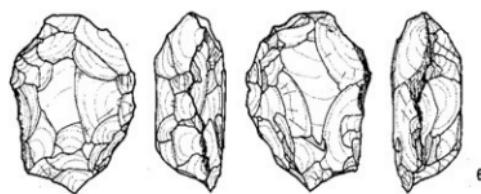
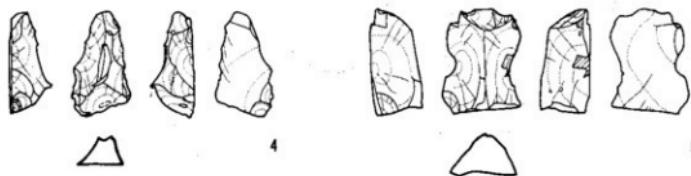
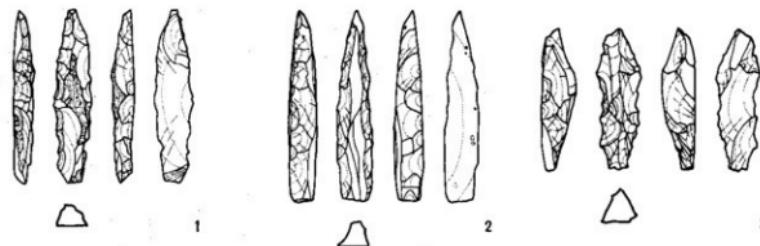
10



0

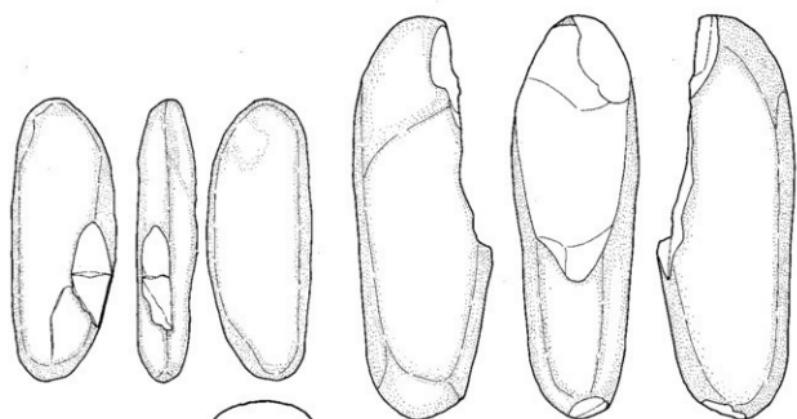


図版 16 スクレイバー



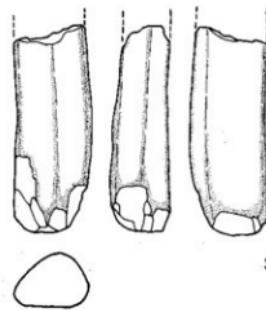
图版 17 舟底形石器・円盤状石核

0 10CM

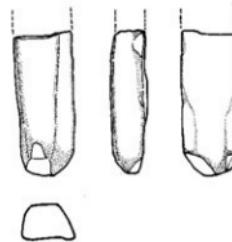


1

2



3



4

図版 18 叩 吉 石





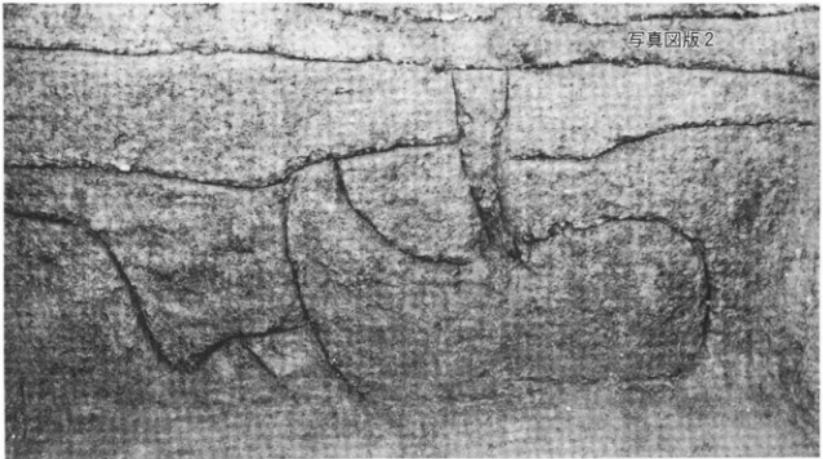
A 地区
第1・2調査区群



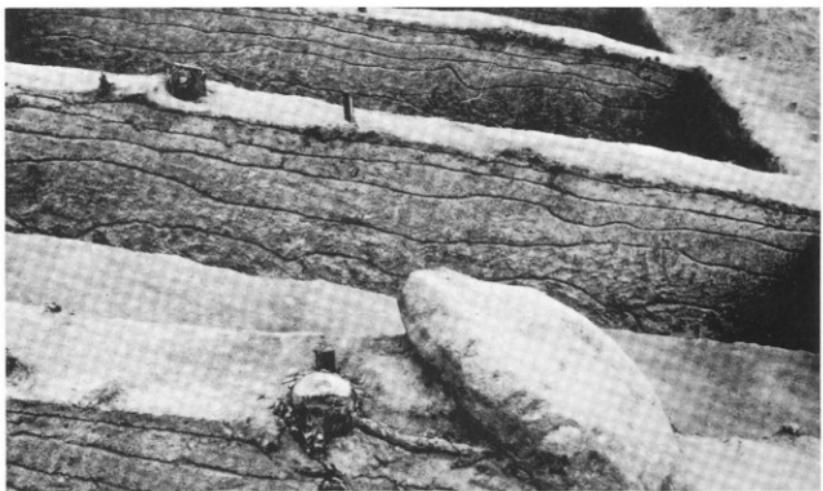
A 地区
第3調査区群



A 地区
第4調査区群



Aho区 北壁



Ah3・4区 北壁



Ah7・8区 北壁



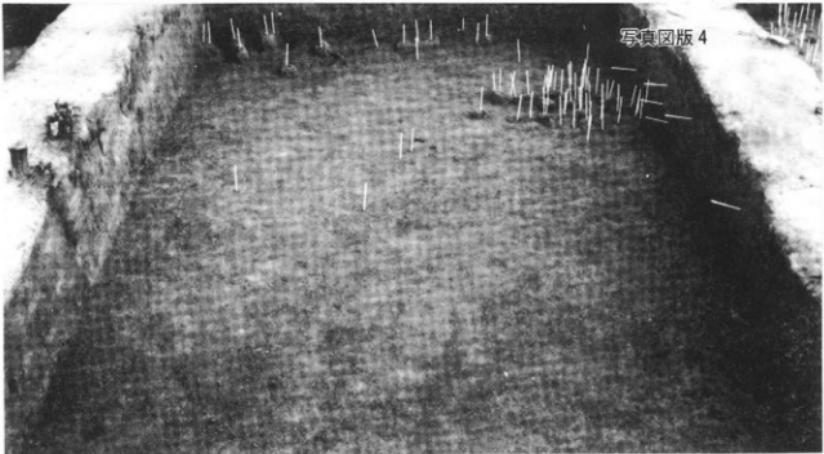
Af1・2区
(第4面)



Af1・2区
(第6面)



Af1・2区
(第9面)



Ag2区 第12面
(ピット2検出)



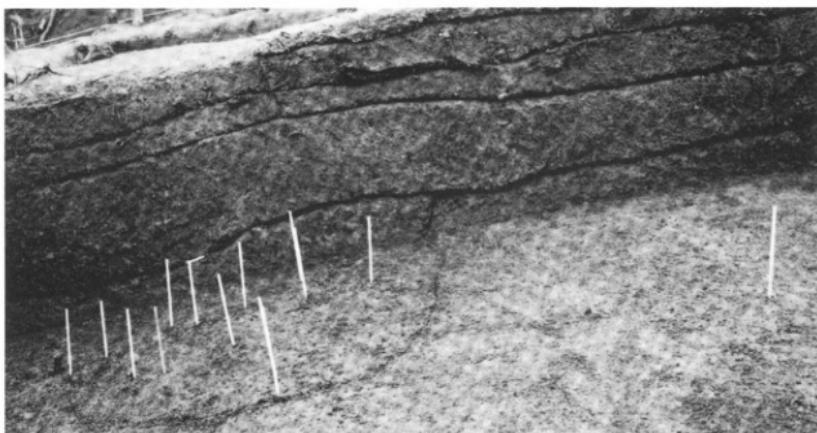
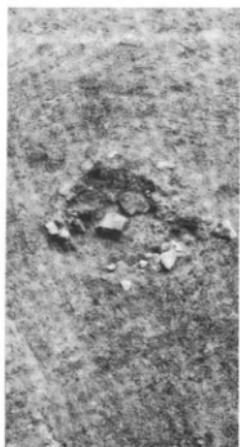
IC区第1面



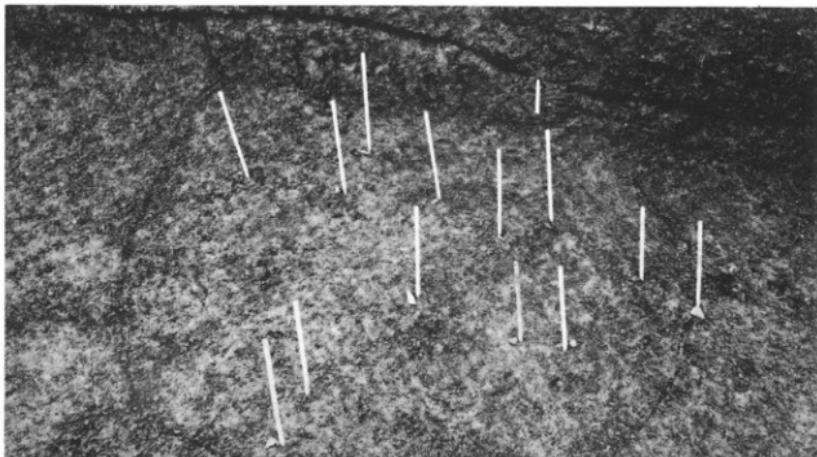
Aqo区第2面



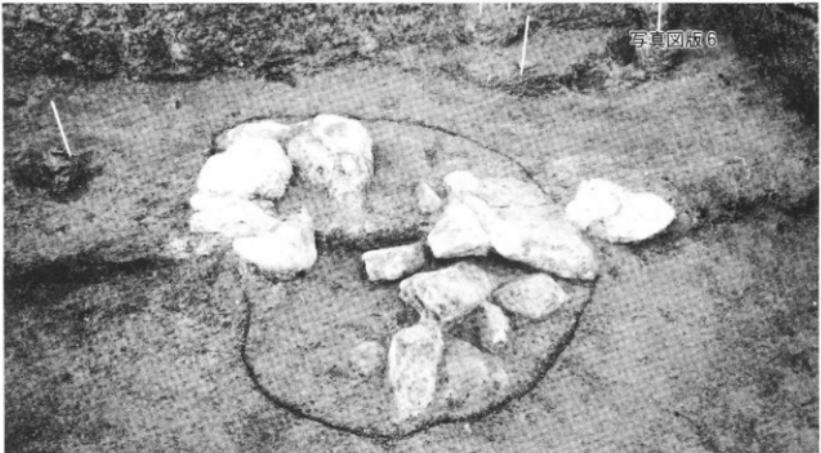
ピット 1



ピット 2



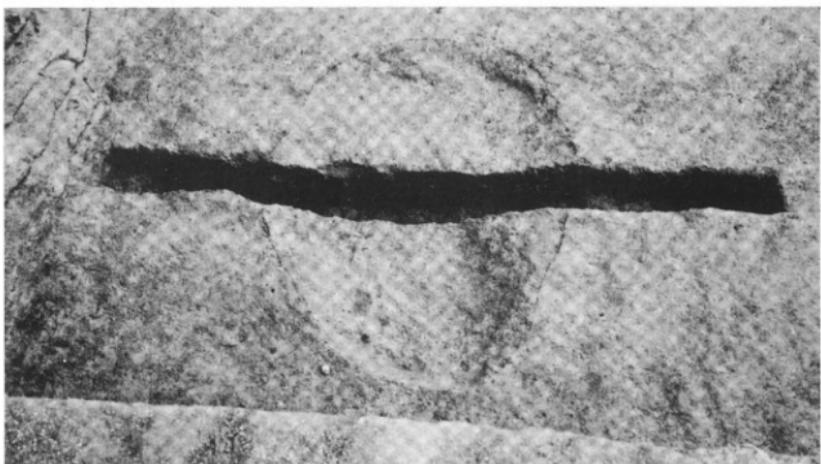
ピット 2



ピット3



ピット3



ピット3

ナイフ形石器
スクレイバー石錐
(Ae₂ 区)

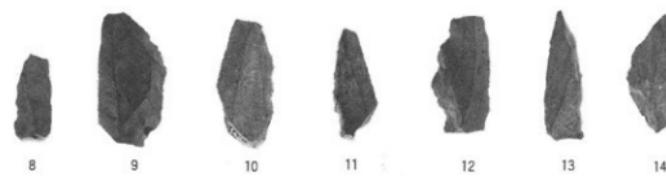
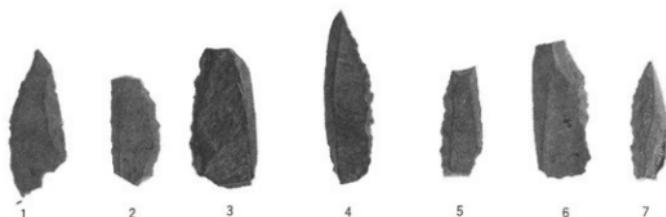


翼状剥片
(Ac₁ 区)



石核・叩き石
(Ae₁ 区)





ナイフ形石器（A型）